

て話し合ひました。彼等は答へました。「あれから私どもは父王の許へ参つて、貴方が姫の御殿に上がられたまゝ、お歸りがないので、私どもには不審でならぬ旨を申し上げました。王はそれを聞かれて、直様軍隊をお集めになつて、當國へ出陣したので御座います。所が、到着して見ると、かやうな嬉しい幸ひなことに出遇つたので御座いますよ。」で、彼は彼等に申しました。「始めにも、終りにも好運がお前方を護つてゐたのだよ。」

その間に、國王は娘のゾーニヤ姫の許へ参りました。見ると、姫はター・ジェル・ムルークのことを想つて泣いて居りました。彼女は劍を取つて、その柄を床の上に置いて、自分の鳩尾へ刃先を向けながら、「私どうしたつて死ぬんだ、愛人の後にひとり生き存へてはゐられない。」と言ひさま、あはやその上に突伏さうとして居りました。彼女の父は這入つて来て、それを見ると、大きな聲で申しました。「お、あらゆる國王の娘の中でも最も勝れたる者よ、まあお待ち！　そして、お前の父とお前の國の人民とを可哀さうと思つてお遣りなさい！」かう言ひながら、彼女の傍に走り寄つて、彼女に申しました。「後生だから、何卒そんな真似をしてお呉れでない。若しもお前の身に萬一のことがあったら、阿父さんは何んな不幸な目に遭ふか知れないからね。」それから彼は事の次第を彼女に語つて聞かせました。そして、彼女の愛人なるスレイマーン・シャー王の子息が彼女と結婚の披露をしたいと言つて居る旨を告げながら、なほそれに附け加へて、「許婚や結婚のことは、一切もうお前の心持

次第に任かせるらね。」と申しました。彼女はにっこり笑つて申しました。「だから、あの方は帝王の子だと私が申したでは御座いせんか。私はあの方に頼んで、阿父さんを白銀二片位の値打しかない木の十字架に懸けて貰ひませうよ。」「大神にかけてお前に頼むよ。」と、彼は叫びました。「お前の阿父さんの上に慈悲を懸けておくれな！」「ぢや、あの方の許へ行つて、こゝへお連れ申して下さい。」と、彼女は申しました。彼は答へました。「頭と眼にかけて。」で、彼は急いでその場を去つて、ター・ジェル・ムルークの許へ行きながら、彼女の言葉を傳へて彼を喜ばせて遣りました。それから一緒に立ち上つて、又彼女の許へ参りました。彼女はター・ジェル・ムルークを見ると、阿父さんの前も憚りなく、彼に飛び附いて、首玉に獅囁みつきながら、「貴方がいらつしやらなかつたので随分淋しかつたのですよ。」と申しました。それから父親の方を向いて、「誰がこんな美しい若い方に、しかも王様に、王様の子息さんに危害を加へることが出来ますか。」と申しました。シャー・ゼマーン王はそれを聞くと、外へ出て、戸をびつしやり閉めて、ター・ジェル・ムルークの父の宰相や使者達の許へ行つて、スレイマーン・シャー王へ彼の子息は無事に、機嫌よく、楽しい日を送つて居られると傳へてくれと申しました。それから又食糧を搬んで、帝王スレイマーン・シャーの軍隊に供給するやうに命令を下しました。彼は又駿馬百頭、駱駝百頭、侍者百人、後宮女奴隷百人、黒人の男奴隷百人、女奴隷百人を贈物として彼に贈りました。

彼はそれから國中の諸侯並びに重なる扈從の人々を隨へて、スレイマーン・シャー王の許へ出懸けました。一同都の外に歩を進めますと、帝王スレイマーン・シャーもかくと知つて、それを出迎へるために、五六歩進み出でました。それより前に、宰相とアジーズとは、今までの消息を王に傳へて置きました。王は非常に喜んで叫びました。「俺の子息にその希望を達することをお許し下さつた神に讃美あれよ。」で、彼はシャー・ゼマーン王を抱擁して、自分の側の座場に坐らせながら、少時會話を取り交しました。その後で召使どもは彼等の前に食物を搬んで來ました。で、心行く許りそれを食べるとき、彼等は又糖果を搬んで參りました。間もなく、ター・ジェル・ムルークは美々しい飾りの附いた衣裳を着けて遣つて參りました。父王はそれを見ると、立ち上つて出迎へながら、わが兒に接吻いたしました。坐並ぶ一同も立ち上つて彼を出迎へました。彼は少時の間そこに坐つて一緒に會話をしました。居りました。その時スレイマーン・シャー王は申しました。「私は證人の面前で、私の子息と貴方の娘御との結婚の契約を取り結びたいのですがね。」シャー・ゼマーン王は「承知いたしました。」と答へました。そこで司法官や證人どもを召寄せて、その場で結婚契約書を作らせました。軍隊はそれ聞いて歡呼の聲を擧げました。シャー・ゼマーン王は早速娘の爲に結婚の支度を調へに懸りました。その時ター・ジェル・ムルークは彼の父に申しました。「眞個アジーズは親切な人です。私のためには随分力になつてくれましたよ。自分の身の疲れるのも厭はず、私と一緒に長い旅をして、いろいろ

ろと私を慰めたり勵ましたりしながら、たうとう私の目的が達せられて、本望を遂げるやうにしてくれました。そして、全二年の間故國を離れて、私達と一緒にゐたのです。で、私はかうして遣りたと思ふのですよ——彼のために商品を調へて、一刻も早く故國へ歸して遣りたい。此處からは彼の故國は遠くないのですからね。」彼の父は答へました。「お前の考へは至極結構だね。」そこで最も高價な織物を百駄彼のために用意して遣りました。ター・ジェル・ムルークは彼に別れを告げて申しました。「お、わが兄弟よ、この品々を贈物として受け取つて下さい。」彼はそれを受け取つて、彼と彼の父親の前の地に接吻いたしました。ター・ジェル・ムルークはそれから馬に跳がつて、三哩許りアジーズを見送りました。アジーズはそこで彼にもう戻つてくれるやうにと、しきりに辭退して申しました。「阿母のことがなければ、私は逆も貴方とお別れすることは出来ませんのですがね。大神にかけて、何卒この後とも時々御様子をお聞かせ下さい。」かう言ひながら、彼は王子に別れを告げて、自分の都へ歸りました。家へ歸つて見ると、母親は彼のために家の真中に墓を築いて、朝夕お慕參りをして居りました。で、彼が家に這入つた時にも、母親は髪を解いて墓の上に振り掛けながら、涙を流して次のやうな詩を誦して居りました。——

大神にかけて、お、墓よ、吾子の美しさは滅びしや、あの輝ける顔は變り果てしや。

お、墓よ、そちは花園にもあらねば、大空にもあらじ。さらば、いかにして満月と花とを  
そちの中に合せ得んや。

彼女はそれから呻いて、又他の詩句を誦しました。が、それを誦し終らぬうちに、アジーズが彼女の傍へ参りました。彼女はそれを見ると、立ち上つて出迎へながら、彼を抱擁して、長い間留守にした理由を訊ねました。で、彼は彼女に初めから終ひまで、ありし事どもを審かに語つて聞かせました。そして、ター・ジェル・ムルークが百駄の財貨を自分に呉れたことを話しました。彼女はそれを聞いて大いに喜びました。——これがアジーズの物語で御座います。

さてター・ジェル・ムルークは自分の戀人なるゾーニヤ姫の許へ歸りました。シャー・ゼマーン王は彼女が良人や舅と一緒に長い旅に上るために、彼女の支度を調べて遣りました。彼は又彼等に食糧だの贈物だの珍寶だのを贈りました。彼等はそれを馬や駱駝に載せて出發しました。シャー・ゼマーン王は一行を見送るために、三日の間彼等に隨つて旅をいたしました。スレイマーン・シャー王はその上の見送りを辭退いたしました。で、彼は立ち歸りました。それから、ター・ジェル・ムルークは父親や妻と一緒に日夜旅を續けて、二たび故國の山川に接しました。都は彼等のために裝飾されました。一同はその都に這入りました。スレイマーン・シャー王は子息のター・ジェル・ムルークを側に引

き附けながら、王座に即きました。彼は臣下どもに土産物を與へ、牢に入れられてゐる人々を赦してやりました。それから子息のために結婚の二度目の祝賀を催しました。全一箇月の間歌を唄つたり、器樂を奏したりしました。髮結女どもがゾーニヤ姫の周圍に群り集つて参りました。彼女は疲れるのを忘れて、その光景に見惚れました。彼等も又疲れるのを忘れて彼女に見惚れて居りました。ター・ジェル・ムルークは阿父さんや阿母さんとの會見を遂げて後、ゾーニヤ姫と一緒に住むやうになりました。そして、あらん限りの快樂を盡くして、一生を幸福に過しました。

### カマル・エズ・ゼマーン王子とブゾーア王女の物語

#### 第七十夜を以て始まり第二百四十九夜の一部を以て終る

昔、シャー・ゼマーンと名づけた王様が御座いまして、非常に澤山の軍隊と侍者と衛兵とを持つておいでになりました。この王様は、波斯の國に近いカーリダーンの島に住んで居られました。そして王様達の姫君を四人も娶つた上に、數多ある女奴隸の中から六十人の側妾を持つて居られました。所が、段々年老つて、骨も細つて参りましたのに、子息を一人も授けられませんでした。で、頻りに考へ込んで哀しがり、且心細がつて居られました。彼は宰相の一人にこの事を啣ちながら、「私が死んだら、この王國は潰れてしまひはせぬか、それが心配になる。私には後嗣の王子がないのだもの。」と

申されました。すると、宰相は答へて申しました。「恐らく神様がこれから何事か起るやうにして下さいませう。ですから王様には、神様にお縋りなさいませ。そして、齋戒沐浴をなされて、二レカアの祈禱をお上げなさいませ。それから又私はかういふことをお勧め申したう御座います。宴會をお開きなされませ。そして、貧乏人や難儀な者を招き寄せて、御馳走してお遣りなされませ。そして、彼等をして王様へ男兒をお授け下さいませ。若一とすると、その者達の中に清い魂の者があつて、心直なるがたるやうにして御覽なさいませ。若一とすると、その名は稱ふべきかな。お祈りを上げさせめにその祈りが聽かれることも御座いませうから。で、かうして貴方様のお望みは達せられるかも知れませぬ。」王様はこの勸告をお取り上げになりました。所が、その夫人は懐胎して、月満ちて、暗夜に曇りのない満月を見るやうな男の子を生み落しました。で、王様はその子にカマル・エズ・ゼマーンと言ふ名を附けました。王様は男兒の出産を大層悦ばれました。都では七日の間町の裝飾をいたしました。太鼓を叩いたり、この喜びの報知に使者を諸方に立てたりいたしました。乳母や取上婆でその兒の守護をいたしました。そして、その兒が十五歳になるまで、豊裕に慈しみ育てました。王子は常人に立ち優つて綺麗で、可愛らしく、姿、形も整うて居りました。父王はその兒でなくては夜も目も明けないやうに可愛がりました。で、或日シャー・ゼマーン王は宰相の一人に、子が可愛くてならないことを訴へながら、「お、宰相よ、私は王子の無事息災が案じられてならない。で、私

の生きてゐる間に結婚させて置きたいと思ふがね。」と仰有いました。そこで宰相は答へました。「いかにも御結婚は結構なことで御座います。貴方様の御在世中に王子様を御結婚おさせ申して決して悪いことは御座いませぬ。」シャー・ゼマーン王はこの言葉を聞いて、「では、子息のカマル・エズ・ゼマーンを私の許へ連れて来てくれ。」とお吩咐になりました。王子はやつて参りました。そして、父王の前に畏つて、頭を低く垂れながらお辭儀を致しました。父王はその時申しました。「お、カマル・エズ・ゼマーンよ、俺はな、お前に結婚させて、俺の存命中お前に安心させて貰ひたいのぢや。」所が、彼は答へました。「お、父上、私に結婚する必要は御座いませぬ。私の心は婦人の方に向つて居りませぬ。私は婦人といふものが嘘つきだといふ物語を書いた書物を見ましたが、奇蹟とは婦人の奸計で出来るものだ」と書いて御座いましたよ。詩人もかう申しましたよ。——

婦人に就きての意見を求めらるゝならば、我は婦人の内情を知悉せる醫師なりと答へむ。  
男子は頭灰色になれば、さなくも富の減少するならば彼は婦人の愛情の分前に預るを得ず。

又もう一人の詩人の歌にはかうありますよ。——

婦人に敵對せよ、かくして汝は適當に神の御旨に従ひ得るなり。されば婦人の手綱を弛める青年は終に榮えざらむ。  
かゝる青年は、たとひ學究に一千年を費やすとも、婦人のために妨げられて、終に優越の域に達する期なからむ。』

こんな詩句を誦してから、彼は又附け加へて申しました。「お、父上、たとひ永遠の死の盃を飲ませられませうとも、私は斷じて結婚は致しませぬ。」シャー・ゼマーン王は子息のこの言葉を聞いた時、自分の前に射してゐた光が急に暗くなつたやうな氣がして、カマル・エズ・ゼマーンが自分に對して服従する意志のないことを表明したのを非常に悲しがりました。が、それでも彼に對する愛情から、再び同じことを繰り返しもせねば、又それで腹も立てませんでした。それどころか、反對に、一層深く恩愛を加へ注意を拂つて、何うかして彼が自分に懐くやうにと仕向けて居りました。

そのうちに、カマル・エズ・ゼマーンは一日と美しき愛らしき、舉動の優雅さと柔和さを増して來ました。シャー・ゼマーン王は王子が、辯舌も態度も一點非の打ち所のなくなるまで、丸一年の間ちつと黙つて見て居りました。今や彼の美しさは人間といふ人間を惱殺しました。微吹く風はいつも彼の愛らしさを讚美する聲を吹き送りました。彼は戀人には誘惑となり、熱愛者には樂園のやうになりました。その言葉は耳に心よく、顔色は満月も恥らふ程で御座いました。姿、形がよく整つて、舉動の優雅で、人を惹きつける愛嬌のあることは、東洋の柳か印度の竹によく似て居りました。又その頬の色はアネモネに取つて代つてもいゝ位で御座いました。詩人が彼のことを次のやうに歌ひましたが、いかにもその通りで御座いました。――

彼出づる時、人々は言ふ、大神に祝福あれや、彼をかくまで完全に造り給ひし神に榮光あれや。

彼は愛らしきもの、國の王者なり、愛らしき者どもなべて彼に服従して仕へたれば。彼の唇の濡ひは溶けたる蜂蜜の如し、彼の齒は數ある眞珠を集めし珠數に似たり。凡ての魅力は獨り彼に備はつて、あらゆる人は彼の愛らしさに心動かさる。彼を措きて他に人を魅するものなしと、美は彼の頬に書き認めたり。』

扱、又一年経つた時に、彼の父は彼を呼び寄せて、「お、我が子よ、お前は俺の言ふことを聞いてくれるか。」と訊ねました。カマル・エズ・ゼマーンはこれを聞くと、父王の面前の床の上に畏る／＼し、かも恥しげに平伏して、「お、父上、何うして貴方のお言葉に背くことが出来ませう。神様は父上の

仰せを守つて、決して背いてはならぬと私にお命じになつて居りますのに。」と答へました。すると、シヤー・ゼマーン王は申しました。「お、我が子よ。俺は存命中にお前に結婚をさせて、俺に安心させて貰つて、お前を帝玉にして置きたいのぢや。よいか。」と申されました。所が、カマル・エズ・ゼマーンは父のこの言葉を聞くと、暫くの間頭を垂れて居りました。そして、顔を上げて申しました。「たとひ、永遠の死の盃を飲ませられましても、こればかりは私に出来ない事で御座います。神様が私に父上の仰せを守るのを一つの務めとしてお命じになつたことはよく心得て居ります。神様が父上にお命じになつたことによつてお願い致しますが、何卒私に無理強ひに結婚せよと仰せ下さいませ。私は一生結婚しないものと思召し下さい。私は古人の書いたものや近頃の人の書いたものに眼を通し見ましたが、不幸とか災難とかいふものは、どれもこれも婦人のなす妨害とか、彼等の飽くことを知らない奸計とか、彼等から起つた災害に基いて居ることが分りました。詩人は巧いことを申して居るでは御座いませんか。——

恥を知らぬ女に操らるゝ男は決して救はれざるべし。  
いかに鉛にて塗り固めし城を數多く築けばとて。  
その構造は用をなさざるべし、城砦は無益なるべし。

眞に、女は遠近を問はず、何人にとりても叛逆常なきものなり。  
ヘンナもて色づけし指先にて、編みて結びし頭髮をもて、  
コールもて染めし臉もて、彼等は人に悲しみの盃を汲みて飲ましむるものなり。」

シヤー・ゼマーン王はカマル・エズ・ゼマーンの口からそれ等の言葉を聞いた時、彼は王子の引用したその詩句の意味を悟りました。そして、ただ愛しさの餘りに、何とも返答を致しませんでした。いや、却つて寵愛を増し、一層思ひ遣り深く待遇しました。父子のその會見は直ぐに終りました。そして、扈從の者どもが一同退出した時、シヤー・ゼマーン王は密かに宰相を召して仰せになりました。「お、宰相よ、王子のカマル・エズ・ゼマーンのことは一體何うしたら好からうね？、俺は彼を帝王にする下準備として、彼を結婚させることを卿に相談した。卿もさうした方が可い、結婚のことを彼に言ひ出して見よと勧めた。だから俺も言ひ出して見たのだが、彼は俺の言ふところに従はない。偕、卿は何と思ふ？、好い分別を聞かしてくれ。」宰相は答へました。「お、國王よ、何卒もう一年御辛抱なされて下さりませ。で、貴方様が王子様に結婚問題のことでお話しを遊ばされたい時には、お二人切りでなされてはいけません。それは宰相も貴族も伺候し、軍隊が残らず御前に控へて居ります、お裁きの目になされた方が宜しう御座います。王子が御

前に参られましたなら、貴族や宰相、侍従、武官、諸侯、兵士、獯猛な剣士、凡てが居流れて居ります。面前で、結婚の事を仰せ出されて御覽なさりませ。王子様は大勢の前では羞かしくなられて、貴方様に反抗なさるやうなことはよも御座りませぬ。私の申し上げたいことは、まづこんなもので御座ります。』シャー・ゼマーン王は宰相のこの言葉を聞いて、御機嫌斜ならず、この忠言をお取り上げになりました。そして、宰相には立派な譽れの衣裳を賜はりました。

シャー・ゼマーン王は王子カマル・エズ・ゼマーンに對してもう一年御辛抱になりました。所が、一日と経る毎に、王子は美しさ愛らしさを増して、優雅で品の好いこと、この上を望まれない程申分がなくなりました。そして二十の年を迎へられるの間もなくなくなりました。神は綺麗の装ひを彼に纏はせ、完全の冠を頭にお載せになりました。彼の眼はハールトよりも一層人を魅する力が御座りました。又その眼の働きはエト・ターグートより一層誘惑的で御座りました。その頬は眞紅に照り輝き、睫毛は鋭い、光つた剣をも蔑し得る程で御座りました。前額の眞白なことは皎々と輝いてゐる月によく似て、頭髮の漆黒なことは暗の夜のやうで御座りました。シャー・ゼマーン王は宰相の言葉を守つて、もう一年間、祭りの日の來るまで待つて居られました。その日、朝廷には貴族、宰相、侍従、諸侯、兵士、獯猛なる剣士など残らず出仕して居りました。王は早速王子カマル・エズ・ゼマーンをお召し寄せになりました。王子は父王の面前に参りますと、床に三度接吻して、兩手を背後に組

んで、父王の前に立ちました。すると、父王は申されますのに、『お、我が子よ、かく一同が集つて、軍隊も全部出仕せるこの機会に、お前を招び寄せたのは、一つの命令を與へようためである。お前は今俺の言ふ所に背いてはならぬぞよ、よいか。それは何かと言へば、俺は何處かの王家の姫をお前に配せたいのぢや。そして、俺の存命中にお前に安心させて貰ひたいのぢや。』カマル・エズ・ゼマーンは父王のこの言葉を聞くと、少時頭を低く垂れて居りました。が、やがて父王の方に向つて頭を上げると、青年の血氣に驅られて狂ほしく、若輩の世の中を知らぬ無知に任せて、『私はと申せば、たとひ永遠の死の盃を飲ませられましても、結婚は致しませぬ。貴方はと申せば、もうお年を召された、感じの鈍いお方です。これまでに二度も結婚のことで私にお尋ねになつたではありませんか。そして、私はその御相談に乗らなかつたのではありませんか。』と言つて、背後に組んでた手を離して、父王の面前で、怒りに任せて、兩袖をぐいと高く捲くし上げました。

父王は面喰つて大いに萎げ返りました。祭日の諸侯、兵士の居並ぶ面前で、こんな事が起つたので御座いますから無理も御座りませぬ。が、忽ち王者たる元氣を回復して、侍者に王子を引つ捕へよと下知を下されました。で、侍者達は王子を捕へました。王は彼の手を背後に縛り上げよと命ぜられました。で、その通りに致しました。そして、父王の前に引き据ゑました。王子はいかに成行くことかと空怖しく、おづくくと頭を垂れて居りました。顔や前額は汗びつしよりになりました。そして、恥

しさに氣も顛動して居りますと、父王は彼を散々に罵りながら「下司生れの、卑しい育ちの者め、貴様に禍あれよ。よくも俺の兵士どもや軍隊の前で、酒啞々々としてそんな返答が出来たものだ！ 貴様のやつたことは、それが普通の人民の口から出たとしても、不名譽のことであるのを知らないのか。」と呶鳴りつけました。それから、彼は侍者に命じて、王子の背後に縛り上げた手を解かせた上、城の古塔の中に監禁せよと仰せになりました。宮丁は直様塔の中の廣間に這入つて、すつかり掃除をした上、床の石盤に雑巾がけをいたしました。そして、カマル・エズ・ゼマーンのために、長椅子を備へつけて、その上に蓆を敷き、革の被ひをかぶせて置きました。それから又、座褥だの、大きな提灯だの、蠟燭だのを用意致しました。此處は晝間でも暗いのです。侍者はカマル・エズ・ゼマーンを廣間に案内しました。そして、一人の宮人に命じて戸口の番をさせました。カマル・エズ・ゼマーンは全然勇氣を失つて、傷ましい胸を抱きながら、しをくと長椅子の上とその體軀を横たへました。彼は既に自分の身を責めて、父王に對する非行を後悔して居りました。が、幾ら後悔しても、もう役に立たないと思ふと、「結婚よ、娘達よ、偽り多き女子どもよ、呪はれよ！」と叫びました。「ああ父上の仰せを守つて結婚したら可かつたに。さうすれば、こんな牢の中に居るよりも優しであつたらうに！」——カマル・エズ・ゼマーンの方にはこんなことが起つて居りました。所が、一方彼の父の王はその日日暮れまで玉座の上に坐つておいでになりましたが、宰相と共に奥

殿へ引込まれる時、宰相に向つて次のやうに仰せになりました。「お、宰相よ、今日俺達父子の間に起つた出来事は卿の與へた忠言に依つて出来たことで、原因は卿にあるのぢやぞ、よいか。偕卿は俺に今度は何うせよと申すのぢや。」宰相は答へました。「お、國王よ、王子様は十五日の間あの儘牢にお入れ置きを願ひます。それから御前にお招出しになつて、改めて結婚なさるやうに申渡して下さいませ。その時は決してお吩咐にお背きになりますまい。」で、王は宰相の此提言を容れられました。そして、その夜は王子の身を思つて心を悩しながら眠られました。何しろ王は王子を殊の外に御寵愛になつて居られたのでしたからね。それと申すも、他に王子が一人も御座いませんからです。シヤー・ゼマーン王は、毎夜カマル・エズ・ゼマーンを抱き寄せなくては睡れない癖がついて居りました。それ故、その夜は王子のことを思つては、心を搔亂されて、何時までも睡れず、地獄の底でまだ燃え残つてゐる餘燼の上に寝てゐるやうに、轉々と動廻つて居りました。終には不安に壓倒されて、夜中一睡も致しませんでした。彼は、潸然と泣いて、詩人の歌つた次のやうな詩句を繰り返しました。——

讒者すら眠りに就きしに、我が夜は徒らに長々し。別離の恐怖にて最早十分なるものを。  
思ひ惱みては夜も一層長々しきに、我は叫びぬ——お、朝の光よ、汝はいまだ歸り來らざるか。



カマル・エズ・ゼマーンの方はと言ふと、夜になつて、宮丁どもが提灯を燈したり燭臺に蠟燭を立てたりいたしました。それから少し許りの食物を持つて來ました。で、彼はほんの少々それを食べました。そして、父王シャー・ゼマーンに對する不行跡を自ら良心に恥ぢながら坐つてゐました。そして、『凡そアダムの子孫なる人間は皆自分の舌次第で榮えるものだが、その人間の舌は又自分を裏切つて危険に陥れるものだといふことを私は知らないのか。』と獨り言して居りました。かやうに何時までも自ら恥ぢて、自分で自分を責めてゐる間に、到頭堪へられなくなつて泣出しました。傷める胸は益々苦しんで、父に向つて自分の舌の逆らつたことが、限りもなく悔まれました。で、食事が終へてから、手を洗ふ水を求めて、食物のために汚れた手を洗ひました。それから祈禱を上げるために、まづ沐浴を致しました。そして、日没と夜更の祈禱文を誦しました。それから又長椅子の上に乗つて、聖典を誦しました。「牡牛」「エムラインの一家」「ヤー・シーン」「同情者」「その手の中に王國を握れる者は幸ひなり」「豫防劑二種」の各章を誦して、最後に祈願を籠めて、神の中に休ぎを求めました。かくして、彼は長椅子の上に身を横へました。長椅子にはマーデイニーの縞子を表皮にして、駝鳥の羽毛を詰めた蒲團が敷いてありました。で、いよく睡りに就かうとした時、彼は上衣を脱いで、薄い蠟引きの襯衣一枚で、顔にはマルウ織の淺黄色の半帛をかけて眠りましたが、恰度満月の前夜の月のやうに見えました。それから又體軀には一枚の絹を被けて、足許に提灯を點火し、枕頭

に蠟燭を點けて置きました。そして、其夜の三分の一は何んなことが自分の身に振りかゝつてゐるかも知らないで熟睡いたしました。その間に如何なる隠れたることをも知らざるなき神様が、彼の身に下し玉うたことがあつたので御座います。

所で、この廣間も塔も古いもので、數年間荒れ果てたまゝで御座いました。そして、塔の中にはローム風の井戸があつて、その中には呪はれたるイブリードもの後裔なる女火靈が住んで居りました。この女火靈の名はメイムーネエと言つて、火靈の王様中では名の聞えた方のエード・デイミリヤートの娘で御座いました。カマル・エズ・ゼマーンがその夜の三分の一過ぎるまで熟睡した時、この女妖魔は、天使の話を密に盗み聞きする爲に天へ昇らうと井戸から上つてまゐりました。所が、井戸の上部に來ると、何時になく燈光の塔の中に輝いてゐるのが見えました。彼女は此處に長の歲月住居して居りました。が、こんなことは未だ一度も見ることがないので御座いました。で、彼女は、『これは何か變つた出來事があつたに違ひない。』と獨語を言ひながら、非常に不思議がつて居りました。それから燈光の射す方へと近寄つて行くと、それは廣間から射して居るのでした。で、その廣間に這入りました。見ると、戸口の許に一人の宮丁が睡つて居りました。それから室内を見渡すと、長椅子が横たへてあつて、その上に人間が眠つてゐるので御座います。枕頭には蠟燭を點火して、足許には洋燈が點けてありました。女魔靈はこの燈光を怪しみながら、靜にそれに近づいて行つて、自分の翼を收めなが

ら、長椅子の傍に立ちました。そして、彼の顔から半帛をはねのけて、その顔を見遣りました。彼女は、その美しさに、愛らしさに見惚れて、一時間も呆然として居りました。その顔の光は蠟燭のそれも遠く及ばない程で、眼は羚羊の眼のやうに愛らしく、眞黒で御座いました。頬は赭く、光つてゐましたが、臉は物思ひに惱んでゐるやうに力がありませんでした。眉毛は弓を張つたやうで御座いました。體軀からは好い香水のやうな芳香を放つて居りました。エド・デイミリヤートの娘なるメイム・ネエは、彼の姿を見て、神の完全性を讚美しながら叫びました。「造物者の中にも最も勝れたる大神に祝福あれや！」——この魔靈は信仰を持つた火靈の一人だつたので御座います。彼女は、尙もカマル・エズ・ゼマーンの顔に見惚れて、「神の外に神性はない！」と叫びながら、自分も彼のやうに美しく、愛らしくなりたいたいものと、嫉ましさからではなく、たゞしみくくと願ひました。彼女は心の中に、「大神にかけて、私はこの人に害を加へまい、又誰にも害を加へさせないやうにさせよう。そして、危難からは必ず救ひ出して上げよう。こんな綺麗な顔と言ふものは、人々がそれを見て、神の完全性を讚め稱へる外に何うもしてはならないものだ。だが、この人の家族は何うしてこんな荒れ果てた處へ打棄り放しにして置くのだらう？ 誰か私達の仲間の妖魔が此處へ遣つて來れば、この人を殺してしまふだらうにねえ。」と言ひました。女火靈は腰を屈めて、王子の眼の間に接吻をして、再び布帛を顔の上に被けました。

それから、彼女は翼を延ばして空高く飛んで行きました。彼女は廣間の入口から飛び上つて、大空を目蒐けて翔つてゐるうちに、天國の一番低い處に近づきました。その時空中で飛ぶ羽ばたきの音を聞きました。で、その音のする方に進んで行つて、それに近づいて見ると、それはダーナーシと呼ぶ魔靈で御座いました。で、彼女は鷹のやうに彼に飛びかかりました。ダーナーシは彼女に氣が附いて見ると、ジンの王様の娘のメイム・ネエでしたので、恐ろしくなつて、がたくと顛へ出しました。それから彼はメイム・ネエの御機嫌を取つて、「いとも尊き御名によつて、又スレイマーンの玉璽の上に彫りつけられた、いとも氣高き呪符によつて願ひ奉る。何卒私に仁慈をお懸け下さいまして、私を傷つけないで下さいませ。」と申しました。メイム・ネエはダーナーシのこの言葉を聞くと、彼に對する温情に動かされました。そして、申しました。「お前は立派な誓ひを立て、私に頼んだが、お前は今何處から來たのか、それを言ふまでは放して遣らないよ。」彼は答へました。「お、奥様、私は支那の國のずつと向うの端れから、ある島の間から參りましたもので御座いますよ。今晚私が見て參りました珍しいことをお話し致します。私の申上げることが嘘でないとお分りになつたら、何卒私の思ふ處へ行かして下さいませ。又貴方のお手で、私は貴方から自由にされた奴隷だと言ふことを證書に認めて頂いて、上空を飛ぶ者も、下空を飛ぶ者も、水を潛る者も、苟もジンの一隊の者は私に敵對いたしませぬやうにお計ひ下さいませ。」メイム・ネエは彼に向つて、「お、ダーナ

「シよ、今夜何を見て来たのか、それを私に話して御覽。私の手から遁げようと思つて、いゝ加減な  
諛を言ふことはなりません。私はダウードの子息なるスレイマーン（その兩者の上に平和あれよ）の  
玉璽の石に彫りつけられた銘によつて誓ふが、萬一お前の言ふことが眞實でなかつたら、私はお前の  
羽を引抜いて、骨を挫いてしまひますぞ。」と脅しました。シユムフリーシの子息なる魔靈ダーナー  
シは彼女に向つて、「宜しう御座ります、私の申す所に偽りがありましたら、何うなりと貴方のお心  
のまゝになされて下さいませ、お、我が夫人よ。」と言ひながら、次のやうな物語りを致しました。  
私は今晚、支那地方の内部の島から遣つて参りました。此處は諸島、近海、七宮殿の王なる國王  
エル・ガーユーアの領分で、今晚私はその王様の姫を見て参りましたが、あの位の年齢の娘をあれ  
程綺麗に神様がお創りなされたのは他に御座いますまい。此處で貴方様に何うその女のことをお話し  
したら可いか、私の舌では逆も六かしさうで御座いますよ。ですが、出来るだけその特徴を擧げて  
お話し致します。先づ髪は移住と別離の夜のやうで、顔は結婚の書のやうで御座います。詩人も彼  
女のことをかう歌つて居りますが、誠にその通りで御座いますよ。――

彼女はある夜、髪を三束に分けぬ。かくして四つの夜はそこに現はれたり。  
彼女は天を仰ぎて、月にその顔を向けぬ。かくして我は一時に月を二つ見たり。

それから研ぎすました劍の刃のやうな鼻を持つてゐて、頬は眞紅の酒又はアネモネの花のやうで、  
唇は珊瑚と肉紅玉髓に似て、口より洩れる露は最上の酒よりも美味で、怒りに燃え立つてゐる人の  
心をよく鎮めることが出来る程で御座います。舌は豊かな智慧に依つて、いつも早速の返答に軽々と  
動いて居ります。胸の恰好は見る人を誘惑せずには置きません。――これを創り且完成したまひし神  
の完全性は讃め稱ふべきかな。――胸の兩側には、滑かな、丸々した腕がついて居ります。そして詩  
人が申しましたやうに、――

彼女は細き腰に連なる大いなる臀部を有つ。そは吾と彼女と二人ながら苦しむるものなり。  
吾それを想ひ遣る時わが心亂れ、彼女立たんとする時そが重たさに彼女を立たせざれば。

彼女の他の美點はもう數へ切れない程澤山御座いますよ。たゞ私が今擧げたやうなものを悉く  
我等を護り給ひ、且報はせ給ふ創造主の作なる二本の織酒な足が支へて居るのですが、何うしてあれ  
だけのものを支へることが出来るか不思議な位で御座いますよ。他の點はもう略します。逆も言葉で  
表すことも出来なければ、何んな象徴を持つて來ても正しくそれを傳へることは出来ませんからね。  
この乙女の父親は偉大な國王で、（ダーナーシは語りつゞけました）又獍猛な騎士で、死も怖れなけ

れば、敵の遁げるのも物ともしないで、日夜近隣の領海を駆け廻つてゐました。又専制の暴君で、苛酷な勝利者で御座います。そして、無数の軍隊や、領地、島々、諸市及その住民の君主で御座いますよ。彼の名はエル・ガユーア王と申して、諸島、近海、七宮殿の主で御座いますよ。所で、この王様が今私のお話しした自分の娘を可愛がること、言つたら又大したもので、他所の王様の寶物を奪つて来て、それを集めて、娘のために、七種の宮殿を建て、遣るといふ騒ぎで御座います。第一が水晶の御殿で、第二が大理石、第三が支那鐵、第四が縞瑪瑙と寶石、第五が銀で、第六が金、第七が寶玉なので御座いますよ。そして、この七つの御殿には種々な素晴らしい調度や、金銀の皿や、その他王様でも欲しがらるやうな、ありとある道具や器物が一杯に飾られてあります。一年の中幾月かづ、その御殿へ姫を住まはせて、次から次へと順々に移つて行くやうに吩咐かつてゐるのださうで御座いますよ。お姫様は名をブツア女王と申されます。このお姫様の美しさが評判になつて、附近の國々へその噂が傳はると、諸方の王様が彼女を嫁に欲しいと言ふので、その父なる國王の許へ使者を寄越すので御座います。所が、王様が結婚の話をお姫様に持ち出すと、お姫様は大層嫌がつて、『お父上よ、私はどうしても結婚する氣にはなれません。私は王の娘で、女皇として男の上に臨んで、それを支配して居るので、男に支配されたくは御座いませんから。』と言はれるのださうで御座います。しかも、このお姫様が結婚は可厭だといふ素振を見せれば見せる程、是非にと欲しがつて来るお智様がかも、

増すばかりで、支那の内部諸島の王様達は擧つて、贈物や珍貴なものに手紙を添へて、何卒お姫様を妻に申し請けたいと言つて来るので御座います。で、王様はお姫様に何度も『結婚の話を言ひ出して見るのですが、お姫様はちつとも言ふことを聽かないばかりでなく、しまひには腹を立て、『もう二度と再び結婚のことを私に仰有れば、劍を取つて、柄を床の上に、切先を上向けて私の胸に當てがひながら、その切先が私の背中まで突き通るやうに、それに飛び附いて死んでしまひますよ。』と言はれるので御座います。父の王はこれを聞くと、自分の目の前が急に暗くなつたやうな氣がして、お姫様のために一方ならず胸を痛めました。何しろお姫様に自殺されては大變で御座いますからね。つまりお姫様のことも氣にかゝれば、お嫁さんに欲しいと言つて来た諸國の王様達のことも心配になるので、王様はお姫様に向つて、『お前が結婚がしたくないなら、これからは氣儘に出入りするとは一切なりませんぞ。』と言ひ渡ししながら、ある部屋へ彼女を連れて行つて、其處へ押籠めてしまひました。そして、カラマーネエと稱はれる老婆ども十人を附け人にして、七つの御殿を見ることはならないと禁じてしまひました。さうして置いて、王様はお姫様のことで御立腹になつた體裁にして、諸方の王様へ手紙を出して、『姫は氣が狂つて、工合が悪いから、一年間押し籠めて置く。』と申して遣つたので御座います。

魔靈のダーナーシは、右のやうな事柄を女魔靈に物語つて、又言葉をつゞけて申しました。『お、

わが夫人よ、私は毎夜彼女の許へ参ります。そして、彼女を見て、その顔の美しさにしみみ見惚れながら、寝入つてゐる時に、そつとその眼の間に接吻をして遣ります。だが、私は彼女を愛して居りますから、決して害は加へません。何しろその可愛らしさと言つたら素晴らしいもので御座いますからね。誰でもあの姫を見ると、自分に引き比べて、あまり美しいのが嫉ましくなる位ですよ。お、わが夫人よ、後生ですから、私と一緒にいらしつて、彼女の美しさ愛らしさ、形や釣合の取れてゐるところを御覧なすつて下さい。そして、その後で、私を打つなり、縛るなりして下さい。御命令なさるのも、お奪ひなさるのも、貴方の御自由で御座いますからね。」かう言つて、魔靈ダーナ―シは頭を地面に垂れながら、翼を下げて居りました。が、女靈魔のメイム―ネエはこの言葉を聞いて、からりと笑ひ、ダーナ―シの顔に唾を吐きかけながら、「お前の話のその乙女が何だ？ その女は下らぬ陶器の破片同様ぢやないか。お前は私の可愛がつてゐるものを見たら、何と言ふだらう？ 大神にかけて、私はお前が何か不思議な、變つた話でもするのかと思つてゐた、お、この呪はれた者奴が！ 私は今晚若しお前が夢にでもその人を見たら、吃驚して、體軀が麻痺してしまふだらうと思ふやうな男を見たよ。」と申しました。ダーナ―シは、「その青年は何者で御座いますか。」と訊ねました。すると彼女は答へました。「お、ダーナ―シよ、よいかえ、その青年と言ふのは、今お前の話した姫と同じやうな目に遇つてゐるのだよ。その阿父さんが、結婚せい、結婚せいと、何度も彼に迫

つたのだが、毎も謝絶つて来た。で、かう親の言ふことに背かれると、阿父さんも腹を立て、私の住まつてゐる塔の中へ押籠めにしたのさ。そして、今出がけに私は彼を見て来たのだよ。」「お、奥様よ。」と、ダーナ―シは答へました。「その若者を私に見せて下さい。さうすれば、私もその若者が私の愛人なる女王ブツアよりも優れて美しいかどうかを、見定めることが出来ませうからね。でも、私は今の世に私の愛人のやうな美しい者が又と一人あらうとは、何んなことがあつても思はれませんよ。」「お前は嘘つきだ！」と、女靈魔は答へました。「あ、呪はれたる者よ、お、魔男の中の最も憐れなる者よ、悪魔の中の最も卑しむべき者よ。私は何んなに國々を探して見ても、私の愛人と均しい者が又と一人でも存在してゐやうとは、何うしても思はれないよ。それだから、お前が以前の愛人と私のそれと比べるなどは、何うしたつて狂人だとしか私には思はれないよ。」「大神にかけてお願ひ致しまする、お、奥様よ。」と、ダーナ―シは再び答へました。「何卒私と一緒に来て私の愛人を見て下さいませ。さうすれば、私も貴方と一緒に歸つて来て、貴方の愛者を見せて頂きますよ。」「それぢや左様しよう、お、呪はれたる者よ。」と、メイム―ネエは言ひました。「お前は本當に卑怯な悪魔だね。だが、私は一つ賭をするんでなければ、お前と連れ立つても行かないし、又一緒に行かうとも思はないよ。もしお前が飽くまで立ち優つてゐると言ひ張つてゐるお前のその愛人が、私は又私で立ち優つてゐると思つてゐる私のそれより一層美しいと言ふことが解つたら、その

賭物はお前の所有になつて、私はそれを取られるんだよ。併し又、私の愛人が一層美しいと言ふことが證據立てられたら、その賭物は私の所有になつてお前はそれを取られるんだよ。『魔靈ダーナーシは答へました。』『お、奥様よ、私は喜んでその條件を承諾いたします。では、何卒私と一緒に島へいらしつて下さい。』が、メイムーネはそれに答へて言ひました。『私の愛人の居場所の方がお前のそれよりも一層近い、恰度私どものある下に當たるんだよ。だから、私と一緒に降りて、私の愛人を見ておくれな。それから又二人でお前さんのを見に行きませうよ。』すると、ダーナーシは答へました。『はい、畏承りました。』

二人はそれから降りて行きました。そして、塔の中の廣間の近くに降り立ちました。メイムーネエはダーナーシを寢臺の傍に坐らせて置いて、手を差し延べながら、國王シヤー・ゼマーンの子息なるカマル・エズ・ゼマーンの顔から被布を取り除けました。すると、彼の顔は光り輝いて、四邊に照り渡りました。メイムーネエは彼を見て居りました。それから直ぐに眼をダーナーシの方へ轉じながら彼に言ひました。『これを御覽、お、呪はれたる者よ。そして、愚物の中の最も下劣な者にならないやうにするが可い。私は處女の身です。それで居て、この若者には、すつかり魅せられてあるんだからね。』——そこでダーナーシは若者の方へ眼を遣りました。そして、小時の間黙つて彼を見詰めて居りました。その後で、彼は頭を振りながらメイムーネエに向つて言ひました。『大神にかけて、お

お奥様よ、貴方があゝ仰有つたのも無理は御座いせんね。ですが、男と女とは何うしても違つてゐると言ふことだけは言はせて頂かなければなりませんよ。所で、大神にかけて、貴方のこの愛人は、ありとある男の中でも、その美しさなら、愛らしさなら、優しさなら、何處に一つ缺けた所のないと言ふ點に到るまで、一番私の愛人に似てゐる男で御座いますよ。二人とも美の同じ鑄型の中へ入れて同じやうに作り上げられたもので御座いませうね。』が、メイムーネエはダーナーシのそれ等の言葉を聞いた時、眼の前の光が消えて暗闇になつたやうな氣がいたしました。そして、自分の翼を舉げて、相手の頭上をいやと言ふほど打ち据ゑました。その力の烈しさに、彼は殆ど豫定せられたる生の終局を経験しようとした位で御座いました。そして、彼女は彼に向つて言ひました。『私はこの若者の照り輝いた相貌の光榮にかけて誓ひます。お、呪はれたる者よ、お前はこれから直ぐに行つて、早くその女を此處へ連れて來るがよい。さうすれば、私達は二人を一緒に竝べて、彼等が竝んで眠つてゐる間によく見較べることが出来るからね。そこで初めて彼等のどちらが一層美しいかと言ふことも、私達の間で明瞭になると言ふものだよ。若しお前が私の吩咐けたことを即座に實行しない時には、お、呪はれたる者よ、私は私の火で以てお前を焼き殺して、私の火箭をお前に投げかけながら、お前を粉末に引つ裂いて、砂漠の上に撒き散らして上げるよ。そして、お前を家に在る者と旅行する者との見せしめにして遣るから、さう思ふが可い。』——そこでダーナーシは答へました。『お、奥様よ、

早速仰せの通りに致しませう。だが、確かに私の愛人の方が一層美しくもあれば、可愛らしくもありませんよ。』

それから魔霊ダーナーシは直様飛んで行きました。そして、メイムーネエも彼を護衛するため一緒に飛んで行きました。そして、一時間ばかり留守にした後で、二人は一人の美女を抱へながら戻つて来ました。その女は薄いヴェニス製の絹の襦袢を着てゐましたが、両袖の縁には綺麗に金の縫取りがしてあつて、次のやうな詩が出てゐました。――

三つの所因ありて、群がる間諜や嫉む人中では、彼女は我を訪ひかねたり。

彼女の額の光と、飾りの珠玉の鳴る音と、彼女の身から出る絶えざる龍涎香の匂ひと。

よしや、額を袖もて被ひ飾りの珠玉を撈り取ることも、どうして彼女の身についた汗の匂ひが除られうか。

魔霊と女魔霊はこの處女を連れて降りて来ました。そして、若者の側に彼女を並べて寝させながら二人の顔から被布を取り除けました。二人は宛も雙子のやうに、又は兄と妹とが似てゐるやうに、互ひによく似て居りました。二人は禁慾者の心も唆る程妍やかで御座いました。ダーナーシとメイム

ーネエはちつと二人を見詰めて居りました。そして、前者が言ひました。「實際私の愛者の方が一層美しいですよ。」「いや私の愛者の方が一層美しいのよ。」と、後者は答へました。「お前に禍あれ、お、ダーナーシよ、お前は盲目なのか。この若者の美しさと愛らしさと、身丈恰好の正しさとがお前の眼に這入らんのか。だが、まあ私の愛者に就いて唄ふことを聞くがよい。そして、お前もお前がそんなに惚れ込んでゐるこの女の眞の愛人であるなら、私が私の愛者に就いて唄ふやうに、お前の愛者に就いて唄ふがよい。」「かう言つて彼女はカマル・エズ・ゼマインを幾度も接吻しました。そして、彼を稱め讃へた一つの歌を唄ひました。ダーナーシはそれを聞いた時、心から愉快になつて、すつかり感服してしまひました。が、口ではかう言ひました。「貴方は、この若者に迷つた心で、貴方の愛者の稱め歌を唄ひました。私も一つ精一杯の力を出して、何か唄つて見ませうよ。」「かう言つて彼は彼の愛者なるブツア姫の傍へ近づいて、彼女の眼と眼の間に接吻しながら、女魔霊メイムーネエの方を眺めたり、又は彼の愛者の方を眺めたりしました。そして、一つの歌を唄ひました。が、それは極めて心の定まらないもので御座いました。彼が唄ひ終つた時、女魔霊は言ひました。「お前はよく唄つた、お、ダーナーシよ。でも、この二人の中でどちらが一層綺麗だと思ふんだい？」彼は答へました。「それは言ふまでもなく、私の愛者ブツア姫が貴方のそれよりも一層綺麗で御座いますよ。」「お前は嘘つきだ、お、呪はれたる者よ。」と、彼女は答へました。「何と言つたつて、私の愛者

の方がお前のそれよりも一層綺麗なんだよ。』

かうして二人は何時まで互ひに争ひ續けました。たうとうメイムーネエはダーナーシに對して聲を荒らげながら、彼の上に暴虐の手を加へようといたしました。が、彼は彼女の前に身を卑しくしました。そして、言葉を和らげながら、彼女に向つて言ひました。「お互ひに眞理を曲げるやうなことは廢さうぢやありませんか。先づ貴方の申立ても私のそれも兩方ながら取り消しませう。二人はお互ひに自分の愛者を鼠兎して物を言つてるんですからね。ですから、二人ともお互ひにその説を捨てませう。そして、公平に二人の間を判断してくれるやうな第三者を捜ね出して、その人の判決に任せようでは御座りませぬか。』メイムーネエは答へました。「それぢや左様しよう。』彼女はそれから足で以て床を一つ蹴りました。すると、其處へ一方の眼の潰れた、皮膚に病を持つた一人の魔靈が現れました。その眼は顔の上の方に釣るし上つて居りました。その頭には七本の角が生えて、四房の髪の毛が地面まで垂れ下がつて居りました。その手はクトループのそれに似て、獅子の爪のやうな爪が生えて居りました。その足は象のそれに似て、驢馬のそののやうな蹄を持つて居りました。この魔靈はそこに現はれるや否や、メイムーネエを見て彼女の前の地面に接吻しました。そして、兩手を自分の背中へ廻して合はせながら、彼女に言ひました。「何御用で御座りまするか、お、奥様よ、お、王の姫君よ。』彼女は答へました。「お、カシカシよ、お前を喚んだのは外でもないが、一つ私とこの呪は

れたるダーナーシとの間に判決を下して貰ひたいのだ。』彼女はそれから初めから終ひまでありし様子に彼に語つて聞かせました。それを聞いて、魔靈カシカシはつくづく若者の顔と處女のそれとを見比べました。二人は互ひに相手の頸の下へ手を遣つて、互ひに抱合ひながら、よく眠つて居りました。魔靈カシカシはつくづくと眺めながら、二人の美しさに驚いてしまひました。それで、長い間眼を放さずに二人を見てゐた後で、メイムーネエの方へ振り返りました。又ダーナーシの方へも振り返りました。そして、一つの情歌を唄ひました。それから附け加へて言ひました。「大神にかけて、どちらも相手よりはより多く美しくもなければ、より少く美しいことも御座りませぬ。それにしても、この二人は、その美しさなら、愛らしさなら、優しさなら、姿形の整つたことなら、互に間違へる程よく似て居りますね。それにこの二人は、さう言ふ點ではどちらが優つたとも劣つたとも言ふことが出来ませぬ。何しろ男と女と性が違つてゐるので御座いますからね。けれども、私はこゝに一つの問題を決定する他の方法を申し上げたい。それはかう言ふので御座います。先づ相手の眼を覺ませないやうにして置いて、一人づつ彼等呼び起すんですね。そして、相手に對して一層多く戀々の情を催した方が、その美しさに於ても、可愛らしさに於ても劣つてゐるとするので御座いますよ。』「それが好い。』と、メイムーネエは言ひました。「お前の言ひ出した忠告は眞個旨いよ。私はそれに賛成だわ。』——『左様です。』と、ダーナーシも言ひました。「私もそれに賛成です。』



そこで、さう極まつたので、ダーナーシは自分で蚤に變りました。そして、カマル・エズ・ゼマールの頭の柔かい所をちくりと齧りました。カマル・エズ・ゼマールは手を頭の所へ遣つて、その齧された場所を搔きました。それから、一つ寝返りを打ちましたが、不圖自分の側に何か知ら寝てゐるものがあるのに氣が付きしました。麝香の匂ひよりも好い呼吸を吐いて、牛酪よりも柔かい身體をしたもので御座います。カマル・エズ・ゼマールはそれを見て非常に驚きました。そして、すぐに起き上りました。自分の側に寝てゐる人間を見ると、それは貴重な眞珠のやうに美しい、或は照り輝く太陽のやうに美しい、Alitといふ文字のやうな恰好をした、五呎位の身丈の、胸の高い、頬の薔薇色をした、一人の處女で御座いました。かうしてカマル・エズ・ゼマールの姫君なるブザーアの君を見詰めてゐた時、そして、自分の側に眠つてゐる彼女の美しさと可愛らしさにつくつく見惚れてゐた時、彼は彼女の身體の上にヴェニス製の絹の襯衣を、彼女の頭の上に珠玉で飾つた黄金の帛のクーフイーエを、又彼女の頸にはどんな國王でも手に入れることの出来ないやうな、貴重な珠を縋で繫いだ長い頸飾りを見ました。この美しい姿を見ては、彼の理性も亂れに亂れました。そして、心の中で言ひました。「何んな事でも神様がさうしたいとお思ひになることは起るだらうし、さうしたいとお思ひにならないことは起る筈がない。」——そこで彼は手を出して、彼女を自分の方へ向かせながら、揺り起さうとしました。が、彼女はなかく眼を覺ましませんでした。と言ふのは、ダーナーシが彼女の

睡眠に深くしたからで御座います。そこでカマル・エズ・ゼマールは手を出して彼女を拵りました。そして、「お、わが愛者よ、目を覺まして、私が誰であるかと言ふことを見て下さい。私はカマル・エズ・ゼマールで御座いますからね。」と言ひながら、彼女の身體を揺振りました。が、彼女は眼も覺まさないければ、頭も動かしませんでした。彼は、彼女のことをいろくくに想ひ廻らしながら、一時間餘りもさうして居ました。そして、心の中で言ひました。「若し私の推察が誤つてゐなかつたら、この處女は私の父が私に配合せようと思つたあの女に違ひない。私は三年の間もそれを斷つて來た。が、神も照覽あれ、朝になつたら私は早速父上の許へ行つて、私はあの女と結婚しますと申上げよう。そして、正午までには、屹度この女を手に入れて、飽くまでその美しさと愛らしさとに耽らずには置かない。」——彼はそれからブザーア姫の方へ俯向くやうにしながら、彼女に接吻しようといいたしました。それを見た女火靈のメイム・エスは、頭へ上つて、すつかり狼狽してしまひました。が、それに反して、魔靈のダーナーシの方は躍り上つて喜びました。けれども、カマル・エズ・ゼマールは、將に彼女の肩に觸れようとした時、不圖神を恐れる心が起りました。そして、顔を背向けながら、心の中に言ひました。「いや、少時辛抱した方がよい。恐らく父上もあんなにまで私のことを怒つて、この部屋に私を幽閉して置かれるからには、この嫁をこゝへ連れて來て、私の側に寝させて置いて、私の心を試して見ようとして居られるに違ひない。そして、私がこの女を揺り起さうとした時も、飽くまで

眠つた振りを装つて、カマル・エズ・ゼマーンがお前に何んなことをしたか、後でみんな俺に知らせるんだよと、屹度吩咐けてあるに違ひない。それに父上も何處かに隠れてゐて、私には見えないけれど、私のことを見張つて居られるかも知れない。そして、私がこの女に何んなことをしたか一々見定めて置いて、明日の朝になつて、私を喚び寄せながら、お前は結婚なぞする必要はないなぞと言ひ張りながら、この處女に接吻したり、抱擁したりするとは何事だ！と、大いに叱言を言ふ了簡かも知れない。それなら私も、親爺の前に自分を曝すのが恐ろしいから、この女の傍へは近寄るまい。この瞬間からしてこの女には指でも觸るまい。この女の方へは振り向いても見まい。が、たゞ一つ何かこの女の記念になるやうな物を取つて置いて、肌身離さず持つてゐることにしよう。さうすれば、私とこの女との間には一つの記號が残る譯だかね。」——そこでカマル・エズ・ゼマーンは處女の手を持ち上げて、その小指から指環を抜き取りました。それは莫大の金額に値ひするもので御座いました。と言ふのは、その石は貴重な珠玉であつたからで御座います。そして、その周りには次のやうな詩が彫つて御座いました。——

いくら御心が永く外へ移ればとて、私の心まで變つたとは、どうか思召して下さるな。  
お、わが君よ、われを憐み、われを許して給はれや。何時かは又君の唇に、君の頬に

接吻する日もあらむ。

大神にかけて、われは君を捨てざるべし、よし君は愛の規則を犯したまふとも。

そこでカマル・エズ・ゼマーンは王女ブツアの小指からその指環を抜き取りました。そして、それを自分の小指へ嵌めながら、彼女に背を向けました。そして、眠つてしまひました。

女火靈メイム・ネエは、それを見た時、すつかり喜んでしまひました。そして、ダーナーシとカシカシの二人に向つて言ひました。「お前方は私の愛者なるカマル・エズ・ゼマーンを見ましたかい。彼がこの處女に心を奪はれなかつた様子を見ましたかい。それは一に彼の缺くる所のない優越の結果ですよ。まあ彼がこの處女の美しさと愛らしさとに見惚れてゐた様子を考へて見るが可い。しかも彼はこの女を抱き上げもしなければ、又この女の上に手さへ遣りませんでした。そして、この女に背を向けたま、眠つてしまつたではありませんか。」——二人は彼女に答へました。「はい、私どもは申分のない彼の行動を見て取りました。」

そこでメイム・ネエは自分で蚤に變身して、ダーナーシの愛者なるブツアの着物の下へ藻繰り込みながら彼女を囁みました。そこで、彼女は眼を開いて起き上りました。そして、自分の傍に眠つてゐる、睡りながら軒を搔いてゐる、アネモネの花のやうな頬をした、美しきフリーエをも羞づかしさ

に顔を掩はしむるやうな眼を持つた、又スレイマーン玉璽のやうな口をした一人の若者を見ました。彼女はこの若者を見た時、俄に心が亂れ、歡喜の情に溢れながら、抑へがたい情慾に征服されてしまひました。「お、私は何といふことをしたらう！ この若者は見知らぬ他處の人だ。私はこの人を知らない。どうしてこの人は同じ寢床に私と並んで寝てゐるんだらう？」——それから再びこの若者を見遣りながら、彼の氣高さと可愛らしい姿と、美しさと愛らしさとをつくつく眺めました。そして再び言ひました。「大神にかけて、この人は月のやうに優しい男だわ。私の胸はこの人に對する愛の歡喜に、この人の美しさと愛らしさとに依つて惹き起された情熱の烈しさに、殆ど破れようとしてゐます。でも、私はこの人のお蔭でどんなに汚辱を蒙つたらう！ 大神にかけて、この美しい若者が父上の許へ私を娶りたいと申し込んで来たあの人であつたといふことを知つたなら、私は屹度その人を斷らなかつたに違ひない。それ所か、その人と結婚して、その可愛らしい所を飽くまで翫賞したこと御座いませう。」——それから女王ブツアはカマル・エズ・ゼマーンの顔を上げくと見遣りながら、彼に向つて言ひました。「お、わが君よ、わが心の愛者よ、わが眼の光よ、どうぞ眼を覺まして下さいませ。」かう言つて、彼女は手でもつて相手を揺り起しました。けれども、女火靈メイムーネエは彼を深い眠りに沈ませながら、羽翼でもつて彼の頭を抑へつけて居りました。それで彼は眼を覺ましませんでした。女王ブツアは再び手で彼を揺振りながら、彼に言ひました。

「わが生命にかけて、お願ひいたします。何卒私の願ひを聞き入れて、眼を覺まして下さいませ！ 起きて下さい、お、わが君よ、そして、座褥に凭れながら、もう眠つては下さいませな！」——併しカマル・エズ・ゼマーンは返辭もしなければ、一語彼女に物を言ひかけようともしませんでした。そして、矢つ張り軒を搔きながら眠つて居りました。そこで女王ブツアは言ひました。「どうして貴方はそんなに高慢なのか。貴方の美しさと、愛らしさと、優しさと、可愛らしい姿とが、そんなに貴方は御自慢なの？ 貴方が美しく被坐つしやるやうに、私も美しいでは御座りませぬか。どうして貴方はそんなに威張つて被坐つしやるのです？ 誰か私を嫌つたやうな風をして見せると、貴方に吩咐したので御座いますか。それとも私の父が、あの不快な老爺さんが今夜私に物を言つてはならないと留めたので御座いますか。」——カマル・エズ・ゼマーンはその時一寸眼を開きました。それに依つて、彼女の男に對する愛は一層に加はりました。神は彼女の心に男に對する情熱を吹込まれたので御座います。彼女は流眊に男を見遣りながら、數知れぬ溜息をつきました。彼女の胸は破れるやうに動悸を打ちました。そして、彼女はカマル・エズ・ゼマーンに向つて言ひました。「お、わが君よ、物を言つて下さい！ お、わが愛者よ、私と話をして下さい。お、わが情熱の對象よ、一語でい、から返辭をして下さい。そして、貴方の名を私に明かして下さいませ。貴方は私の理性を捕虜にしてしまひなすつたのよ。」——が、この間始終カマル・エズ・ゼマーンは深い眠りに浸りながら、一話も返

辭をいたしませんでした。女王ブツアは溜息をつきました。そして、『どうして貴方はこんなにお氣が強いでせうね?』と言ひました。それから彼女は再び男を揺振つて、その手を自分の方へ引寄せました。そして、男の小指に自分の指環が嵌つてゐるのを見て、驚愕の聲を擧げながら、さもく嬉しうに言ひました。『あ、嬉しい、これで分つた! 大神にかけて、貴方は私の戀人ですわ。そして、貴方も私を愛してゐて下さいますのね。でも、貴方は私を嫌ふやうな振りをして被坐つしやる。その癖貴方は私の寝てゐる間に遣つて来て、どんなことをなすつたか、私はちつとも知らなただけでも。でも、私は貴方の小指から私の指環を取返さうといふ氣はないのよ。』——かう言つて彼女は何か男から取つて置くものはないかと探しました。そして、男の指から指環を抜き取りながら、それ自分の指環の代りに、自分の指に嵌めました。さうした後で、彼女は男の口と手とに接吻しました。そして、片方の手を男の枕の下に差し入れながら、片方の手を男の腕の下に置いて、再び彼と並んで眠つてしまひました。

メイム・ネエはそれを見た時、すつかり喜んでしまひました。そして、ダーナーシに向つて言ひました。『お、呪はれたる者よ。お前はあれを見たか。お前の愛者は私の愛者に對する情熱に心を掻き亂されながら、あんな眞似をしたのに、私の愛者は飽くまで自分の誇りを保ちながら、知らぬ顔をして眠つてしまつたではないか。かうなればもう何の疑ひもない、私の愛者はお前のそれよりも一層

『美しいといふことは明白だよ。だが、私はお前を赦してあげる。』——かう言つて、彼女は彼に對する赦免の一札を認めました。そして、カシカシの方へ振り向きながら、彼に言ひました。『お前はこの人を手傳つて、一緒にその愛者の下へ手を差し入れながら、この女の元の住居へ連れ返つて上げるがいい。と言ふのは、夜も明けかゝつて、私の企圖を實行するにはもう時機が過ぎてゐますからね。』——そこでダーナーシとカシカシとは女王ブツアの傍へ進み寄りながら、彼女の下へそつと手を差し入れました。そして、彼女を擔いで空を翔りながら、元の住居へ連れ返つて、そつと元の寢床に臥させました。その間メイム・ネエは一人後に残つて、寝てゐるカマル・エズ・ゼマーンを見守つて居りました。が、そのうち夜も明けかゝつたので、彼女は少し前に飛んで歸りました。で、その夜も明け放れた時、カマル・エズ・ゼマーンは眼を覺まして、右や左を見廻はしました。が、一緒に寝てゐた筈の處女の姿は何處にも見えませんでした。そこで彼は獨り心の中で言ひました。『一體これは何うしたと言ふのだらう? 想ふに、父上は、こゝにゐたあの處女と結婚したいといふ心を私に起させようと思つて、それであんな眞似をした後で、こつそりあの處女を連れて行つてしまはれたものに相違ない。つまりさうして彼女に對する私の愛慾を一層増させる積りなんだね。』——彼はそれから戸口に寝てゐた宦官を呼び起しました。そして、『汝に禍あれ、お、呪はれたる者よ、早く起きろ!』と言ひました。宦官はそれを聞いて起き上りましたが、まだ眼が覺め切らないので、

茫然しながら、金盥と水注子とを持って這入つて来ました。カマル・エズ・ゼマーンは起き上つて沐浴を済ましてから、朝の祈禱を唱へました。そして、そこに坐つたまゝ、神の褒め言葉を繰返しました。それから宦官の方へ振向いて、自分の前に恐るゝ立つてゐる相手を見遣りながら、彼に言ひました。「汝に禍あれ、お、サワープよ、誰か此處へ這入つて来て、私の眠つてゐる間に、私の傍にゐた處女を連れて行つてしまつたのか。」宦官は言ひました。「お、わが君よ、處女とは何んな處女で御座いますか？」——「他でもない、今夜私と一緒に寝てゐたあの處女だよ。」と、カマル・エズ・ゼマーンは答へました。宦官は彼の言葉を聞いて、何だか譯がわからないので、當惑しながら答へました。「貴方のお傍に處女なぞのゐた筈は御座いせんよ。處女に限らず、何んな者だつてゐた筈はない。私 はかうして戸口に寝て居りまするし、戸にはちやんと錠がかゝつてありますもの、何うして、處女なぞの這入つて來ることが出来ませう？ 大神にかけて、お、わが君よ、男だつて女だつて、貴方のお傍へ這入つて行つた者は一人も御座いせんよ。」——カマル・エズ・ゼマーンはそれを聞いて聲を張り上げました。「お前は嘘を吐くな、お、呪はしき奴隷よ。お前は私に對して嘘を言つてもいゝやうな地位にあると思ふか。お前はどうしても今夜私と一緒に寝てゐたあの處女が何處へ行つたか知らせない積りだな？ 又、誰が私の傍からあの女を連れて行つてしまつたか、何うしても白狀しない積りだな？」宦官は彼の言葉を聞いてすつかり狼狽しながら答へました。「大神にかけて、お

お、わが君よ。私は若い女にも、若い男にも、そんなものは一人も見掛けませんでしたよ。」——カマル・エズ・ゼマーンは宦官のその言葉を聞いてすつかり腹を立て、しまひました。そして、彼に向つて言ひました。「誰か、お前に嘘を吐けと吩咐けたのだな、お、呪はれたるものよ。さう言ふ氣なら、さあ此處へ來い。」

そこで宦官は彼の前へ近寄りました。すると、カマル・エズ・ゼマーンは彼の襟髪を掴んで、床の上へ引き倒しました。そして、彼を膝で抑へながら、毆つたり、息の塞るまで咽喉を締め上げたりいたしました。それから彼はその宦官を井戸繩に縛りつけて、水にとゞくまで、井戸の中へ卸しました。そして、水の中へ沈めました。それは嚴冬の寒い時節で御座いました。彼は宦官を水の中へ沈めたり、又はそれから引き上げたりいたしました。さうかと思ふと、又水の中へ沈めました。かうして彼は何時までも續けました。その間宦官は絶えず悲鳴を上げながら、大聲に救ひを求めました。が、カマル・エズ・ゼマーンはそれに答へました。「大神にかけて、お、呪はれたる者よ、お前があの處女の話ですつかり打ち明けて、私の眠つてゐる間に、誰があの女を連れて行つてしまつたか白狀するまでは、どんなことがあつてもこの井戸から引き上げてはやらないよ。」そこで宦官は言ひました。「お、わが君よ、何卒私を井戸から出して下さいませ。さうすれば、本當のことをみんな申し上げてしまひますよ。」それを聞いて、カマル・エズ・ゼマーンは彼を井戸から引き上げて、濡れ鼠になつて、

寒さと、打たれた痛さと苦しさとに、氣の遠くなつてゐる彼を救ひ出してやりました。彼は嚴寒の風に吹かれて、蘆の葉のやうに顛へてゐました。彼の齒は固く喰ひ縛つたまゝになつて、着物からはばたばたと水が垂れました。で、やつと床の上に這ひ上つた時、彼は言ひました。「お、わが君よ、何卒私に彼方へ行つて、着物を脱いで、それを絞つて、日光に乾かしながら、他の着物を被て來ることを許して下さいませ。私はそれから直ぐにお傍へ戻つて、あの處女の身に就いて知つてゐる限りは逐一申し上げるで御座いますよ。」——「大神にかけて、お、呪はしき奴隷よ。」と、カマル・エズ・ゼマーンは答へました。「お前は死ぬやうな目に遭はなければ、どうしても眞實を吐かない男なんだね！ 早く行つて、お前のしたいやうにして來るが、だが、直ぐにこゝへ戻つて來て、あの處女の話を一申し立てるんだぞ。」

そこで宦官は、自分の身の遁れたことをまだ夢現のやうに思ひながら、すぐに出て行きました。そして、カマル・エズ・ゼマーンの父なる國王シヤー・ゼマーンの許へ一走り駆けつけました。見ると、王の御前には宰相が控へて、二人はカマル・エズ・ゼマーンのことを就いて心配さうに話して居られました。彼は王が宰相に向つて次のやうに言はれるのを聞きました。「實際俺はカマル・エズ・ゼマーンのことを心配になつて、昨夜もおち／＼眠られなかつたよ。俺は、あんな古い塔の中に、何時までもあれを閉ぢ籠めて置いたら、何か悪いことがあれの身に起りはせぬかと、それを心配するんだがね。」

どうもあを幽閉して置くのは好くないよ。」が、宰相は答へました。「あの方のことは御心配には及びませんよ。大神にかけて、あの方に災禍の起るやうなことはありません。兎に角一ヶ月の間あのまま、幽閉してお置きになるが宜しう御座います。その間には、あの方の御性質も幾分和らいで來ることで御座いますから。」——で、二人がこんな話をしてゐる間に、例の宦官が前に擧げたやうな状態で二人の許へ遣つてまゐりました。そして、國王に申し上げました。「お、わが帝王の君よ、貴方の子息は狂人になられました。私に對して斯様々々のことをいたされました。そして、私に仰有いますには、一人の處女が俺と一緒に一夜を過した。そして、こつそり身を隠してしまつた。だから、あの女の身の上を知らせてくれと仰有るのです。ですが、私はそんな處女のことは一向に存じませぬので御座いますよ。」——帝王シヤー・ゼマーンは子息のカマル・エズ・ゼマーンの身に關して、さう言ふ話を聞いた時、彼は思はず聲を擧げて。「お、わが兒よ。」と叫びました。そして、これ等の災禍の原因をなした宰相に對して、烈しい憤怒を發しながら、彼に向つて言はれました。「直ぐに行つて、わが子の状態を見て來て、俺に知らせろ。」と。

それを聞いた宰相は王の憤怒を恐れる餘り、着物の裾を踏みながら駆け出しました。そして、宦官と一緒に塔へ駆けつけました。太陽はもう上り切つて居りました。宰相はカマル・エズ・ゼマーンの部屋へ行つて見ると、彼は臥榻の上に腰かけながら聖典を誦んで居りました。そこで彼は彼に挨拶をし

ながら、彼の傍に腰かけて、彼に言ひました。「お、わが君よ、この忌はしい奴隷が私どもの許へ甚だ氣懸りな報知をもつて参りました。國王には、それを聞いて、非常に立腹していらせられます。」——そこで、カマル・エズ・ゼマーンは言ひました。「お、宰相よ、私の身に關して父上に御迷惑をかけたとは、一體何んなことを此奴は言つて行つたのだ？ 實の所、此奴は私にこそ甚い迷惑を懸けたんだよ。」——宰相はそれに答へて言ひました。「この男は誠にみじめな様子をして私どもの前へ遣つて來ました。そして、私どもに——神も禁じたまへ、そんなことは、決して眞實ではありませんまい！——そして貴方の身に關して、此處では一寸申上げ兼ねるやうな、ひどい嘘を吐いたので御座いますよ。大神よ、貴方の若々しさを護らせたまへ、又貴方の健全な理性と貴方の流暢な辯舌とを護らせ給へ！——そして貴方がさう言ふ卑劣な眞似を遊ばされるやうなことの懸けてもないやうに！」——カマル・エズ・ゼマーンはそれを聞いて、彼に言ひました。「お、宰相よ。一體、この忌はしい奴隷が何んなことを言つたのだい？」——「彼はかう言ふことを知らせに來たので御座いますよ。」と、宰相は答へました。「貴方が氣が狂つて、昨宵一人の處女と俺が寝てゐたと仰つたと言ふので御座います。貴方は本當にそんなことを此奴に仰つたので御座いますか。」——それを聞いた時、カマル・エズ・ゼマーンは非常に腹を立てました。そして、宰相に向つて言ひました。「お前がさうしるとこの宦官に教へて置いたといふことは、昨宵私と一緒に寝てゐた處女の身の上を私に知らせてはいけなないと、此奴

に口留めして置いたといふことは、私にもちやんと分つてゐるよ。だが、お、宰相よ、お前もこの宦官よりは少しは物が分つてゐるだらうね？ それなら直ぐに私に打明けてくれ、昨宵私の胸の上に眠つてゐたあの美しい處女は何處へ行つたのだ？ 私は朝まであの女と一緒に寝てゐた。それなのに、眼が覺めた時には、もうあの女は居ないのだ。だから、あの女は今何處に居るんだよ。」——「お、わが君カマル・エズ・ゼマーンよ。」と、宰相は答へました。「大神の御名は貴方の周圍を取り巻いてあれよ。大神にかけて、私どもは昨夜貴方のお傍へ何人も遣しはいたしませぬ。貴方はたゞ一人お臥みになりました。それに入口の扉には錠が卸して御座いますし、又その扉の前では宦官が眠つて居たでは御座りませぬか。處女は愚か、どんな者でもお傍へ來る筈は御座りませぬ。ですから、どうぞ正氣に還つて下さいませ、お、わが君よ。そして、もうそんなことには御心を煩はされぬやうにお願ひいたしまする。」——が、カマル・エズ・ゼマーンは、それを聞いて、すつかり腹を立てました。そして、彼に言ひました。「お、宰相よ、その處女は俺の愛人だぞ。その女は黒い眼と赤い頬とを持つた美しい女で、現在俺はその女を抱いて寝たのだ。」——宰相はその言葉を聞いて不思議に思ひました。そして、彼に訊ねました。「貴方は昨夜その女を貴方のお眼で御覧になつたのですか、起きていらしたのですか、それとも眠つていらしたので御座いますか。」——「お、忌まはしい老爺よ。」と、カマル・エズ・ゼマーンは言ひました。「お前は俺が耳であの女を見たとしても想つたのか。いや、俺はこの

眼でその女を見たのだ。勿論起きてもあつたし、この手でその女を自分の方へ向かせもしたのだ。そして、半夜餘りもその女の美しさと、愛らしさと、優しさと、可愛らしい姿とを、いろいろに眺めながら楽しんでゐたのだよ。だが、お前方は私に物を言つてはならぬと、あの女に吩咐けて置いたに違ひない。その所爲か、あの女は飽くまで眠つたやうな振りをしてゐた。で、私は朝までその女の側に眠つてゐたが、眼を覺ました時には、もうその女は居ないのだ。——宰相は答へました。「お、わが君カマル・エズ・ゼマーンよ、恐らく貴方は眠つてゐてその女を御覽になつたに違ひない。それは五臓の疲れから出た夢か、いろいろ變つた食物をぐつちやに召上つたから生れた空想か、さもなければ何か好くない魔がそんな考へを吹込んだのでも御座いませうよ。——「お、忌まはしい老爺よ。」と、カマル・エズ・ゼマーンは聲を擧げて叫びました。「どうしてお前は私を調弄はうとして、そんな五臓の疲れだの、夢だのと失禮なことを言ふのだ？ 現在こゝに居る宦官が、私の前で、處女は確かにこゝへ參りましたと白狀して、すぐに此處へ戻つて来て、あの女の話を一申し上げますと約束してゐるではないか。」

彼は忽ち立ち上つて、ずつと宰相の傍へ近寄りながら、相手の鬚を引つ掴みました。それは長い顎鬚で御座いました。カマル・エズ・ゼマーンはそれを掴んで、ぐるぐると手で引き廻しながら、ぐつと力任せに引つ張つたので、相手は臥榻の上から床の上へ投げ出されました。そして、宰相は、餘り

に烈しく鬚を引つ張られたので、もうこれがこの世の別れになるのではないかとさへ思ひました。カマル・エズ・ゼマーンはそれから宰相を續けざまに足で蹴つたり、手で頸の背を殴つたり、相手が半死半生で蟲の息になるまで責苛みました。そこで宰相は心の中に考へました。「あの宦官でさへ諛を吐いてこの狂暴な若者の手から免れたとすれば、私なら一層容易に諛を吐いて免れられるに相違ない。さうでもしなければ、この若者は屹度私を殺してしまふだらうよ。では一つ、私も諛を吐いてこの若者の手から命だけ助かりませう。眞個此奴は狂人だからね。此奴が狂人だといふことに就いては、もう一點の疑ひもないよ。」そこで、彼はカマル・エズ・ゼマーンの方へ振り向きながら、彼に言ひました。「お、わが君よ、そんなに私ばかり怒つて下さいますな。何を言ふにも、お父上がこの處女の一件を貴方には隠して置くやうに御命令になつたんだから仕方が御座いませぬよ。けれども、私もそんなに打たれては氣が遠くなつて、今にも息が絶えさうになりました。私も老人で、もう打答に堪へるだけの力が御座いせんからね。で、少時御猶豫を願ひしたい。さうすれば、私もどうかかうかあの處女の話をお申上げることが出来ますよ。——それを聞いて、彼は老人を殴る手を止めながら、彼に言ひました。「お前方は何うして打つたり恥辱を與へたりしてからでなければ、あの女の話をして私が打ち明けようとはしないのだ？ では、起きろ、お、忌まはしい老爺よ。そして、早くその話をするが可い。——その時宰相は彼に向つて言ひました。「貴方はあの美しい顔と嬌かな姿とを持つ



た處女のことをお訊ねになるので御座いますか。』——『さうだ。』と、カマル・エズ・ゼマーンは言ひました。『お、宰相よ、一體誰があの女を私の側へ連れて来て、私と一緒に寝させて置いたのか。そして、あの女は今何處に居るんだ？ 私はある女の側へ行くから、早くそれを言つてしまふが可い。で、若し父上が、國王シヤー・ゼマーンが、あの女を私に配合はせるつもりで、あの女を連れて来て、私の心を試すためにあのやうなことをせられたのなら、私は喜んであの女と結婚しますよ。父上がみんなこんなことを私に對してせられたのだ。あの女に對する愛を私の心に燃え立たせて置いて、その後で私からあの女を引き離してしまはれたのだ。それもたゞ私が結婚を拒んで居るからに過ぎない。だが、私は今はそれを承知するよ。再び言つて置くが、私は結婚を承知するよ。だから、そのことを父上に申上げてくれ、お、宰相よ。そして、あの女を私と配合はせるやうに父上に勧めてくれ。私はもうあの女の外には何んな女も要らない。何んな女も愛してはゐないのだからよ。さあ立ち上つて、急いで父上の許へ行つてくれ。そして、私の結婚を早めるやうに、父上に勧めてくれ、それから直ぐに又私の許へ戻つて来てくれ——直ぐと言つたら直ぐに戻つて来るんだよ。』

宰相は、塔の外へ出るまでは、まだ全くカマル・エズ・ゼマーンの手から遁れたやうな氣がいたしませんでした。で、彼は息を切らして走りながら、國王シヤー・ゼマーンの御前へ駆けつけました。その時玉は彼に向つて言ひました。『お、宰相よ、どうしてお前はそんなに慌て、色を失つてゐるのか、どんな悪い奴がお前に危害を加へたのか、お前がそんなにおぢ恐れてゐるのは、何うした所因なんだよ？』彼はそれに答へて言ひました。『私は一つの報道を持つて參つたので御座ります。』——『それは又何うした報道なのだ？』と、國王は訊ねました。『申上げます。』と、宰相は答へました。『御子息カマル・エズ・ゼマーンは狂人におなりなされたので御座りますよ。』その言葉を聞いた時、王は眼の前の光が消えて暗闇になつたやうな氣がいたしました。そして、彼は言ひました。『お、宰相よ、俺の子息が狂人になつたと言つて、何んな狂人になつたか話してくれ。』宰相は答へました。『はい、畏承りました。』かう言つて、彼は王の子息がした所業を悉しく申上げました。それを聞いて、王は彼に言ひました。『お、宰相よ、お前が俺の子息の狂人になつたことを知らせてくれたお禮として、俺はお前の首を刎ねてやるから、さう覺悟をするが可い。お前が最初に又最後に俺に與へた、あの間違つた助言が原因になつて、俺の子息が狂人になつたと言ふことは、ちやんとわかつてゐるからね。大神にかけて、俺の子息が本當に狂人になつたり、又は彼の身に何んな災禍でも起つてゐたら、俺はお前を圓蓋の頂邊に釘づけにして、飽くまで苦痛を嘗めさせてやるよ。』

王は即座に立ち上つて、宰相と一緒に連れながら、カマル・エズ・ゼマーンの囚はれてゐる塔の中に這入つて行きました。二人が這入つて来るのを見た時、彼はそれまで坐つてゐた臥榻から急に降り立ちながら、父の王を出迎へました。そして、父の手に接吻してから、遙かに後へ下つて、地面にくつ

か、どんな悪い奴がお前に危害を加へたのか、お前がそんなにおぢ恐れてゐるのは、何うした所因なんだよ？』彼はそれに答へて言ひました。『私は一つの報道を持つて參つたので御座ります。』——『それは又何うした報道なのだ？』と、國王は訊ねました。『申上げます。』と、宰相は答へました。『御子息カマル・エズ・ゼマーンは狂人におなりなされたので御座りますよ。』その言葉を聞いた時、王は眼の前の光が消えて暗闇になつたやうな氣がいたしました。そして、彼は言ひました。『お、宰相よ、俺の子息が狂人になつたと言つて、何んな狂人になつたか話してくれ。』宰相は答へました。『はい、畏承りました。』かう言つて、彼は王の子息がした所業を悉しく申上げました。それを聞いて、王は彼に言ひました。『お、宰相よ、お前が俺の子息の狂人になつたことを知らせてくれたお禮として、俺はお前の首を刎ねてやるから、さう覺悟をするが可い。お前が最初に又最後に俺に與へた、あの間違つた助言が原因になつて、俺の子息が狂人になつたと言ふことは、ちやんとわかつてゐるからね。大神にかけて、俺の子息が本當に狂人になつたり、又は彼の身に何んな災禍でも起つてゐたら、俺はお前を圓蓋の頂邊に釘づけにして、飽くまで苦痛を嘗めさせてやるよ。』

王は即座に立ち上つて、宰相と一緒に連れながら、カマル・エズ・ゼマーンの囚はれてゐる塔の中に這入つて行きました。二人が這入つて来るのを見た時、彼はそれまで坐つてゐた臥榻から急に降り立ちながら、父の王を出迎へました。そして、父の手に接吻してから、遙かに後へ下つて、地面にくつ

つくまで頭を垂れながら、両手を背後で組み合せて父の前に立ちました。かうして、彼は少時立つて居りました。その後で彼は顔を父君の方へ向けて、眼から頬へかけてぼたく涙を流しながら、次に掲げるやうな詩人の言葉を唄ひました。

われ君に罪を犯せしことあらば、恥づべき行ひをせしならば、  
われはわが罪を悔ゆ。君は又寛き心より宥免を願ふ罪人を赦し給はん。

これを聞いて、王は前へ出ました。そして彼の子息なるカマル・エズ・ゼマーンの眼と眼の間を接吻しながら、両手に抱きしめました。そして自分と並んで臥榻の上に彼を坐らせました。それから怒りの眼を宰相の方へ振り向けながら、王は彼に言ひました。「お、この宰相の犬よ、何うしてお前は俺の子息がかうくだなどと言つて、俺に心配をかけたのだ？」彼は又わが兒の方へ振り返りながら、彼に言ひました。「お、わが兒よ、今日は何曜日だか知つておいでかい。」「お、わが父上よ、今日は土曜日で御座ります。明日は日曜で、その次の日は月曜日で、それから火曜日で、それから水曜日で、それから木曜日で又それから金曜日で御座ります。」又それから王は彼に言ひました。「お、わが兒よ、お、カマル・エズ・ゼマーンよ、お前が息災であてられて、俺は本當に嬉しいよ。」

で、今月はアラビヤ語で何と言ふか知つてゐるかい。「今月は」と、彼は答へました。「十一月で御座ります。來月は十二月で、その次は一月で二月、三月、四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月と續くので御座ります。」そこで王はこの答へを聞いて非常に喜びました。そして、宰相の顔に唾を吐きかけながら、彼に言ひました。「お、悪漢の老爺よ、お前は何うして俺の子息のカマル・エズ・ゼマーンが狂人になつたのだ？ 狂人になつたのは俺の子息でなくて、お前こそ狂人になつてゐるではないか。」宰相は頭を振つて考へ込みながら、何か言はうといたしました。けれども、それより少時待つて成行を見た方がいと思ひ附きましたので、黙つて控へて居りました。その時王は彼の子息に向つて言ひました。「お、わが兒よ、お前が宦官と宰相とに向つて言つた言葉は、あれは何う言ふ積りだい？ お前は彼等に向つて、昨宵一人の美しい處女と一緒に寝てゐたと言つたさうではないか。お前の言つたその處女といふのは、一體何うした女なのだい？」——カマル・エズ・ゼマーンは父上のこの言葉を聞いて、からくんと笑ひました。そして、彼に向つて言ひました。「お、父上よ、私はもうそんな冗談を我慢して聞いてゐることは出来ませんよ。ですから、そんな言葉を二度と私に言つて下さいませぬ。私はもう貴方が私に對してお仕向けになつた、あれだけで、もう苛々してゐるんで御座いますからね。豫め申上げて置きますが、お、父上よ、私は結婚に同意しますよ。尤も、昨宵私と一緒に眠つてゐたあの處女と

配合せて下さるといふ條件の上でございますがね。貴方があの女を私の側に寄越して私があの女に想ひ着くやうにおさせになつたと言ふことは、又貴方が夜の明ける前にあの女を取り戻して、私からあの女を引き離しておしまひになつたと言ふことは、私はもうちやんと知つてゐますよ。——それを聞いて、國王は思はず聲を擧げて叫びました。「大神の御名はお前を取り捲いてあれ、お、わが兒よ。何うかお前の理性が亂心から免れるやうに！一體俺が昨宵お前の側に寄越して、それから夜明け前に取り戻したと言ふ、その女は何者なんだい！大神にかけて、お、わが兒よ、俺はそんなことはちつとも知らないよ。だから、お前に頼むがね、どうか俺に打明けてくれ、これは五臓の疲れから出た夢か、それとも食ひ合せから生じた空想なのかい。と言ふのは、お前も昨宵結婚の問題に就いていろく心配しながらお寝だらうかね。そして、この問題の話からいろく空想に悩まされたことだらうからね。あ、呪はしいのは結婚だ、その時間だ、又その問題に關して俺に餘計な助言をした奴だ！お前の頭腦がそのためにいろく亂れたといふことは毫も疑ひを入れないよ。それなればこそ、お前は美しい處女がお前を抱いて寝てゐた夢などを見たのだ。そして、お前は起きてゐてその女を見たのだと心の中で信ずるやうになつたのだ。しかもかれは皆、お、わが兒よ、五臓の疲れから出た夢に過ぎないのだよ。——が、カマル・エズ・ゼマーンはそれに答へて言ひました。「何卒そんな餘計なことは言つて下さるな。それよりも貴方が何うしてもあの女のこと、又あの女の在處も知らないと言ふなら、大神にかけて、造物主にかけて、全智全能の神にかけて、強國の破壊者、キスラーの剿滅者にかけて、それを誓つて下さい。——そこで王は言ひました。「大神にかけて、ムーサーとイブラーヒームの（モーゼとアブラハム）神にかけて、俺はお前が言ふやうなことは些しも知らない。そして、お前が寝てゐて見たことは恐らくは五臓の疲れから出た夢だらうよ。」

その時カマル・エズ・ゼマーンは言ひました。「では一つこれが私の起きてゐる時に起つたんだといふことを證據立てるために、比喻で申し上げますがね、ある男が戦闘をしてゐたとしますよ。そして烈しく戦つた後、睡眠から覺めてみると、手に血の附いた劍が残つてゐた。これでも貴方は、その男がさういふ夢を見たんだと仰有いますか。」彼の父は答へました。「大神にかけて、否、お、わが兒よ、そんなことは決してある筈がないね。——『それなら』と、カマル・エル・ゼマーンが言ひました。「私は私の身に起つた事を貴方に申し上げますよ。それはかうなんです。私は昨宵夜中に不圖眠りから覺めたやうな氣がしました。すると私の側に一人の處女が眠つてゐるので御座います。その女の姿、形は私のそれによく似て居りました、私はその女を抱きかへました。この手でその女に觸つて見ました。そして、その女の指環を取つて、私の指に嵌めました。彼女は又私の指環を取つて、自分の指に嵌めました。ですが、私は父上に對して恥かしいといふ氣があつたから、極めて控へ目にその女に對しました。と言ふのは、私は貴方がその女を私の側へ寄越して置いて

何處かその邊に身を隠しながら、私の行動を見て被坐つしやるんだとばかり想つてゐましたからね。そこで私は、貴方に對する氣兼ねから、その女の口に接吻することさへ慎みました。それは貴方がその女の方で私を誘惑しながら、結婚するやうに私の心を翫さうとして被坐つしやるんだと、不圖氣が附いたからで御座います。その後私が夜明け方になつて睡眠から覺めて見ると、もうその女は影も姿も見えませんでした。又何處からもその女の消息を知ることが出来ませんでした。その結果として、私と宦官や宰相との間にあのやうなことが起つたので御座いますよ。所で、本當に指環が私の手に残つてゐるとすれば、何うしてこれが貴方の仰有るやうに夢だなどと思はれませう？ 指環さへなかつたら私初め夢だと思つたかも知れませんがね。ですが、現在私の小指に嵌つてゐるこの指環がその女の指環ですよ。お、國王よ、どうか何れだけの値打があるものか、これを見て下さいまし。』

カマル・エズ・ゼマーンはそれから指環を抜いて、父の手に渡しました。國王はそれを取つて、裏返して見ながら、わが兒の方へ振り向き直りました。そして、彼に言ひました。『成る程、この指環には何か大きな深い仔細があるに相違ない。いづれにしても、昨夜、その處女に關してお前の身に起つたこととは一つの奇蹟だよ、俺にはどうしてその女がこの客殿の中へ入り込んだか分らない。兎に角、事の起因はこの宰相にあるんだよ。だが、大神にかけて、俺はお前に頼んで置くがね、お、わが兒よ、必

ず共に辛抱してゐなくちや不可んよ。恐らく神様がお前の身からこの苦しみを取り除いて、すつかり安心の出来るやうにして下さるだらうからね。昔の詩人もかう言つて歌つてゐるよ。——

運命の神は手綱かへして、われに繁榮を送りなむ、禍福はあざなへる繩の如ければ。

わが願ひは祝福されむ、わが慾望は達せられむ、幸福は人の助言についで來たらむ。』

『お、わが兒よ。』と、彼は言葉を吐きました。『俺にはもうお前が狂人でないと言ふことだけは確かに分つた。が、神様の外には、何人もこの事件を解決してくれるものはないよ。』——カマル・エズ・ゼマーンは答へました。『大神にかけて、お、わが父上よ、どうぞ私のためにあの處女を捜し出して、早く連れて來るやうにして下さい。でなければ、私は悶え死に死んでしまふでせうよ。』それから彼はわれを忘れたやうな表情をしながら、父親の方へ振り向いて、次の二句を唄ひました。——

目のあたり會はむ願ひのかなはずば、せめてはゆるせ、夢の中の、夢の果敢なき逢瀬なりとも。

とは言へ、戀に瘵れては、日も夜も眠らぬ君の眼に、どうして夢が、夢の姿をあらはされうぞ。

「お、父上よ。」と彼は言葉を續けました。「私は一時間たりとも辛抱して、あの女を待つてはゐられない。——それを聞いて、國王はさも悲しげに兩手を打ちながら、聲を擧げて叫びました。「神様の外には、あの高い大きな神様の外には、これを何うする力も權利もない！ なまじ人間の小策を弄したところで、何の甲斐もないだらうよ。」——彼はそれから子息の手を取つて、宮殿の申へ連れて行きました。其處でカマル・エズ・ゼマーンは病の床に就いてしまひました。彼の父は子息のために泣いたり悲しんだりしながら、彼の枕頭に坐つて居りました。そして、日も夜も彼の側を離れませんでした。

終ひには宰相が王の側へ來て言ひました。「お、一代の國王よ、何時まで貴方は子息のカマル・エズ・ゼマーンの側にばかりゐて、大勢の軍隊を打捨て、置かれるので御座いますか。あまりに永く國內の諸侯を遠ざけておいでになつては、或は一國の綱紀が廢れはせぬかとそれが心配でなりません。身體に疾病のあるものは、わが身のために療養の手段を盡くすのが、賢者の務めで御座います。で、私からお勧めいたしますが、何卒御子息を此處から宮殿の中の海を見張らす離れ家へ移して頂きたい。

たい。そして、貴方も御子息と共に其處へいらつしつて、心靜かに看護をなさるが宜しいでは御座りませぬか。尤も一週に二日だけは、木曜日と月曜日とに日を決めて置いて、萬機を擧はすと共に、臣下どもに拜調を賜はるやうにして頂きたい。さうすれば、その二日の間に、貴族や、大臣や、侍従や、士官や、國內の諸侯や、各州の長官や、慥悍な軍士や、その他の軍人や臣下どもが悉く御前に伺候して、それらの用件を申し上げるで御座いませう。貴方は彼等の言ひ分を聴取して、一々裁斷を下し、取る物は取り、與へるものは與へ、命令したり、禁止したり遊ばされるが宜しい。そして一週その他の日は御子息のカマル・エズ・ゼマーンと一緒に暮しなされませ。かうして貴方は神様が貴方の悲しみと御子息のそれとをお救ひ下さるまで、さうして被坐つしやるが宜しいでは御座りませぬか。お、國王よ、運命の變遷と時の災禍とが貴方の上に永劫振りかゝつて來ぬものゝやうに安心し切つて被坐つしやるのは宜しう御座りませぬ。賢人は絶えず用心をしてゐるもので御座いますからね。」

——帝王は宰相のこの言葉を聞いた時、彼の言葉を嘉納しました。そして、これはこの場合に適切な方策だと考へました。宰相の言葉は、彼に深い印象を與へました。彼は國內の綱紀の自分の周圍から亂れることを恐れました。そこで彼は直ぐに立ち上つて、彼の子息を其處から海を見晴らす宮殿の中の離れ屋へ移すやうに命令を下しました。其處へ行くのは、海の中にある六間ばかりの廣さの鋪道を傳つて行くので御座いました。離れ屋の周りには幾つも海の見晴らす窓があつて、床には美しい縞

大理石が鋪いてありました。天井はいろ／＼な顔料で彩色をして、金と紺青とで塗りたて、ありました。で、その中にカマル・エズ・ゼマーンのために絹の敷物を敷いて、壁には花緞を掛け、珠玉で飾つた帷幄をその中に吊るしました。カマル・エズ・ゼマーンはその中へ這入りましたが、情熱の過剰のために極度に興奮して、胸は痛み、顔色は蒼ざめ身體は瘦せ衰へて居りました。彼の父は又、彼のために歎きながら枕頭に坐つて居りました。そして、木曜日と月曜日毎に、國王は貴族や、大臣や、侍従や、士官や、國內の他の諸侯や、あらゆる軍人や臣下などに對して、離れ屋へ來て彼に謁見することを許しました。そこで彼等は遣つて來て、さまざま／＼な勤務を盡しながら、日の暮れるまで彼の側に仕へました。そして、日が暮れると、別れ／＼に歸つて行きました。その後で、國王は子息のカマル・エズ・ゼマーンの側へ行つて、夜も晝もその側を離れませんでした。かうして、彼は幾日も幾日も、幾夜も／＼過して居りました。カマル・エズ・ゼマーンの身に起つことは、まあこんな工合で御座いました。

さて私は、島々と七つの宮殿との主なる國王エル・ガユーアの娘なる王女ブツアの身に起つたことをお話しなければなりません。——魔靈が彼女を連れ戻つて、元の寢床に臥させた時には、その夜はもう三時間許りしか残つていませんでした。夜が明けた時、彼女は睡眠から覺めて、起き上りながら、右や左を見廻はしました。が、彼女の側に寝てゐた筈の愛人の姿は何處にも見えませんでした。

た。これを見ると、彼女の胸は騒ぎ立ち、彼女の理性は彼女を見捨て、しまひました。彼女は大きな聲を擧げて泣き出しました。すると、彼女の女奴隷や、乳母や、老女どもは皆眼を覺して、彼女の許へ遣つて來ました。そして、侍女の頭が彼女の側へ進み寄りながら、彼女に言ひました。「お、御前様よ、何事が起つたので御座いますか？」——「お、この忌まはしい老女よ。」と、ブツアは言ひました。「私の愛人は何處へ行つたのです。昨宵私の側に寝てゐたあの美しい若者は？ 何處へあの方はいらしたのか知らせておくれ。」——侍女の頭はその言葉を聞いた時、眼の前の光が暗くなつたやうな氣がいたしました。そして、何んな目に遇ふだらうとびく／＼しながら、彼女は言ひました。「お、ブツアの御前様よ。何うしてそんな見つともないことを仰有るので御座いますか？」が、ブツアは聲を擧げて叫びました。「汝に禍あれ、お、この忌まはしい老女よ、私の愛人は何處に被坐やるとんだい、あの可愛らしい顔と、黒い眼と、一文字に繋がつた眉毛とを持つた、あの美しい若者は、日が暮れてから夜明け方まで私と一緒にゐたあの方は？」——「大神にかけて、」と老女は答へました。「私は若い男にも女にも、そんな方を見掛けたことは御座りませぬ。そして、大神にかけて、お、御前様よ、お生命を大切と思召したら、そんな方なら御元談を仰有らないやうにお願いいたします。そんな御元談が若し父上のお耳にでも這入つて御覽じませ、貴方も私もお手打になつてしまひますよ。」王女ブツアは彼女に言ひました。「昨夜たしかにそのお若い方は私と一緒に一夜をお過しにな

つた。それは本當に照り輝くやうな、男の中でも一番美しい方だつたよ。』——『何卒正氣に返つて下さいませ。』と、侍女の頭は叫びました。『何誰も貴方のお側で一夜をお明しになつたやうなお方は御座いませんよ。』それを聞いて、ブツア姫は自分の手を見やると、その小指にカマル・エズ・ゼマーンの指環が嵌まつてゐるばかりで、彼女自身の指環は見えませんでした。そこで彼女は侍女の頭に向つて言ひました。『汝に禍あれ、お、この嘘つき奴！ お前は私に嘘を言ふのか、貴方と一緒に一夜をお明しになつた方はないぞと、白々しい嘘をお言ひやるのか。そして、大神の御名にかけて間違つた誓ひを立てるのか。』——『大神にかけて、』と、侍女の頭は答へました。『私は決して嘘など申し上げませぬ、又間違つた誓ひも立てませぬ。』ブツア姫はそれを聞いた時、すつかり腹を立てました。そして、傍にあつた劍を抜きながら、侍女の頭を打ちました。そして、彼女を殺してしまはうと思ひました。が、宦官や女奴隷どもが聲を擧げて彼女を留めながら、走つて、その有様を父の王の許へ告げに行きました。

王はそれを聞いて、取る物も取りあへず、娘のブツア姫の許へやつて参りました。そして彼女に言ひました。『お、娘よ、お前は一體何うしたと言ふのだ？』——『お、父上よ。』と、彼女は言ひました。『昨宵私の側に寝てゐたあの若い方は何處へいらしたので御座います？』かう言ひながらも、彼女は氣でも狂つたやうに右や左を見廻しました。そして、着てゐる衣服を裾まで引つ裂いてしまひ

ました。父の王は娘のこの有様を見た時、宦官や女奴隷どもに命じて彼女を捕まへさせました。彼等は彼女に飛びかゝつて、彼女を縛り上げてしまひました。そして、彼女の頸に鐵の鎖を附けながら、宮殿の窓に結び着けました。所で、父はと言ふと、急に世の中が狭くなつたやうな氣がいたしました。彼は深く彼女を愛してゐたので、彼女のかうなつたのが心苦しくなりません。そこで彼は國中の天文學者や、賢人や魔術に長けた者どもを喚び寄せて、彼等に言ひました。『誰でも娘の亂心を癒してくれた者には、娘を配合はせた上、王國の半ばをその者に呉れてやらう。だが、癒しそこなつた者は、立ち所に首を刎ねて、宮門の上に懸けるからさう思ふが可い。』そこで彼は娘のために、たうとう四十人の首を刎ねてしまひました。彼はあらゆる賢人を連れて参りました。けれども、誰も彼も進んで彼女を癒さうとする者は御座いませんでした。そして、あらゆる賢人が彼女を癒すことは出来ませんでした。どんな學者も、どんな魔術の達人も、彼女の病狀にはたゞ首を傾げるばかりで御座いました。

ブツア姫は三年の間同じ状態で居ました。——所で、彼女にはマンザワールと名づける一人の乳兄妹が御座いました。この男は遠國を旅行して、この間中彼女の傍を離れて居りました。彼は又眞の兄弟にも見られぬやうな、一通りならぬ情愛を以て、彼女を愛して居りました。で、彼は家に歸つて来た時、すぐに母親の前へ出て、乳兄妹のブツア姫のことを訊ねました。すると、母親は彼に向つ

て言ひました。「お、わが兒よ、姫君は狂人になつておしまひなされたよ。お可哀さうに、もう三年も頸に鎖を附けられたまゝで御座るが、どんなお醫者でもあの御病氣を癒すことは出来ないと言ふことだよ。」マルザワーンはその言葉を聞いて言ひました。「私が一度お目に懸つて見たいものだね。何かしたら、私とその病源を發見して、姫の御病氣を癒して上げることが出来るかも知れないよ。」母親はこの言葉を聞いた時、それに答へて言ひました。「あ、それは是非見舞つて上げるが可いよ。だが、明日まで待つておくれ。さうすれば、私が一つ旨い工夫をして、お前の希望が遂げられるやうにして上げるからね。」彼女はそれからブツア姫の御殿へ出懸けて行きました。そして、扉口の番を命ぜられてゐる宦官に挨拶をして賄賂を贈りながら、かう言ひました。「私にはブツア姫と一緒に育てられた一人の娘が御座います。私はそれを他所に嫁づけました。所が、姫のお身の上についた話を聞いて、それが大層その御病狀を心配してゐるので御座います。そこで、私は貴方の御親切に甘へてお願いするので御座いますが、どうか私の娘をちつとの間でいゝから、姫上に會はせてやつて下さいませんか。一寸お目に懸れさへしたら、又元來た道から出て行つて、何誰にも知れないやうにして置きたいので御座いますよ。」宦官は答へました。「夜間でもなければ、それは迎も出来ませんね。帝王が娘に會ひにいらして、お歸りになつてから、お前様はその娘御と一緒に這入つて來なされるがいゝよ。」

お媼さんは、それから宦官の手に接吻して、自分の家に戻つて來ました。そして、その日が暮れると直ぐに立ち上つて、女の服裝をさせた子息のマルザワーンの手を取つて連れ出しながら、一緒に御殿の中へ行きました。彼女はそれから子息を宦官の前へ連れて行きました。その時は、もう帝王がお歸りになつた後で御座いました。宦官はお媼さんの姿を見ると、立ち上つて、彼女に言ひました。「さあお這入りなさい、だが、あまり長くなつては困りますよ。」そこでお媼さんは子息のマルザワーンと一緒に這入りました。見ると、ブツア姫は前に述べたやうな状態で、鎖に繋がれてゐるので御座います。母親に女の衣裳を脱がせて貰つた後で、彼は姫に挨拶をしました。マルザワーンはそれから持つて來た書物を取り出して、蠟燭に火を點けました。ブツア姫は振り返つて見て、彼が誰であるかといふことを知りました。そして、彼に言ひました。「お、乳兄弟よ。お前さんは旅をしてゐたので、長い間消息が絶えてゐましたのね。」「左様です。」と、彼は答へました。「でも神様は安全に私を故郷に歸して下さいました。私は又旅に出ようと思つてゐますが、貴方のお身の上を關して、變な話を聞き込みましたから、それが心配で出られないのですよ。貴方のお話を聞いた時は、本當にこの胸が裂けるやうで御座いました。ですから、私は貴方の御病氣の原因を發見して、それを癒して上げたいと思つて、此處へ參つたので御座います。」「彼女はそれを聞いて言ひました。「お、乳兄弟よ、お前さんも私が病氣になつたのは狂氣のせゐだと思つておいでなのかい。」それから一寸彼に



合圖をしながら次の二句を唄ひました。――

人は言ふ、そなたは男戀しさに氣が狂うたと。われは答ふ、狂氣にこそ人生の粹はあれと。  
さなり、われは狂人よ。戀しいお方に逢はせてたもれ。それで病氣が癒つたら、何も言ふ  
ことないわいな。

それと聞いて、マルザワーンは相手を戀してゐることを知りました。そこで彼は彼女に言ひました。  
『どうぞその所因を、貴方の身に起つたことを残りなく私に打明けて下さい。恐らく神様は、貴方  
を救出すことの出来るやうな手段を私に教へて下さいませうよ。』ブツア姫はそれに答へて言ひ  
ました。『お、乳兄弟よ、私の身上話を聞いておくれ、それはかう言ふんですよ。――私は或夜、その  
夜の夜半過ぎとも覺しい頃、不圖眼を覺しました。そして、私の側に、それはく、筆にも言葉にも  
盡くせないやうな、東洋の柳の小枝か、印度の籐の杖かとも思はれるやうな、一人の美しい若者が寢  
てゐるのを見ました。その時私は父上がその方に命じて、私の心を試すために、そんなことをおさせ  
になつたんだと考へたのよ。と言ふのは、當時諸國の王から私を貰ひに来てゐたので、父上も私を結  
婚させようと思つていらしたんだが、私は飽くまでそれを拒んで受附けなかつたもんだからね。で、

さう考へたから、私もその方の眼を覺まさせることは控へました。つまり私がその方に抱かれて寢た  
ら、屹度父上にそのことをお告げになるだらうと心配したからよ。で、明る朝になつて眼を覺まして  
見ると、私の指環が失くなつて、その代りにその方の指環が嵌めてあつたのです。話といふのはこれ  
だけなのよ。お、乳兄弟よ。その方に會つてからといふもの、私の心は奪はれてしまつたのよ。明け  
ても暮れて泣いてばかりゐて、その合間には悲しい歌でも唄つてゐる外に、何も手に附かないの  
よ。だからお、乳兄弟よ。お前さんも手を藉して、何うしたら私の苦しみが除れるか考へて見て下さ  
い。』――それと聞いて、マルザワーンは少時の間頭を地面の方へ垂れながら、ぢつと考へ込んで居り  
ました。彼にも何うしていいか分らないので御座います。やがて彼は頭を擡げて、彼女に向つて言ひ  
ました。『なる程貴方の身に起つたことは、みんな眞實で御座いませう。私もその若い方の話には、  
すつかり智慧を絞つてしまひました。ですが、私はこれから諸國を旅行して廻つて、何とか貴方を  
恢復させるやうな手段を探して参りますよ。恐らく神様は私の手で、それを成就させて下さいませ  
う。ですから、少時の間辛抱して、騒がずにゐて下さいまし。』――かう言ひながら、彼は彼女に別れ  
を告げて、心の中にどうかそれまで辛抱の續くやうにと禱りながら、彼女の許を辭して歸りました。  
彼はそれから母親の家に歸つて参りました。そして、その夜は眠りました。夜が明けた時、彼は再  
び旅行に出發しました。行き行きて、全一ヶ月の間といふもの、彼は町から町、島から島へと長い旅

行を續けました。その後で彼はエト・ターフと呼ばれる都へ這入つて行きました。そして、ブツア姫の病氣の癒るやうな方法はないものかと心の中に願ひながら、町の人々にいろく新しいことを訊ねました。どの都へ這入つても、又どの都を過ぎつても、彼はいつでも國王エル・ガーユーアの姫君なるブツア姫が氣が狂つて惱んでいらつしやると言ふ噂を聞きました。彼はそれでも尙新しい噂に耳を傾けることを廢めないで、たうとうエト・ターフの都へ到着しました。其處で彼は國王シャー・ゼマーンの王子なるカマル・エズ・ゼマーンが御病氣で、矢つ張り氣が狂つて惱んでいらつしやるといふ噂を聞き込みました。この話を聞いた時、彼はその町の人々に王子の國は何と言つて、都は何處にあるかと訊ねました。すると、彼等は彼に答へて、カールリダンの島々といふのがそれで、此處と其處との間には、海で一箇月、陸で六箇月の道程があると教へました。

そこでマルザワーンは、カールリダンの島々へ行く船に乗り込みました。その船は長途の航海に堪へるやうな立派なもので御座いました。風も一箇月の間は追手を受けて、間もなく目の前にその都が見えるやうになりました。が、都の見える處まで来て、もう少して海岸へ着かうとした時、急に颶風が起つて、帆柱を折り、帆を吹きちぎつてしまひました。そして、船は客や荷物を載せたまま、轉覆してしまひました。乗り込んだ人々は皆生命からくその身の安全を求めました。マルザワーンはといふと、彼は怒濤に乗せられながら、國王の離れ屋の下へ連れて行かれました。その離れ屋には例のカマ

ル・エズ・ゼマーンが寢てゐるので御座います。これが運命の引き合はせといふもので御座いませうか、恰度その時國王シャー・ゼマーンは、多くの貴族や大臣どもを前にしながら、王子カマル・エズ・ゼマーンの頭を膝の上に載せたまま、坐つて居られました。そして、一人の宦官が王子にまつはる蠅を拂つて居りました。カマル・エズ・ゼマーンは二日間といふもの飲みも食ひもせず、物も言ひま sense せんでした。宰相は、海を見晴らす窓際に立つて居りましたが、不圖眼を擧げると、濤のために今にも殺されようとして、最後の息を吐いてゐるマルザワーンの姿が見えました。それを見ると、彼は慄隠の心に動かされました。そして、帝王に近づいて、彼の方へ首を差し延べながら言ひました。『どうか離れ屋の庭へ降りて門を開くことをお許し下さいませうか。海の中にも溺れて死なうとしてゐる男を助けて、その男の嘆きを悦びに變へてやりたう御座います。さうでもしたら、或は神様が御子息を今の苦しみからお救ひ下さるで御座いませう。』帝王は答へました。『俺の子息がかうなつたのも、元を糺せばみんなお前のした所業なんだ。お前が今その溺れかけてゐる男を救つてやつたら、その男は俺の家の事情を見抜いて、子息の容態をも目のあたり見て、好いことを知つたと、定めて喜ぶだらうよ。だが、俺は大神にかけて誓ふがね、若しその溺れかゝつてゐる男がこゝへ這入つて来て、俺の子息の様を見て、それから他所へ行つて、俺の家の内情を少しでも漏らすやうなことがあつたら、その男の首を刎ねる前に、先づ斷じてお前の首を刎ねるからさう思ふが可い。まあその

心得でお前の思ふ通りにした方が可いよ。」

宰相はそこで立ち上つて、庭の扉を開けながら、土手の鋪道の上へ出て行きました。そして、二十歩ばかり進んで、海の傍へ来た時、今將に死なうとしてゐるマルザワーンを見ました。で、彼は彼の方へ手を延ばして、頭の毛を掴みました。そして、彼を引き上げました。マルザワーンが海から上つた時は、正氣を失つて、腹一杯、水を呑んで、眼が飛び出して居りました。宰相は彼が正氣に戻るのを待つて、濡れた着物を脱がせて、他の着物を着せながら、部下の若者の頭巾を頭に被せてやりました。その後で、彼は相手に向つて言ひました。「お前さんは溺れて死ぬ所を私のお蔭で助かつたのだから、お前さんのお蔭で私もお前さんも生命を捨てるやうな事のないやうにして下さいよ。」——「何うしてそんなことを仰有るんです？」と、マルザワーンは訊ねました。宰相はそれに答へて言ひました。「それは他でもない、これからお前さんが上つて行つて、貴族や大臣どもの中へ這入ると、帝王の子息なるカマル・エズ・ゼマーンのために、みんな黙つて、誰一人口を利くものがないから、お前さんもその積りでゐなければ不可せんよ。」マルザワーンはカマル・エズ・ゼマーンといふ名を聞いた時、これまで通つて来た國々でも到る處彼の噂を聞いたから、その名は前から知つてゐましたが、わざと知らないやうな振りをして、「カマル・エズ・ゼマーンとは何ういふ方で御座いますか。」と訊ねました。宰相はそれに答へて言ひました。「その方は帝王シヤール・ゼマーンの子息で、今は病氣に

なつて、晝と夜との見分も附かない程苦しみながら、寢床に就いてゐられるんですよ。王子は身體の衰弱から、殆ど生命を失つて、死者の中に數へられようとせられました。晝は熱に惱まされ、夜は又夜で苦しんでゐられます。私ども、もうあの方の生命は長くないと諦めました。もう直にこの世を去られますよ。ですから、決してあの方の方を眺めないやうにして下さい。いや、そればかりではない、お前さんの立つてゐる處より外には、何處も眺めないやうにして下さい。それでなければ、お前さんも私も生命を召し上げられますからね。」——その時マルザワーンは言ひました。「大神にかけてお願いいたしますから、只今お話しになつた若者の身の上を何卒私に聞かせて下さい。そして、その方がそんな風になられたのは、何ういふ所因か教へて下さいまし。」そこで宰相は答へました。「その所因と言つたところで私は何にも知らない。たゞ三年前にその方の父上がその方に結婚をさせようとなさいました。所が、その方はそれをお断りになつた。そして、朝になつて眼を覺ますと、昨夜一人の處女が来て自分と一緒に寝てゐたなどと言ひ出されました。それは何んな賢人でも迷はせるやうな、筆にも言葉にも盡くされないやうな、絶世の美人であつたと言ふのです。そして、その方の話に依ると、その方はその女の指環を取つて自分の小指に嵌め、自分の指環をその女の指環に嵌めて置かれたと言ふことですよ。だから、大神にかけて、お、わが兒よ、私と一緒に離れ屋へいらつしやい。だが、決して王の子息の方を見ては不可せんよ。それから後で、お前さんの好きな處へ行くが

可い。何を言ふにも帝王は私のことを非常に怒つて被坐つしやるんだからね。——そこで、マルザ  
ワーンは心の中に言ひました。「大神にかけて、これこそ私の探ねてゐたものに違ひない！」彼はそれ  
から宰相に躓いて離れ屋へ上つて行きました。そして、宰相はカマル・エズ・ゼマーンの足許に坐り  
ました。が、マルザワーンはと言ふと、つか／＼と前へ進みながら、カマル・エズ・ゼマーンの前に立  
つて、ちつと彼の顔を見詰めました。それを見ると、宰相は死人のやうに蒼くなつて、マルザワーン  
の方を見遣りながら、頻りに出て行くやうに合圖をしました。が、マルザワーンはわざとそれに氣の  
附かないやうな振りをしてゐました。彼はなほちつとカマル・エズ・ゼマーンの顔を見詰めてゐました  
が、自分の探ねてゐたものはこれに違ひないと悟つたので、大きな聲を擧げて言ひました。「あゝ、こ  
の若者の姿を姫のやうに、その顔色を姫のやうに、又その頬を姫のやうに造り上げた神の缺くる所な  
き力は讃められてあれよ。」これを聞いた時、カマル・エズ・ゼマーンは眼を見開いて、ちつと耳を澄  
ました。マルザワーンは又相手が自分の言葉に耳を澄ましてゐると知ると、次のやうな詩句を唄  
ひ出しました。——

美しき女の美しさを語る時、君の顔は晴れ／＼とした悦びと心が、りとに充ちて見ゆ。

君は戀に、戀の箭に射とほされたる身か、戀に傷つきたる者の外に、さう言ふ癖はない筈

なれば。

さらば、われに一杯の酒を與へて、心行くかぎりスレイマーヤ、エル・ラバーブヤ、テノ  
ームの頌詞を唄はしめよ。

われは嫉まむ、かの君の腰にまつはる唐衣を、絶えず御肌に觸れてしあれば。

われは嫉まむ、かの君の口に觸れたる盃を、玉の御手に取り上げられて、その唇に觸  
る、時。

われ死ぬも、刃に刺されて死んだとは、夢思はれな、美しき眼の箭に射られし我なれば。

いつか二人が逢ひし時、かの君の手は紅かりき、アングムの汁もて染めに染めしごと。

かの君はかく言ひぬ、わが胸を戀の炎に燃えさせながら、戀を隠さぬ人のごと。

許したまへ、こはわれの常に用ふる顔料ならず、夢々謔や偽りを言ふとてわれを咎めたま  
ふな。

われはこの手を、この腕を、この肘までも露はに出して、君の眠れる姿に見入れる時、  
別れの辛さに血涙絞りて、それをこの手に拭ひ取りぬ。さればぞこの指血に染みたるよ。  
かの君戀しさに、われかの君よりも前に泣きしならば、悔いの來たらぬ前に、わが魂を  
和げる術もあらむ。

されどかの君われよりも前に泣きて、女の涙はわが涙を誘ひ出だしぬ。われは言へり、先例こそ尊けれと。

かの君を愛するとしてわれを咎めたまふな。われこそかの君のために苦しむ者なれば。われは泣けり、美しき人のために、亞刺比亞人の間にも、外國人の間にも並ぶ者なき人のために。

かの君はルカマーンの智慧と、ユーズフの姿と、ダウードの聲と、マリヤの徳とを持てり。然るにわれはヤークープの悲しみと、ユーススの嘆きと、アイユーブの苦しみをもちて、アダムの境に身を置くものなり。

かくてわれはかの君戀しさに死ぬとも、かの君殺すことなけれ。それよりも問へ、かの君に、何故君はわが血を流させて、それで正しと思へりやと。

マルザワーンがそれ等の詩句を唄つた時、その言葉はカマル・エズ・ゼマーンの心に清涼と強壯劑のやうな效目をあらはしました。で、彼は口の中で舌を廻しながら、手で以て帝王に、この若者を私の側に坐らせて下さいと言ひでもするやうな合圖をいたしました。帝王は非常にこの若者の仕事を憤りながら、その首を刎ねるやうに吩咐けようとして居りましたが、子息のカマル・エズ・ゼ

マーンのこの言葉の意味を覺ると、又非常に喜びました。彼は立ち上つて、マルザワーンを子息の側に坐らせました。そして親切に物を言ひ掛けながら、「お前さんは何處の國から來てくれたのだ？」と訊ねました。彼は答へました。「はい、私は島々と、海と、七つの宮殿の主なる國王エル・ガーユーアの領國から參りました。」そこで又國王シャー・ゼマーンは言ひました。「多分お前さんのお蔭で子息のカマル・エズ・ゼマーンも助かるやうになるでせうよ。」その時マルザワーンはカマル・エズ・ゼマーンに話し掛けながら、彼の耳に口を寄せて言ひました。「元氣を出して、大いに面白く、はしやいで被坐つしやい。貴方がこんなにまで戀ひ焦がれていらつしやる相手の御婦人も、そりやアもう此處でお話するのも可哀想な程苦しんでるので御座いますよ。貴方は御自分の事情を親御に隠してゐて、こんな御病氣におなりになつたのでせうが、その婦人は自分の心の中を人に言つて、狂人になつて。今ぢや首に鐵の鎖をつけられながら、見るも憐れな有様で幽閉されてゐるので御座いますよ。ですが、若しそれが神の思召しで御座いましたら、貴方がたお二人は私の手で屹度元の身體にして上げますよ。」で、カマル・エズ・ゼマーンはその言葉を聞いた時、再び靈魂が身に戻つて、五官の感能を恢復しました。そして、父なる國王に合圖をして、自分を寢床の上に坐らせてくれるやうに頼みました。王はそれを聞いて非常に歡びながら、子息を坐らせてやりました。それから貴族や大臣どもを悉く傍から退けました。そして、カマル・エズ・ゼマーンは二つの枕に凭れながら寢床の上に坐

りました。國王は蕃紅花で離れ屋を香はせながら、町にも裝飾をするやうに命じました。そして、マルザワーンに言ひました。「大神にかけて、お、わが兒よ、これは全く目出たい出来事だよ。」彼はそれから相手に無上の恩寵を加へながら、食物を供して餐應するやうに命じました。そこで御馳走が彼の前に出ました。彼はそれを食べました。カマル・エズ・ゼマーンも彼と一緒に食べました。そして、その夜を彼と一緒に過しました。國王も亦子息の恢復した嬉しさに、その夜は二人の傍に付ききりにして居りました。

次の朝、マルザワーンはカマル・エズ・ゼマーンに彼の話をして聞かせながら、彼にかう言ひました。「私は貴方が一夜を共に過されたといふその婦人をよく知つて居るんですよ。その方は名をブツア姫と言つて、國王エル・ガーユーアの娘御で御座います。」彼はそれからブツア姫の身に起つた一伍一什を話して聞かせました。そして、彼女の彼に對する激しい愛情をも残る限なく傳へました。——「貴方と父上との間に起つたことは、」と、彼は言ひました。「又悉く彼女と彼女の父君との間にも起つたので御座いますよ。疑ひもなく貴方はあの姫の戀人で御座います、又あの姫は貴方の戀人で御座います。ですから、元氣を出して、しつかり心持をお定めなさい。私は貴方を姫のお傍へ連れて行つて、二人の間を繋ぎながら、詩人の一人が言つて置いたやうに、貴方のために盡くす覺悟で御座いますからね。——」

よしや相手が頑固で、戀に惱める愛人に、どれだけ辛く當たるとも。  
心安かれ、われ出では、二人の間を繋いで已まじ、恰度剪の要のやうにわれは生まれし身にしあれば。』

こんな風にして、彼は飽くまでカマル・エズ・ゼマーンに力を附けたので、しまひには彼も食つたり飲んだりするやうになつて、彼の靈魂が身體へ戻つて來ると共に、長い間の煩ひから恢復しました。彼はなほ絶えず彼の話相手になつて、いろいろ慰めたり、娛しませたり、又は歌を唄つて聞かせたりいたしました。で、しまひには彼も入浴するまでになりました。それを見て、彼の父は、餘りの嬉しさに、再び全市の裝飾をするやうに命じました。そして、臣下に榮譽の衣裳を賜はつたり、貧民に施與をしたり、又牢獄に這入つてゐる者を釋放したりいたしました。

その後マルザワーンはカマル・エズ・ゼマーンに向つて言ひました。「私がブツア姫の許から此處へ參りましたのは、たゞこれだけの目的があつたからで御座います。即ち今の苦しみからあの姫を救ひ出して上げたいと言ふのが、私の旅行の目的なんです。で、これまでになれば、たゞ二人で姫の許へ行きさへすれば宜しいのです。が、それには一つ策略を廻らさなければなりません。貴方の父上は、貴方と別れてゐるなどと言ふことは考へて見るだけでも堪へられないでせうからね。で、

明日一つ貴方から父上に森の中へ狩獵に行くことを許して頂くやうに願つて下さい。そして、金子を一杯入れた一對の鞍袋を持つて、脚の疾い馬に乗つて、別に一疋換馬を連れて行くやうに頼むんですよ。貴方は父上の前へ出たら「私は森の中へ行つて、狩獵をして、廣々とした野原を見て、一晩其處で泊つて来たいと思ひます。ですから、私のためには少しも御心配下さないやうに願ひます。」と、かう仰有るが宜しう御座いますよ。——カマル・エズ・ゼマーンはマルザワーンの言葉を聞いて非常に喜びました。そして、父君の前へ行つて、狩獵に行く許しを請ひながら、マルザワーンの言つたやうに言ひました。そこで彼の父は彼にその許しを與へましたが、同時に彼に向つて言ひました。「一晩より餘計に泊つて来ては不可ませんよ。そして、明くる日の朝は、再び俺の側へ歸つて来てゐるやうにしておくれ。お前も知つてゐるだらうが、俺はお前がなければこの世に何の楽しみもないのだからね。それに、お前はまだすつかり病氣が癒つたとは言はれないやうに思ひますよ。」そこで、國王シャー・ゼマーンは子息の前で次の二句を唄ひました。——

ありとある快樂を保ち、キスラーの帝國を合はせて、世界がわが有となるとも。  
わが眼御身の姿を見ざらんか、われにとりては蚊の翼ほども嬉しからじ。

かう言ひながら、彼はわが兒のカマル・エズ・ゼマーンに、マルザワーンとともに、出立の準備をさせました。そして、六疋の馬と、金子を積んで行く一疋の一峯駱駝と、水や食物を搬んで行く一疋の駱駝とを連れて行かせるやうに支度をせよと、臣下どもに命じました。又カマル・エズ・ゼマーンは、誰も自分のお供をしてはならないと、固く禁じました。そこで父の王は彼に別れを告げながら、わが兒を自分の胸に抱き縮めました。そして、彼に言ひました。「俺がお前に頼んで置くがね、大神にかけて、一晩より以上俺の側を離れてゐては不可ませんよ。俺はその晩終宵眠らないで、お前を待つてゐるんだからね。」

それからカマル・エズ・ゼマーンとマルザワーンの二人は、二疋の馬に乗つて、金子を積んだ一峯駱駝と一緒に連れながら、いそぐと出發しました。そして、ひろくとした野原の方へ顔を向けながら、だんく進んで参りました。最初の日も暮れて夕方になつた時、二人は馬から降りて、飲んだり食つたりいたしました。そして、畜類どもにも飼秣を當てがひながら、しばらく休息いたしました。その後で二人は又馬に乗つて、旅行をつづけました。そして三日の間進んで行つて、四日目に林のある廣い地方へ着いた時、二人は又そこで馬から降りました。その時、マルザワーンは駱駝と一頭の馬とを引き出して、それを屠りました。そして、その肉を切り取つて、その皮を剥ぎました。それからカマル・エズ・ゼマーンに襪衣と下洋袴とを脱がせて、それを切れぐに引き裂きました。そし

て、それを馬の血にとつぶり浸けました。彼等は又カマル・エズ・ゼマーンの上胴着を取つて、それを引き裂いて、とつぶり血に浸けました。そして、それを路の岐かれる處に投げ捨てました。その後で二人は食つたり飲んだりして、又出懸けました。そこでカマル・エズ・ゼマーンはマルザワーンに彼がしたこと理由を訊ねました。そして、マルザワーンはそれに答へました。「貴方の父上、國王シヤー・ゼマーンは、貴方が一晩泊つた後で次の目にも、次の日にも彼の側へ歸られなかつたら、屹度馬に乗つて、吾々の後を追つ駈けられるに違ひない。そして、私が血を流した處まで遣つて来て、貴方の切れくになつて血に塗れた着物を御覽になつたら、道を扼する盜賊か、林の中の野獸にでも出會つて何か貴方の身に事變が起つたとお想ひになるでせう。それから貴方のことは斷念して都へお歸りになりませう。この謀計に依つて、私どもはその目的を達することが出来るんですよ。」カマル・エズ・ゼマーンはそれを聞いて、「成程、お前さんの遣り方は巧いぬ。」と答へました。二人はそれから晝も夜も休まないで旅行を續けましたが、カマル・エズ・ゼマーンは始終泣いてばかり居りました。が、たうとう目的の國へ近づいた時には、非常に喜んで、次のやうな詩句を唄ひました。――

御身は露の間も御身も忘れしことなき戀人を虐げて、一たび許せし男を捨てたまふか。

われにして、若し御身を欺かば、御身の一諾を失はむ、又若し御身に不忠實ならば、放棄

をもつて報いられむ。

われはさる辛き目に遇ふやうな、過失も罪も犯せしことなし。よしや一旦罪ありとも、われは悔いて來る。

御身若しわれを捨てなば、そは驚くべき不幸なり。されど運命は常に奇蹟を齎すものぞ。

彼がこれ等の詩句を唄ひ終つた時、國王エル・ガユーアの鳥々が眼の前に現はれて來ました。そして、カマル・エズ・ゼマーンは、我を忘れて喜びながら、マルザワーンのしてくれたことに對して謝禮を述べました。二人は都の中へ這入つて行きました。マルザワーンはカマル・エズ・ゼマーンを商館に泊らせましたが、二人は長途の疲勞を休めるために三日の間其處で休息しました。その後で、マルザワーンはカマル・エズ・ゼマーンを浴場に案内しました。そして、商賈の着物を着せながら、彼のために金で造つた地卜の牌と、一組の器械と、同じく金で造つた觀象儀とを調べてやりました。彼はそれから相手に向かつて言ひました。「お、わが君よ、これから行つて王の宮殿の下にお立ちなさい。そして「吾は算度者なり、學者なり、天文者なり、吾に頼んで觀て貰はうといふ人はないか。」とお呼びなさい。國王は貴方の聲を聞くや否や、使者を寄越して、貴方を可愛い娘の許へ案内せられるでせうからね。姫が貴方を御覽になつたら、狂氣の病は立ち所に平癒するで御座いませう。さうし



たら、王は姫の恢復を喜んで、姫を貴方に配合はせた上、その國の半分を貴方に與へられることで御座いませう。王様はかね／＼自分からさういふ條件を出して被坐つしやるのですからね。」

そこでカマル・エズ・ゼマーンはマルザワーンの忠告に従つて、商賈の服装をして、前に擧げたやうな一組の器械を持ちながら、商館から出て行きました。そして、國王エル・ガユーアの宮殿の下へ行つて、其處に足を駐めながら、「君こそは學者なり、算度者なり、天文者なり。」と呼ばはりました。『私は結婚の日取りを見て上げる。確かな御符を書いて上げる。算度もすれば、地下の文字も書く。それに依れば、地の下に隠れた財寶が、掌を指すやうに分りますよ。何誰か、觀て貰ひたい人はありませぬか。』——この都の人々はその言葉を聞いた時、長い間算度者や、天文者といふものを見たことがないので、珍らしさうに彼の周りに立つて、彼を見て居りました。そして、彼の姿の美はしさと、若々しさとに眼を瞠りながら、彼に向つて言ひました。『私どもは大神にかけて、貴方にお願ひしますがね、お、わが君よ、何卒そんな風にして貴方の身を危険に曝さないで置いて下さい。貴方も國王エル・ガユーアの姫君を妻にしたいといふ野心を持つておいでだらうが、そりや駄目だよ。それよりも後を振り向いて、あの門に懸つてゐる首を見なさるが好い。あの首の持主も、みんなそのために殺されたのだ。みんなお前さんのやうな野心から身の破滅に陥つたのだよ。』——が、カマル・エズ・ゼマーンはそれ等の言葉に耳を藉しませんでした。それ所か、一層聲を張り上げて、「われは學

者なり、算度者なり。」と、再び呼ばはりました。『私は地の下に隠れた財寶を求める人に教へて上げることが出来るんだよ。』——人々は尙も彼に懇願しながら、何うかして止めさせようといひました。が、それ等の言葉を耳にも懸けないで、彼は再び聲を張り上げて、前のやうに呼ばはりました。それを聽いて、人々はみんな彼に對して腹を立てながら、口々に言ひました。『お前さんは本當に高慢で馬鹿な若者だね。そんな若い、年齢も行かぬ身をして、そんな美しい可愛らしい顔をして、少しは自分のことも考へて見るが可い。』——が、彼は聲を擧げて言ひました。『われは天文者である、算度者である！ 誰か見て貰ひたい人はありませんか。』

で、人々が何うかして彼に勸めて、そんな馬鹿な眞似を止めさせようとしてゐる間に、たうとう國王はその呼び聲と、人々の騒ぐ聲とを聞きつけました。そして、宰相に向つてその天文者を此處へ連れて來いと吩咐けました。そこで宰相は階段を降りて來て、カマル・エズ・ゼマーンを連れて行きました。彼は國王の前へ行つて、彼の前の地面に接吻しながら、次の二句を唄ひました。——

君には、七つの尊き性質具はる。——それがためにぞ、運命も永久に君が下僕たるなり。  
——確かな智慧と、憐愍と、氣高き心と、寛大と、能辯と辯舌と、尊き門地と征服とは即ちこれ、

で、國王エル・ガーユーアは彼の姿を見た時、彼を自分の側に坐らせました。そして、嫺やかに物を言ひ掛けながら、彼に言ひました。「お、わが兒よ、大神にかけて、われは天文者だなどと言を吐かぬが可い。さもたれば、俺の條件を承諾しなくちやならんぞ。俺は俺の娘を見舞つて、あれの身に振りかゝつた病氣を癒し得ない者は、悉く首を刎ねる、その代りあれの病氣を癒した者には、直ぐにあれを配合はせると言ふ誓ひを立て、居るからね。自分の美しさと、愛らしさと、姿形の整つたために思ひ上つて、後に悔いを残さぬが可いぞ。大神にかけて！ お前があれの病氣を癒すことが出来なかつたら、俺は、立ち所にお前の首を刎ねてしまふぞ。」——カマル・エズ・ゼマーンはそれを答へました。「私は謹んでその條件を承諾いたします。」そこで國王エル・ガーユーアは司法官を呼んで彼と自分との間の證人にならせました。そして宦官を喚んで、彼を渡しながら、この人をプゾア姫の許へ連れて行けと命じました。

そこで宦官は、彼の手を取つて、廊下傳ひに彼を案内しました。が、カマル・エズ・ゼマーンは彼の前に立つて歩きました。それを見ると、宦官は彼に向つて言ひ出した。「貴方は本當にお氣の毒な方ですね！ そんなに急いで死の淵へ飛込むものぢやありませんよ。大神にかけて、私も随分多くの天文者を案内したが、まだ貴方のやうに急いで死に、行く人を見たことがありますよ。ですが、貴方は本當に貴方を待つてゐる災厄を御存じないでせう。」——宦官はそれから入口の扉の上に垂れて

ある帷幄の前にカマル・エズ・ゼマーンを立ち停まらせました。その時カマル・エズ・ゼマーンは彼に向つて言ひました。「こゝに二つの方法がありますね、私はこゝに立つてゐて姫君の御病氣を療治して上げた方がいゝか、それとも帷幄の中へ這入つて癒して上げた方がいゝか、貴方はどつちが好いとお思ひですかい。」宦官は彼の言葉を聞いて、眼を睜りながら彼に答へました。「貴方が此處に立つてゐて、姫君の御病氣を癒して下さりや、それは勿論貴方の術の一層優れてゐる證據にはなりませんよ。」それを聞いて、カマル・エズ・ゼマーンは帷幄の前に座を占めながら、インキ壺とペンとを取り出して、紙の上に次の言葉を認めました。——

「別離に惱む戀人の苦悶は、愛人との婚約さへ成り立てば、癒されるもので御座います。されど人生に絶望して、その身も死ぬものと思ひ詰めた男の運命は不幸の外にありますまい。その男の悲しい心には支へる柱も助ける人もありません。又その男の眠らぬ眼には、誰一人憂悶を除いてくれる者も御座りませぬ。その男は、晝は晝で悶えて暮らし、夜は夜で苦しんで明かします。その男は絶えざる心身の消耗に苦しんで來ました。その男には愛人の消息を傳へる使者は一人も來ませんでした。」——彼はその後、次の詩句を書き添へました。——

われは書く、君に捧げ、君を思ひつめたる心もて、血の涙に爛れたる眼瞼もて。

烈しき戀と悲しみとに實れ果てたる身をもつて、瘠せさらばひては、見る眼もいぶせき身をもつて。  
君に訴ふ、わが戀の苦しきよ、はた切なきよ、忍ぶ心もはや盡き果てたり。  
さらば君も、われを憐れめ、われを許せ、われを宥れよ。君を思ふ心の激しさに、わが胸既に破れむとす。

この詩の下に彼は書き添へました。——「戀に破れた胸の回復は愛人との結合によつて初めて實現されます。相手のために苦しめられた男の悩みを癒す醫師は、たゞ一人の神の外には御座りませぬ。二人の中のどちらが相手を欺いたとしても、欺いた者は失望いたしました。情を知らぬ相手に飽くまで眞實を運ぶ戀人より可憐らしいものは、人の心を喰るものは何處にもないからで御座います。」——それからその手紙の終りに彼はかう書き添へました。——「苦しみて狂へる、思ひ詰めて思ひ亂れたる、戀しき懐かしさに堪へやらずで、恍惚と亂心との虜となれるシャー・ゼマーンの子息なるカマル・エズ・ゼマーンより、今の世に竝ぶ者なき、美しき天の侍女の中にも際立ちて優れたる、國王エール・ガーユーアの愛娘なるブツア姫に參らす。——察したまへ、私は過度の疲勞と病氣とに、愛と欲望とに苦しみながら、數へ盡くせぬ溜息を吐きながら、涙の灘津瀬を迷らせながら、戀の奴隷、

情熱の性、欲望の玩弄物、疾病の伴侶として、夜は夜もすがら寢もやらず、晝は日ねもす心亂れてのみ過して來ました。私は永久に睡眠を奪はれた不安な男で御座います。涙の乾く暇のない戀の奴隷で御座います。私の胸の火は決して熄えたことがない、私の欲望の炎は決して絶えたことがない。——かう書いて來た後で、彼は手紙の縁にこの名高い詩を書き添へました。——

神の恵みの寶庫より出づる平和は、わが魂と心とを所有する彼女の上に降れよ。

その後には彼は又附け加へました。——

われに與へよ、優しき言葉を。われに憐愍を垂れるために、又はわが心を安んずるために。君戀しさの餘りに、又わが心の嬉しさに、われはわが身を虐ぐる病を輕んぜり。

神よ、その住家遠く彼方にありし人々を守れ、いかなる難に遭ひても、わが心渝らざりしその人を守れ！

時こそ來れ、今や運命われに幸ひして、われを愛人の鬨の上に連れ來れり。

われはわが前に、床中に眠れるブツア姫を見る。姫の太陽に照らされて、わが運命の月

も輝き渡るよ。

それからその手紙を封じて、彼は宛名の所に次の詩句を認めました。――

わが手紙に問へ、わが筆の書きしものを。文字はわが悦びと心ながらとを君に傳ふるならむ。

わが手の書ける間に、わが涙は絶えず流れ、わが欲望は紙に向つてわが病めるを訴ふ。わが涙は紙に注いで盡くることなし。涙の盡くることもあらば、われは血を以てそれを續けむ。

彼は又それに次の句を付け加へました。――

こゝに、二人が逢ひし夜に取り交はせし指環を返しまつる。願はくばわが指環をわれに送りたまへ。

（といふのは、彼はその手紙の中にブゾーア姫の指環を封じ籠めて置いたからで御座います）

彼はそれからその手紙を宦官に渡しました。宦官はそれを受け取りました。そして、それを持つたまゝ、ブゾーア姫の寢間へ這入つて行きました。彼女は彼の手からそれを受け取つて、その中に自分の指環が這入つてゐるのを発見しました。そして、彼女はそれを讀んだ時、その手紙の目的を了解しました。彼女は愛人がカマル・エズ・ゼマーンであつたことを知りました。又彼が帷幄の外側に立つてゐるのだといふことを知りました。そこで、彼女の理性はあまりの嬉しさに逃げ失せてしまひました。彼女は直様立ち上つて、壁に足を突つ張りながら、満身の力を籠めて鐵の環を引つ張りました。そして、鎖と一緒に、それを首から引き千斷つてしまひました。そして、駈け出して行つて、カマル・エズ・ゼマーンに身を投げ掛けながら、鳩が雛に哺育んでゐるやうに、彼の口に接吻しました。彼女は烈しい情熱に驅られて相手を抱擁しながら、彼は言ひました。「おゝ、わが君よ、これは夢では御座りませぬか、それとも起きてゐるので御座いますか。そして、神様が實際私どもの再會を許して下さつたので御座いますか。」彼女はそれから神を讃め稱へながら、絶望から彼女を救ひ出してくれた神に感謝しました。で、宦官は彼女のこの有様を見た時、國王エル・ガユーアの前へ駈着けました。そして、彼の前の地に接吻しながら、彼に言ひました。「おゝ、わが君よ、あの天文者はあらゆる天文者の中の一番偉い天文者で御座います。あの人は帷幄の後に立つてゐながら、お側へ参りも

しないで、姫君の御病氣を癒してしまひました。』——『それは本當のことか。』と、國王は言ひました。——『お、わが君よ。』と宦官は答へました。『直ぐに来て姫の様子を御覽下さいまし。姫君は鐵の鎖を引き千斷つて飛び出しながら、天文者を抱擁したり接吻したりして被坐つしやいますよ。』そこで國王エル・ガーユーアは立ち上つて、娘の部屋へ這入つて行きました。姫は父君の姿を見た時、立ち上つて、顔を隠しました。國王は、姫の恢復を非常に喜んで、彼女の眼と眼の間に接吻しました。彼は並外れて彼女を愛してゐたからで御座います。それからカマル・エズ・ゼマーンに向つて優しく物を言ひ掛けながら、彼の身の上について訊ねました。そして『お前さんは何處の國から來たのだ?』と言ひました。そこでカマル・エズ・ゼマーンは自分の身の上を打ち明けて、自分の父は國王シャー・ゼマーンであるといふことを告げました。そして、一任一任の物語をしながら、自分とブツア姫との間に起つたことや、自分が姫の手から指環を取つて、姫は又自分の指環を取つて嵌めたといふことまで打ち明けました。それを聞いた、國王エル・ガーユーアは眼を睜つて驚きました。そして、言ひました。『貴方の話は記録に載せられて、孫子の末までも繰返しく讀まるべきもので御座いますよ。』それから直ぐに彼は司法官や證人どもを喚び集めて、ブツア姫とカマル・エズ・ゼマーンとの婚約を固めました。そして、七日の間全市に裝飾をするやうに命令を下しました。宴會は準備され、全市は裝飾を施されました。人々は、ブツア姫が王の子息なる美しい若者と戀に落ちる

やうに計らひ給うたといふので、神を讃め稱へました。そこで侍女どもは、彼の前に姫の顔見世をさせました。そして、結婚の儀式も滞りなく済みました。次の日國王は饗宴を開いて、島の内外の住民を悉く招待いたしました。饗宴は全一箇月の間續きました。

その後カマル・エズ・ゼマーンは父のことを思ひ出しました。そして、父に會つて、『お、わが兒よ、お前は俺をこんな目に遭はせるのか。』と言ふのをまぎくと聞いたやうな夢を見ました。彼はそれから悲しうな顔をして起き上りました。そして、その夢を妻に物語りました。そこで彼女は彼と一緒に父の前へ出て、その事を父に告げながら、旅行に上る許可を願ひました。王はカマル・エズ・ゼマーンにその許可を與へました。が、ブツア姫は、『お、父上よ、私は迎も良人と別れてゐることは出来ませぬ。』と言ひました。そこで國王は、『それならお前も一緒に旅行をするが可い。』と答へました。彼は姫が全一年の間カマル・エズ・ゼマーンと一緒に滞在する許可を與へました。そして一年経つた後では又父を訪ねてくれるやうに頼みました。それを聞いて、彼女は父の手に接吻しました。カマル・エズ・ゼマーンも同じやうにしました。國王エル・ガーユーアはそれから娘とその良人とに出發の準備をさせました。彼は二人のために旅行用具を整へてやりました。二人のために數十頭の馬や駱駝と、姫のために一挺の輿とを用意しました。又二人のために驢馬や一峯駱駝に満載して、旅行に必要な總ての物を供給しました。で、出發の日に、彼はカマル・エズ・ゼマーンに別れを告げ

ながら、金で織つて、珠玉で飾つた華麗な衣裳を與へた上に、又金銀の財寶をも賜はりました。そして、ブツア姫の一身を護つてくれるやうに、彼に頼みました。その後で、彼は島々の端々まで二人を送つて行きましたが、其處で再びカマル・エズ・ゼマーンに別れを告げた上、ブツア姫の乗つてある輿の中へ這入りながら、娘を抱いて泣きました。それから娘と別れて出て来て、彼女の良人の側へ行きました。そして、再び彼に別れを告げて、彼に接吻しました。かう言ふやうにした後で、彼はいよく二人と別れました。そして、カマル・エズ・ゼマーンと彼の妻とに旅行を續けるやうに命じた後で、軍勢を引率して、自分の領地なる島々へ歸りました。

そこでカマル・エズ・ゼマーンとブツア姫とは、供人と一緒に、最初の日も、次の日も、第三の日第四の日も進んで行つて、一箇月の間旅行を續けました。それから二人は牧草の茂つてある廣い牧場の中に降り立ちました。そして、その中に天幕を張つて、二人は食つて飲んで、更に休息をいたしました。そして、ブツア姫が眠りました時、カマル・エズ・ゼマーンは這入つて行つて、彼女が杏色の絹の襦袢に包まつて、珠玉で飾つた金の織物の被衣を頭に被りながら眠つてゐるのを見ました。そして、彼はアングムのやうに紅い、貴重な石が彼女の股引の紐に結び着けてあるのを目を留めました。その石には讀まれないやうな文字が二行に彫りつけて御座いました。カマル・エズ・ゼマーンはそれを見て不思議に思ひながら、ひとり心の中に言ひました。「彼女がこんなにして股引の紐にま

で結び着けて、何んな事があつても失くさないやうに隠してゐるところを見れば、この寶石は彼女に取つて餘程大切なものに相違ない。それにしても、彼女はこれを何にするんだらう、この石の持つて居る秘密の性質は何だらう？」彼はそれからそれを手に取つて、明るい處でよく見るために、それを持つたまゝ、天幕の外へ出て行きました。所が、彼がそれを右見左見してゐる間に、見よ、一羽の鳥がそれに飛びかゝつて、彼の手からそれを引つ攫ひながら、飛んで行つてしまひました。そして、それを咬へたまゝ、再び地面の上に降り立ちました。

カマル・エズ・ゼマーンは、その貴重な石を失ふことを恐れて、鳥を追つ懸けて行きました。が、その鳥は後から追つ懸けて来るカマル・エズ・ゼマーンと同じ割合で、前へ、前へと飛んで行きました。カマル・ゼマーンは、谷から谷へ、山から山へ、何處までも追つ懸けて行く間に、たうとう夜が来て、四邊が暗くなつてしまひました。その時鳥は高い木の上に一夜の埒を求めましたが、カマル・エズ・ゼマーンはその木の下に立つて、飢ゑと疲勞とにぼんやりしながら、たゞ氣を揉むばかりで御座いました。彼はもうこれまでだと諦めて、歸らうと思ひました。が、何處をどう歸つたらいかも分かりませんでした。その間に夜がいよく追つて来たので、彼は聲を擧げて叫びました。「あゝ、高く大いなる神の外には、いかなる力も権力もない！」彼はそれからその木の下で眠つて居りました。鳥は鳥で、朝までその木の上に棲まつて居りました。朝になつて彼が睡眠から覺めた時には、鳥も恰

度眼を覺ました所で御座いました。そして、その木から飛び立ちました。そこで彼もその後から蹤いて行きました。鳥は又、カマル・エズ・ゼマーンが歩くのと同じ速度で、何時までも少しづつ、飛んで行きました。それを見て、彼は微笑しながら言ひました。「これは又何うしたと言ふのだ！ 昨日あの鳥は私が駈けるのと同じ割合で飛んでゐたのに、今日は又疲れて、駈けられないといふことを知つてゐると見えて、私が歩くのと同じ割合で飛んで行く。眞個これは不思議だよ。が、私は矢つ張りこの鳥に蹤いて行く外ない。命が助かるか、死んでしまふか、どつちになつても仕方がない。まあ、あの鳥の行く方へ行きませう。いづれにしても、あの鳥は屹度人の住んでゐる國に留まるだらうからね。」

——彼はそれから何處までも鳥に蹤いて行きました。あの鳥は每晚樹の上に夜を明かしました。彼は木の實を食べたり、川の水を飲んだりして、十日間といふもの、その鳥に蹤いて行きました。その後で彼は一つの町が見える處まで來ました。すると、その鳥は矢のやうに町の中に飛んで行つて、カマル・エズ・ゼマーンの眼から消えてしまひました。それを見て、彼は吃驚しながら、聲を擧げて叫びました。「私の命を助けて下さつた神は讃められてあれよ。いよく私もこの町へ着いた！」それから彼は水の端に坐つて、手と足と顔を洗ひました。そして、前の生活の安樂と、故郷や友から遠く離れて、飢ゑと疲勞とに疲れ果てた今の状態を思ひ比べながら、少時休息いたしました。

かうして休んだ後で、彼は町の門を這入りましたが、何處へ行く目宛でもないのです、何時の間にか

その町を通り抜けてしまひました。彼は陸の方の門から這入つて、だん／＼歩いて行くうちに、海の方の門から出てしまひました。そして、その間に一人もその町の住民に會ひませんでした。その都は海岸の上に御座いました。彼は海の方の門から出て、だん／＼歩いて行くと、その町の菜園に着きました。彼は木々の間へ這入り込んで、或菜園の門の前に立ちました。すると、一人の園丁が彼の前へ出て來て、挨拶をしながら、彼に言ひました。「貴方がこの町の人々の毒手から免れたのは、眞個神の御恵みですよ。まあ住民に見られない間に、早くこの菜園の中へお這入りなさい。」——これを聞いて、カマル・エズ・ゼマーンは、何だか變な話だとは思ひながら、その菜園の中へ這入りました。そして、園丁に向かつて、「一體この町の住民は何ういふ人達です？」と訊ねました。園丁は答へました。「この町の住民と言ふのは、みんなマーズ教の道士ですよ。大神にかけてお願ひしますがね、何うして貴方は此處へ來たのか、貴方がこの國へ這入つて來た所因を聞かせて下さい。」カマル・エズ・ゼマーンはそこで自分の身に起つたことを残らず話して聞かせました。園丁はそれを聞いて、非常に驚いたやうな顔をしてゐました。そして、彼に向つて言ひました。「お、わが兒よ、回教徒の國々は此處からそりやあ遠いんですよ。其處と此處との間には、船で行つても四箇月、陸路を行けば一年間かゝる道程がある。尤も、此處には一年に一度商品を積んで回教徒の國の近くまで行く船がありませんがね。まづ此處から鳥木の島々へ行つて、其處から帝王シヤール・ゼマーンの領有して居られるカ

「リダーンの島々へ廻航するんですよ。」——これを聞いて、カマル・エズ・ゼマーンは少時の間心中に思案してゐました。そして、かうなつては、もう暫らく園丁の許に足を止めて、生産物の四分の一を貰つてその助手となるより外に、自分にとつて、格別好い思案もないといふことを悟りました。で、彼は相手に向つて、「貴方は、この菜園から獲れる物の四分の一を給與するといふ條件で、私を貴方の助手にして下さいませんか。」と頼みました。園丁はそれを聞いて、「はい、承知しました。」と答へました。彼はそれから木々の間に水を灌漑する方法を彼に教へました。そして、カマル・エズ・ゼマーンは一生懸命に水を灌いだり、草を掻き取つたりいたしました。園丁は又彼に腰までしかない青色の法被を着せました。そして、彼は涙ながらに、明けても暮れても戀しいブツア姫の歌を唄ひながら、毎日木々の間に水を濺いで暮しました。

所で、彼の妻なるブツア姫は何うなつたかと言ふに、彼女は睡眠から覺めて、良人カマル・エズ・ゼマーンを喚んで見ましたが、彼は何處にも居ませんでした。それから股引の紐の結び目に觸つて見ると、それが解けて、例の寶石が失くなつてゐるのを知りました。そこで彼女は心の中に言ひました。「お、大神よ、これは不思議だ！ 良人は何處に被坐つしやるんだらう？ どうもあの方がこの石を持つていらしたに違ひない。あの石の持つてゐる祕密の功德を御存じないんだものね。それにしても、何處へいらしたのだらう？ かうして行つてしまはれたに就いては、何か不思議な出来事があつ

たに違ひない。だつて、あの方は自分の心からは一時間でも私の側を離れてゐられないんだもの。ああ、あの石は呪はれてあれ、この不幸を齎した時も呪はれてあれ！——彼女はそれから思案しながら、心の中で言ひました。これから従者どもの中へ行つて、良人の居なくなられたことを告げたら、彼等は屹度金子が欲しさに無理なことを言ひ出すに違ひない。だから、こゝで一つ謀計を運らす必要がある。かう言ひながら彼女はカマル・エズ・ゼマーンの衣裳を出して身に着け、彼のやうな頭巾を被りました。そして、顔の一部にリサームを捲きつけながら、自分の輿には一人の女奴隷を入れませした。その後で、彼女は天幕の中から出て、従者どもを喚びました。従者どもは直ぐに彼女の前へ馬を曳いて参りました。彼女はそれに乗つて、荷物を馬や駱駝につけるやうに命じました。彼等はその言葉に従つて、その通りにいたしました。そして、出發しました。かうして、彼女は自分の陥つた不幸を隠してしまひました。と言ふのは、誰も彼女が實際彼であるといふことを疑ふ者がない程、彼女はよくカマル・エズ・ゼマーンに似てゐたからで御座います。かうして彼女は従者どもを連れながら日夜旅行を續けました。そして、たうとう海に臨んだある町の見える處までやつて参りました。それを見て、彼女は馬から降りて、少時休息するために、其處に天幕を張らせました。彼女はそれから、その町の名を聞いて見ましたが、「これは烏木の都で御座います。王様はアルマーヌス王と申上げで、ハヤー・テン・ヌフースと言ふ一人の姫君を持つて被坐しやいます。」といふ返辭で御座いました。



所が、プツア姫が馬から降りて此處に休息してゐた時、アルマーヌース王は宮殿から使者を立てて町の外廓に野營してゐるのは、何處の國の王で、名は何といふ方だと伺はせました。そこで使者はこちらへ遣つて来て、從者どもにそれを訊ねました。從者どもは「これは道に迷つた王の息子で、國王シヤー・ゼマーンに會ひに、カリリダインの鳥々を指して旅行をしてゐられるんだ。」と告げました。そこで使者は國王アルマーヌースの前に立ち歸つて、その由を申し上げました。國王はそれを聞くや否や、その國の貴族どもを従へながら、この珍客を訪問に來られました。彼が天幕へ近づいて來た時、プツア姫は徒歩のまゝ彼の前に進みました。國王アルマーヌースも馬から降りました。そして二人は互ひに挨拶を交はしました。彼はそれから彼女を都の中へ案内して、一緒に自分の宮殿へ連れ行きしました。其處で彼は宴會の準備を命じて、彼女が饗應の場へ案内するやうに吩咐けました。そして、彼女は三日の間其處に逗留しました。

その後で、プツア姫は浴場へ這入ることになりました。そして、彼女は初めて満月の照り渡るやうな顔を見せました。それを見た人々は皆彼女の美しさを嘆賞する念に充たされました。彼女はそれから金の刺繡をして、玉珠で飾つた銀の衣裳を身に纏ひました。その時國王アルマーヌースは優しく物を言ひ掛けながら、彼女に言ひました。「お、わが兒よ、私はもう年に不足のない老人だが、残念なことには、一人の娘より外に生涯子といふものを恵まれなかつた。その娘はしかし姿なら、身丈恰

好なら、美しさ愛らしさまで、貴方によく似て居るんですよ。私はもう近頃は國王の義務を果たすことが出来なくなつた。そこで一つ貴方に相談を掛けるんだが、どうか私の國に留まつて、この國に住んで下さることは出来ないかね。それが出来れば、私は自分の娘を貴方に配合させて、この王國を貴方に差上げようと思つて居るんだよ。」それを聞いてプツア姫は頭を垂れて考へ込みました。そして、その額は羞かしさに汗ばんで參りました。彼女は心の中に言ひました。「私が女であつて見れば、これはまあ何としたら可からう？ 私が國王の命に従はないで出發してしまつたら、屹度軍隊に追つ駈けさせて、私を殺しておしまひなさるに違ひない。と言つて、命に従つたら、又どんな恥を蒙るやうなことになるかも知れない。あゝ、戀しいカマル・エズ・ゼマーンは行方知れずになつて、今は何處においでになるか分らないし、私はもう王の依頼を承知して、神様の思召に依つて成るやうに成つてしまふまで、王と一緒に此處に住ひをする外に、生命を助かる術さへ知らない身なんだよ。」

彼女はそのから頭を擡げて、「仰せの趣き委細承知しました。」と言ひながら、王の言葉に従ひました。それを聞いて、王は殊の外喜びました。そして、烏木の鳥々の隅から隅までその喜びを祝つて家々を裝飾するやうに布令を出しました。彼はそれから侍従や、尉官や、貴族や、大臣や、國中の他の諸侯や、町の司法官を喚び寄せて、自分は玉座を滑りながら、その代りにプツア姫を帝王の位に即けて帝王の紫衣を彼女に着せました。總ての貴族は、彼女の若いことなぞには不平を言はないで

悉く彼女の前に伺候しました。そして、彼女を見た程の者は、一人残らず彼女の世に稀れなる美しさと愛らしさとに眼を瞠つてゐました。

かうしてプゾーア姫が帝王の位に即いて、この喜ばしい事件を觸れる太鼓が鳴り渡つた時、アルマーヌス王は娘のハヤー・テン・ヌフーズを結婚させる支度に取リかかりました。そして、數日後、人々はプゾーア姫をハヤー・テン・ヌフーズ姫に引き合はせました。二人が並んで立つた時には今昇つたばかりの二つの満月か、それとも二つの太陽かと思はれるばかりに見えました。そして、侍女どもが二人を一室に案内して、あかくと蠟燭を點して、寢床を延べて、帷幄を卸して、その部屋を閉めてしまつた時、プゾーア姫はハヤー・テン・ヌフーズ姫と一緒に坐りました。そして、良人のカマル・エズ・ゼマーンのことを想ひ出すにつけて、彼女の悲しみはだんく烈しくなりました。そして、さめくと涙を流して泣きながら、次のやうな句で始まる數章の詩を唄ひました。――

お、君行きて後、わが心は憂ひに充ちて、君いまさねば、わが身の中に生命もあらず――

それから、ハヤー・テン・ヌフーズ姫の傍に坐つて、彼女の口に接吻しました。そして、急に立ち上りながら、手や顔を洗ひ淨めて、ハヤー・テン・ヌフーズ姫が睡魔に襲はれて眠つてしまふまで、

ぢつと祈禱を捧げてゐました。それから寢床へ這入つて、彼女に背を向けながら朝まで眠りました。で、朝になつた時、老王とその妻とは娘の許へやつて來て、様子は何うだと訊ねました。そこで彼女はありし様子と、自分の聞いた詩句とを二人に告げました。

が、王女プゾーアは出て行つて、ちやんと玉座の上に坐りました。すると、貴族や、國中の諸侯やその他の長官や軍人どもは彼女の前に伺候して、彼女の登極に對するお喜びを申上げました。そして彼女の前の地面に接吻しながら、彼女のために祈禱を捧げました。それに對して、彼女は微笑をたへて彼等に物を言ひながら、譽れの衣を與へたり、貴族どもの知行を増して遣つたりいたしました。そんな風で總ての軍人や人々は皆彼女を愛しました。そして、彼女が女だといふことには夢にも疑念を抱かないで、只管彼女の御宇長かれとばかり祈りました。彼女は又命令したり、禁制したり、正義や公平を分與したり、牢獄に繋がれてゐる人間を釋放したり、關税を輕減したりいたしました。彼女は日は暮れるまで政廳に坐つて居りました。それから彼女のために用意された部屋へ這入つて見ると、其處にはもうハヤー・テン・ヌフーズが來て坐つて居りました。そこで彼女は自分も彼女の傍に坐つて背を撫で擦りながら、相手を抱いて眼と眼の間に接吻しました。それから又、前夜のやうに、良人の不在を悲しむ數章の詩句を唄ひました。その後で、彼女はすつと立ち上りながら、涙を拭ひました。そして、手や顔を洗ひ淨めながら、祈禱を捧げました。そして、ハヤー・テン・ヌフーズ姫が睡魔に

襲はれて眠つてしまふまで、それを續けて居りました。女王ブツアはそれから彼女の側に横になつて、朝までさうして居りました。朝になると、彼女は起き上つて朝の祈禱を済ましてから、玉座の上で坐つて、命令したり、禁制したり、人民の訴訟を處理したりいたしました。その間に、アルマーニス王は再び娘の許へ参りました。そして、彼女は女王ブツアの唄つた詩句を繰り返して聞かせながら、ありし事どもを悉く彼に告げました。そして、彼に向つて、「お、父上よ、私は未だ嘗て私の所夫のやうな、感じが鋭いと言はうか何と言はうか、あんなに羞かしがる人を見たことが御座いませぬ。」と言ひました。彼女の父はそれを聞いて答へました。「お、わが娘よ、今夜だけ、この第三の夜だけ辛抱してくれ。若し彼が今夜もまだ妻に對する當然の敬意を拂はなかつたら、まあ何うするか見てゐるが可い、俺は彼の王位を剝奪して、この國から彼奴を放逐してしまつてやるからね。」かうして彼は娘と共に今後の手段を相談しました。そして、心の中に決心いたしました。それで、その夜になつた時、女王ブツアは玉座から立ち上りました。そして、宮殿の中に自分のために設けられた部屋に歸つて見ると、あかくと蠟燭が點火つて、ハヤー・テン・ヌフーズ姫が一人坐つて居りました。そこで彼女は又、所夫のことを想ひ出しながら、この數日間自分と所夫の身の上に起つた出來事をいろ／＼思ひ運らしました。そして、泣きながら、何時までも悲嘆に暮れて居りました。そして、再び自分の不幸を歌つた數章の詩句を誦しました。それから又立ち上つて、祈禱を捧

げようといいたしました。所が、ハヤー・テン・ヌフーズ姫は彼女の裾に縋り着いて、彼女に言ひました。「お、わが君よ、貴方はあれほど親切に貴方を待遇した父上の手前としても、こんなに長い間私を何うもしないで打遣つて置いて、それで羞かしいとお思ひになりませぬか。」それを聞いた時、女王ブツアは下に坐り直しながら、彼女に答へました。「お、わが愛人よ、お前は何を言ひなさるのだ？」「私の言ひたいのは、と、ハヤー・テン・ヌフーズ姫は答へました。「私はまだ貴方のやうに我の強いお方は見たことがないと言ふことで御座います。美しい男といふものは、みんなさうしたもので御座いませうか。でも、私はこれを自分のために言ふのでは御座いません。ただ貴方が父上のために何んな目にお遭ひなされようかと、それを心配して言ふので御座います。と言ふのは、若し貴方が私に對して相當の敬意をお拂ひにならなければ、明日はもう貴方の王位を奪つて、國外に放逐すると仰有つて、御座いましたものね。恐らく父上の憤怒はいよく増して、貴方をお殺しになるやうなことがありますと思ふのですよ。ですから、私は貴方に對する同情の念に動かされて、こんな忠告がましいことを申し上げたので御座います。何うしようとも決めるのは貴方の御自由で御座いますよ。」その言葉を聞いて、女王ブツアは深く頭を地面の方へ垂れました。そして、何うしたものかと當惑しながら、心の中に言ひました。「王の言葉に従はなかつたら、私は殺されるんだ。」と言つて、その言葉に従へば、私は恥を見なければならぬ。兎に角、私も今は烏木島

の女王で、島々はみんな私の配下にある。そして、私は此處に居なければ可憐しいカマル・エズ・ゼマーンに廻り會ふことも出来ない。所夫が生れた國へ歸らうとすれば、どうしても烏木の島々を通る外に道がないんだものね。かうなればもう仕方がない、何事も神様のお手に委せませう。神様は一番たしかな指導者でいらつしやるんだから。——彼女はそれからハヤー・テン・ヌフーズ姫に言ひました。「お、わが愛人よ、私がこれまで貴方を打遣つて置いたのは、決して私の心から出たのではありませぬ。」彼女はかう言つて、自分の身に起つたことを始めから終ひまで残らず打明けました。そして、「大神にかけてお願いしますがね、どうぞ神様の御恵みで私が戀しいカマル・エズ・ゼマーンと再會するまでは、私の今言つたことを隠して置いて、私の秘密を守つて下さいませ。一度會ふことが出来さへしたら、その後は又何うにでも成るやうに成りませうよ。」——これを聞いて、ハヤー・テン・ヌフーズ姫は極度に吃驚してしまひました。そして、彼女に對する憐愍の情に動かされながら、二人の再會を心から祈りました。そして、彼女に向つて言ひました。「お、わが姉妹よ、もう心配することも、氣を揉むこともありません。それよりも、神様がしようと思つたことを仕遂げておしまひなさるまでちつと辛抱していらつしやい。無邪氣な處女の胸は秘密の幕で御座います。どんなことがあつても、私は貴方から伺つた秘密を漏らすやうなことは御座いませんよ。」——それから二人は一緒に戯れながら、互に抱擁しました。そして朝の祈禱の鐘が鳴るまで眠りました。その時ハヤー・

テン・ヌフーズ姫の母親がやつて来て、彼女の報告を聞いて満足して歸りました。女王ブザーアは、朝の祈禱を済ました後で、政廳へ出ました。そして、玉座の上に坐りながら、人民を裁斷いたしました。アルマーヌース王もその報告を聞いて、大いに満足しました。彼は胸の重荷が取れたやうな氣がしました。そして、又饗宴を開きました。かうして彼等は長い間つゞけました。——カマル・エズ・ゼマーンと女王ブザーアとの冒険はまあこんな風で御座いました。

所で、國王シャヤ・ゼマーンは何うなつたかと言ふに、——前にも述べたやうに、彼の息子がマルザワーンと連れ立つて、狩獵に出て行つた後で、彼は次の夜まで待つてゐました。待つ甲斐もなく、息子が歸つて來なかつた時、彼の理性は亂れました。そして、その夜は眠ることが出来ませんでした。彼は極度の不安に陥りました。彼の興奮は非常なもので、遣る瀬のない心配に燃えるやうな思ひをいたしました。そして、その夜がまだ明けないうちから起き上つてしまひました。彼は、息子を待ち侘びながら、正午まで坐つて居りました。が、彼は歸つて參りませんでした。王の心は、別離の恐怖に戦きながら、息子の身の上を案じて燃え上りました。彼は泣きに泣いて、涙に紫衣の袖を浸しました。それから、涙を拭いて立ち上りながら、軍隊に進軍の命を傳へました。そして、長途の遠征に上るやうに迫りました。そこで、軍隊は悉く馬に乗りました。國王は息子のために悶え苦しみながら悲哀に充ちた心を抱いて出發しました。彼は軍勢を前と後と、右と左との四部隊に分ちました。そ

して、明日みんなが道の岐路で出會ふやうにするんだよと、彼等に言ひました。で、軍勢はかう言ふやうに四部隊に分れて出發しました。そして、その日の暮れるまで進軍しました。それから、その夜終宵とその次の日の正午まで進軍を續けました。その時、彼等は道の四股に岐れる地點に到着しました。そこで彼等は何の道を取つていゝか分りませんでした。が、此處で彼等は切れんに裂けた衣裳と、寸断々々に切られた肉塊とを見つけました。彼等は、又血の痕跡に眼を著けました。衣裳のあらゆる布片を拾ひ集めました。そこで、國王シャー・ゼマーンはそれを見た時、胸の底から大きな叫聲を發しました。そして、『おゝ、わが兒よ。』と、叫びました。彼はもう自分の子息は死んでしまつたに違ひないと思つたので、びしやくと顔を叩いたり、髻を掻き搥つたり、衣裳を引裂いたりいたしました。彼の嘆きと悲しみとは非常なもので御座いました。軍勢も彼と一緒になつて泣きました。彼等はみんなカマル・エズ・ゼマーンが此處で落命したに違ひないと思つたので御座います。彼等はみんな塵の中に轉がつて泣き喚きました。そして、彼等が命も絶え入る程泣き悲しんでゐる間に、夜になつてしまひました。國王シャー・ゼマーンは、もう自分の子息は野獸が強盜にでも襲はれて、切れ切れに引つ裂かれて死んだものに違ひないと諦めて、それから軍勢を引率して都へ歸りました。彼はカーリダーンの全島に布令を示して、子息のカマル・エズ・ゼマーンを追悼するために、人民は悉く黒衣を着て喪に服せよと傳へました。それから又自分のために悲哀の家と名づける屋宇を建立しました。

した。そして、木曜と日曜だけは、出でて軍隊や人民の事件を裁斷しましたが、その餘の日は悲哀の家に引き籠もつて、子息の死を悲しむ歌を誦しながら、その後世を弔つて暮らしました。その間女王ブツアは、ずつと烏木の島々の王位に即いて居りました。人々は彼を指さしては、あれこそアルマーンヌス王の婚君だと言ひ囃しました。来る夜も、彼女はハヤー・テン・ヌフーズ姫と一緒に寝ました。そして、所夫のカマル・エズ・ゼマーンの不在を啣ちながら、相手の姫に彼の美しさや、愛らしさを語つて聞かせました。そして、夢になりとも彼に會ひたいものだと言ひ暮しました。

所で、カマル・エズ・ゼマーンは、長い間、菜園の中にその主人と一緒に住みながら、毎日毎夜泣いたり、溜息を吐いたり、過去の享樂や幸福を詩に唄つて嘆きながら暮らして居りました。その間園主は始終彼を慰めて、年の暮には回教徒の國々へ向けて出帆する船があるから、それまで辛抱せよと言つて聞かせました。かうして居る間に、或日人々が一緒に集まつてゐるのを見て、彼は少なからず驚きました。その時園主は彼の傍へ来て、彼に言ひました。『おゝ、わが兒よ、今日は仕事を罷めるがいゝ、木々に水を遣ふことも要らないよ。今日はこの土地の祝ひ日で、人々はたがひに訪問したりされたりしてゐるんだよ。だから、お前さんも休んで、たゞ菜園の見張りだけをして居てもらひたい。』と言ふのは、俺はこれからお前さんのために船の都合を聞き合はせに行つて来るからね。お前さ

んを回教徒の國へ送り還して上げるのも、もう間がないからよ。『國王は、それから出て行きました。そしてカマル・エズ・ゼマーンは一人菜園の中に残つて居ました。すると、悲しくつて、彼はまた涙を流して泣きました。泣いて居るうちに、たうとう氣を失つて倒れてしまひました。正氣に返つた時、彼は立ち上つて、自分の身の不幸や、永い間の遠流や、別離を心に思ひ運らしながら、菜園の中を廻つて歩きました。かう言ふ風に、彼の心が亂れてゐたので、彼は躓いて、俯伏せに倒れました。そして、額を木の根に打ちつけましたが、打ち附け方が酷かつたと見えて、血が流れて、涙と交つてたらしくと垂れました。が、彼はその血を拭き取つて、涙も乾かしました。そして、額を檻樓片で結び着けながら、なほも菜園の中を廻つて歩きました。そして、不圖眼を高い木の方に向けて見ると、その木の上で二羽の鳥がたがひに争つて居りました。一羽の方が力が勝つてゐたと見えて、一羽の頸へ嘴を突つ込みながら、その首を胴體から喰ひ切つてしまひました。そして、その首を啣へたまゝ、飛んで行きました。かうして殺された鳥の胴體は、恰度カマル・エズ・ゼマーンの立つてゐる前の地面の上へ落ちて來ました。そして、それが其處に横たはつてゐる時、見よ、二羽の大きな鳥が、その上に舞ひ下りて、一羽はその上端に、一羽はその尻尾の方に棲まりながら、互にその羽翼で死骸を蔽ひました。そして、首をのばしながら、悲しげな聲を擧げて啼きました。そこでカマル・エズ・ゼマーンも、二羽の鳥が友の死を嘆き悲しんでゐるのを見て、妻との別離を想ひ出しながら、

一緒に泣きました。その後で、彼は二羽の鳥が穴を掘つて、その中に、殺された鳥を埋めるのを見ました。さうして置いて、二羽の鳥は、大空高く舞ひ上りました。が、その影が見えなくなつてから、暫くすると、彼等は前に相手を殺した鳥を連れて戻つて來ました。彼等は殺された鳥の墓の上へ降りて、その上に蹲りました。そして、その鳥を殺しました。それから、その胴體を喰ひ裂いて、臟腑を引き出しました。そして、その血を殺された鳥の墓の上に注ぎました。それから、その肉や皮を切れ切れに引き裂いて、その中にあるものを悉く引き出しながら、それを彼方にも、此方にも振り蒔きました。

これらの様子を、カマル・エズ・ゼマーンは驚きの眼を睜りながら、初めから終ひまで見て居りました。そして、二羽の大きな鳥が他の鳥を殺した場所に眼をやつた時、彼は不圖何かしら光る物があるのに氣が附きました。そこで彼はその傍へ近づいて見ましたが、それはその鳥の餌囊だと言ふことが分りました。彼はそれを取り上げて、それを開けて見ました。そして、その中に彼が妻と離れて苦勞艱難する基となつた石が這入つてゐるのを見附けました。それこそあの石であると知るや否や、彼は餘りの嬉しさに悶絶して地面の上に倒れてしまひました。それから正氣に返つた時、彼は心の中に言ひました。『これは好い前兆だ、私が再び愛人と一緒になれる前兆に違ひない！』彼はそれからその石をつつく／＼眺めながら、それで眼の上を撫でました。そして、それから嬉しいことが生まれるに

違ひないと豫想しながら、その石を腕に結び着けました。その後で、彼は立ち上つて、菜園の中を徘徊しながら、園主の歸宅を待つてゐました。彼は夜まで彼の歸宅を待ち侘びてゐました。が、彼はとうとう歸つて参りませんでした。そこでカマル・エズ・ゼマーンは毎時の場所に眠りました。そして、夜が明けた時、又起き上つて仕事にかゝりました。

椰子の葉の織維で造つた繩を帯に締めながら、彼は耨と籠とを持つて菜園の中へ這入つて行きました。そして、一本の皂莢の木の下へ來た時、彼は耨でその根元を掘りました。掘られるたびに、その木は大きな音を立てました。かうして彼は土を其處から取つて退けました。さうしながら、彼は一つの陥穽の蓋を見附けました。その蓋を開けて見ると、其處に一つの孔道が御座いました。彼はその中へ降りて行きました。そして、タムード人やアード民族時代の古い窖を發見しました。その窖は随分廣いもので、赤金を填めた數多の壺が藏して御座いました。それを見て、彼は心の中に、あゝ苦勞の時代は去つて、喜びと幸福がやつて來た！と叫びました。それから彼は窖を出て菜園の中へ上りました。そして、陥穽の蓋を元のやうにししながら、再び仕事に取りかゝつて、菜園の中の木々に水を灌いでやりました。

かうして彼は日の暮れるまで忙がしく働いて居りました。その時園主はやつと戻つて來て、彼に言ひました。「お、わが兒よ、お前さんが直ぐに生れ故郷へ歸られると言ふ、好い消息を持つて來て上

げたよ。商賈どもはもう航海の支度をして、船は三日の間に島木の都へ向けて出帆することになつてゐる。回教徒の國では、其處が一番取りつきの都だからね。お前さんは其處から陸を歩いて行つても、六箇月間でカトリダーンの島々へ、シャー・ゼマーン王の許へ着かれるんだよ。」それを聞いて、カマル・エズ・ゼマーンは非常に喜びました。そして園主の手に接吻しながら、彼に言ひました。「貴方が私に好い消息を持つて來て下さつたから、私も貴方に好い消息を教へて上げますよ。」かう言つて彼は窖の一件を彼に知らせました。それを聞いて、園主も亦非常に喜びながら答へました。「私は八十年この菜園の守りをして居るんだが、そんな物があらうとは夢にも知らなかつた。それなのに、お前さんは僅に一年足らず私と一緒に居ただけで、それを見附けた。だから、これは天からお前さんに授かつた物で、これでお前さんの苦勞をおしまひにする手段にするが可いよ。それだけあれば、お前さんが家に歸つて、再び愛人と一緒に居る助けには十分なるだらうからね。」が、カマル・エズ・ゼマーンはこれは何うしても貴方と私と二人で分けなければ不可ないと言ひ張りました。彼はそれから園主を連れて、その窖の中へ案内しながら、二十個の壺に這入つてゐる金貨を見せました。そこで彼はその中の十壺を取つて、園主も同じやうに十壺を貰ひました。その時園主は彼に言ひました。「お、わが兒よ。この菜園の中にあるアサーフイトリの橄欖油をお前さんに上げるから、大きな壺にいくらでも詰めなされるが可い。その橄欖油は他の國にはないので、商賈どもが争つて諸國に輸出する

ものだからね。先づ壺の中に金貨を入れて、その上に橄欖油を詰めなざるが可い。それから固く壺の栓をして、船へ持ち込むんですよ。』——そこで、カマル・エズ・ゼマーンは直ぐに立ち上つて、五十個の大きな壺に、先づ金貨を入れて、その上から橄欖油を詰めた後で、一つづつ密封しました。彼は又壺の一つに例の寶石をも入れて置きました。その後で彼は園主と話しをしながら坐つて居りました。が、家族の者と再會するのも間もないことだと思ふと、又いろ／＼な思ひが泛かんで來ました。そして、一人心中に言ひました。『烏木の島々へ着いたら、其處から直ぐに父の國を指して旅しよう。そして、愛人のその後の様子を訊ねてみよう。だが、彼女はあれから自分の國へ歸つたのではないから、それとも私の父の許へ行つたのか知ら、それとも途中で何か事變が彼女の身に起りはしなかつたか知ら？』

彼はそれから日が暮れるのを待ちながら坐つてゐました。そして、園主に三羽の鳥の間に起つたことどもを話して聞かせました。園主はそれを聞いて吃驚してゐました。その後で、二人とも朝まで眠りました。が、眼を覺ました時、園主は病氣になつて居りました。二日の間は其儘で過ぎましたが、三日目に彼の病氣は、もはや生命も危いかと思はれる程重くなりました。そこでカマル・エズ・ゼマーンは園主のために悲しみました。そして、彼がこの有様で居る間に、見よ、船長が水夫を連れてやつて來て、園主のことを訊ねました。そこで彼は主人が病氣になつたことを告げました。彼等はそれ

から、『吾々と一緒に烏木の島へ渡らうと言ふ若者は、何處に居るか。』と訊ねました。カマル・エズ・ゼマーンは答へました。『餘人でもない、前に居るこの下、僕が左様で御座います。』そして、彼は壺を船へ搬んでくれるやうに、彼等に頼みました。そこで彼等はその壺をみんな船へ搬びました。そして、カマル・エズ・ゼマーンに言ひました。『どうか急いで下さい、風の向きが好くなりましたからね。』彼はそれから自分の食糧を船へ搬びました。そして、園主に別れを告げるために、もう一度戻つて參りました。所が、彼は今や斷末魔の苦しさで陥つた所で御座いました。そこで彼は老人が死んでしまふまでその枕頭に坐つて居りました。そして、彼は死人の眼を閉ぢてやつて、埋葬するやうに亡骸の準備をした後、それを埋めて遣りました。

これをした後で、彼は船へ駛り着きました。が、船はもう帆を張つて出發した後で御座いました。海を劈いて進んで行く帆影が、消えてしまふまで、まぎ／＼と眼の前に見えておりました。彼は當惑もすれば、惱亂もしました。そして、重い悲しい心を抱いて菜園へ歸りましたが、歸つてからも地面に轉がつて、頭に塵を浴びながら泣き悲しみました。彼は菜園の持主からそれを借り入れて、木々に灌漑する手傳ひをさせるために人を傭ひました。それから陷奔の蓋を開けて窖の中へ降りて行きました。そして残りの金貨を五十個の壺に詰めて、その上から橄欖の油を入れました。それから彼はいろいろ船の様子を訊ねて見ました。が、人々は皆、一年に一度しか船は出ませんねと答へました。彼の



心の苦痛は増すばかりで御座いました。彼は自分の身に起つた災厄を嘆きました。殊にブツア姫の寶石を失くしたことが一番心に懸りました。彼は又日夜泣いたり、歌を誦したりして過すやうになりました。

その間、例の船は追風を受けて海上を駆けりながら、間もなく烏木の島々へ到着しました。所で、これが神の引合せとでも言ふもので御座いませうか、女王ブツアは窓の際に坐つて、その船が海岸に碇を下すのを見て居りました。彼女の胸はそれを見た時、何となく胸騒ぎがしたので、貴族や侍従どもを引き連れて馬に乗りながら、海岸へ降りて行きました。そして、船員どもが貨物を倉庫へ搬ぶのを見ながら、船の近くに立ち停りました。彼女は、すぐに船長を喚び寄せて、何を積んで来たかと訊ねました。彼は彼女に答へました。「お、國王よ、私はこの船に、香油や、粉末薬劑や、目薬や、膏薬や、軟膏や、その他駱駝や驢馬では逆も積んで来られぬやうな、いろくいな財貨や、立派な原料や高價な商品を積んで参りました。その中には精基や、香料や、伽羅や、羅望子や、又この國では滅多に見られないやうなアサーフイリーの橄欖油やが御座います。」それを聞いて、彼女はその橄欖油を欲しいと思ひました。そして、その船の持主に向つて、「お前さんの持つて来た橄欖油といふものは一體どの位あるんだね？」と訊ねました。彼は答へました。「はい、大きな壺に五十本持つて参りました。ですが、その持主は私どもと一緒に居ないので御座います。それにしても、國王には

お望みだけお取り下されて宜しう御座いませう。」そこで彼女は、「兎に角それを陸へ揚げておくれ、私自分がそれを見るからね。」と言ひました。船長は水夫どもを喚んで、五十本の壺を陸へ揚げさせました。彼女はその一つを開いて、橄欖の油を見ながら、「これは五十本とも貰つて置くよ。幾許でもいゝから値段を言つておくれ。」と言ひました。船長は答へて言ひました。「こんな物は私どもの國ぢや、値段は御座いませんよ。ですが、その持主といふのは船に乗り後れて来ませんでしたし、それに貧乏人で御座いますからね。」——「兎に角値段はいくらだえ？」と、彼女は言ひました。彼は答へました。「それでは銀貨の一千片だけ頂きたう御座います。」——「それぢや銀貨の一千片でそれを貰つて置ませう。」と彼女は言ひました。

それから彼女はそれ等の橄欖油を宮中へ搬ばせるやうに命じました。そして、夜になつた時、彼女はその一壺を取寄せて、それを開けて見ました。その部屋には彼女とハヤ・テン・ヌフーズ姫との外には誰も居ませんでした。彼女は一枚の皿を前に置いて、その中へ壺から少し明けて見ましたが、香油と思ひの外、金貨がその皿の上へ堆高く盛り上りました。それを見て、彼女は、ハヤ・テン・ヌフーズ姫に言ひました。「これは金貨ぢや御座いせんか！」それから彼女はあらゆる壺を調べて見ました。所が、どの壺も、金貨が一杯這入つてゐるばかりで、橄欖油はみんな合はせても一本の壺に足りない位で御座いました。それから金貨の中を捜して見て、その中に例の寶石を發見しました。

そこで彼女はそれを取り上げて、よくよく調べて見ましたが、どうしても自分が股引の紐に結び着けて置いたのを、カマル・エズ・ゼマーンが持つて行つた石に相違御座いませぬ。で、彼女はそれを知るか否や餘りの嬉しさに聲を擧げて叫びましたが、その儘悶絶してしまひました。そして、正氣に返つた時、彼女は心の中に言ひました。「この石が私の戀しいカマル・エズ・ゼマーンと別れる原因となつたのでした。けれども、これは好い運の前兆に違ひない！」彼女はそれからハヤ・テン・ヌフーズ姫に、これが發見されたのは、二人の再會する前表に違ひないと言ふことを語りました。そして、朝になつた時、彼女は玉座に坐つて、船長を喚び寄せました。船長はすぐにやつて来て、彼女の前の地面に接吻いたしました。その時彼女は彼に向つて「お前方は橄欖油の持主を何處に置いて来たのだ？」と言ひました。彼は答へました。「お、一代の國王よ、私どもは彼をマーチ教徒の國に残して參りました。彼は園丁で御座います。」そして、彼女は言ひました。「お前がその男を連れて來なかつたのは、お前の不運だよ。私はお前の積んで來た船を没收してしまふから、さう思ふが可い。」——彼女は即座に命令を發して、商賈どもの倉庫に封印をさせました。そして、彼等に言ひました。「あの橄欖油の持主は私に對して罪を犯したもので、私の債務者である。若しあの男を連れて來なければ、私はお前方をみんな斬り殺して、お前方の荷物を没收してしまふから、さう思ふが可い。」そこで彼等は船長に頼んで、「お前さんが歸つて來た時に船の備貨を拂ふから、どうか私どもをこの暴

君の手から救ひ出してくれ。」と頼みました。

そこで船長は船に乗つて、帆を張らせました。神は安全にその航海を護つて下さいましたので、彼は無事にマーチ教徒の島へ着きました。そして、夜こつそり上陸して、例の菜園に參りました。カマル・エズ・ゼマーンは、夜も長くて眠られないで、菜園の中に腰を下して、わが身の上に振りかつた、數々の不幸を啣しながら、たゞ愛人のことを考へて居りました。船長はこつくと門の扉を敲きました。で、彼は門を開けて、船長の側へ出て行きました。すると、突然水夫どもが、彼を引つ擔いで行つて、船に乗せながら、帆を張つて、出帆してしまひました。彼等は日夜航海を續けました。が、カマル・エズ・ゼマーンには、何うして自分がこんな目に遭ふのかさつぱり合點が行きません。した。彼はその所因を彼等に訊ねました。すると、彼等は答へました。「お前さんはアルマース王の子息なる烏木島の王様に對して罪を犯したと言ふことだよ。お前さんは王様の財産を盗んださうだね。お、この不幸なる者よ。」併し彼は答へました。「大神にかけて、私はこれまでその國へ足を踏み入れたこともなく、その國の名さへ知らない位だよ。」

かうして航海をつゞけてある間に、やがて烏木の島影が眼の前に現れました。そして、彼等は彼女女王ブツアの前へ連れて行きました。女王ブツアは一目見るや否や、彼が誰であるかと知りました。そして、この者を宦官の手に渡して、浴場へ案内させよと吩咐けました。それから彼女は商賈と

もの不安を除いてやつた上、船長には黄金の一萬片もするやうな譽れの衣裳を與へました。その後で、彼女はハヤー・テン・ヌフーズ姫の許へ行つて、ありし次第を物語りながら、かう申しました。「何卒この事は、私が自分の希望を達して、記録に残して、後の世の王様達や人民にも讀み傳へられるやうな所業を成し遂げるまで、祕密にして置いて下さいよ。」——で、彼女がカマル・エズ・ゼマーンを浴場に案内せよと吩咐けた時、宦官どもはその通りに致しました。そして、彼に王様の衣裳を着させました。彼がその服装で浴場から出て来た時には、恰度東洋の柳の小枝か、又はその前に出ては、太陽も月も光を蹴落されるやうな、美しい遊星のやうに見えました。そして、彼の心も漸く落ちて着いて参りました。それから彼は宮殿に這入つて、彼女の前へ出ました。が、彼女は彼に會つても、われとわが感情を制しながら、只管自分の目的の完成に眼めて居りました。彼女は、彼に侍者や下僕を侍らせたり、駱駝や驢馬を與へたり、又は金銀財寶の寶庫を與へたりいたしました。そして、だんだんと絶えず役を進めて、しまひには彼を大藏大臣にして、ありとある財寶を全部彼の管理に委ねました。かうして多大の恩寵を加へながら、貴族達にも彼の位置を知らせました。貴族達はみんな彼を愛しました。日毎に女王ブツアは彼の役目を増してやりました。が、カマル・エズ・ゼマーンは何うしてこんな寵幸にあづかるのか一向にその所因が解りませんでした。彼は自分の財寶があり餘るので、他人に豊富に贈物をいたしました。そして、一生懸命にアルマーヌース王に仕へましたので、王

も亦なく彼を愛されました。貴族や、他の大官や、人民も同じやうに彼を愛して、しまひには彼の生命にかけて誓ひを立てる程で御座いました。

所が、カマル・エズ・ゼマーンは、女王ブツアが自分に與へる恩寵を絶えず不審に思つて居りました。そして、心の中で行ひました。「大神にかけて、こんなに可愛がられるのは屹度何か所因があるに相違ない。若しかすると、あの王様は何か底意があつて、こんなに自分を寵愛して下さるのかも知れないよ。これは一つ早い間にこの國を立ち去る許可を得なければならぬ。」そこで、彼は女王ブツアの前へ出て、彼女に申しました。「お、國王よ、貴方は私に一方ならぬ恩恵を與へて下さいました。序にこの國を立ち退くことをお許し下さつて、今日まで私に賜つたものを残らずお召し上げ下さるやうならば、その上の恩寵は御座りませぬ。」女王ブツアはそれを聞いて、につこと笑つて申しました。「何うしてお前は旅行になぞ出たくなつたのだえ？ この上もない引き立てを受けて、格別の恩澤に浴しながら、何うして無鐵砲に危ない所へ飛び込むやうな氣におなりだえ？」——「お、國王よ。」と、カマル・エズ・ゼマーンは答へました。「かう言ふお引き立てを故なく受けてゐるとすれば、これは以ての外に不思議なことで御座います。殊に私はまだこんな青二才で御座りますのに、年功者に相應しいやうな高位高官をお授けになりますのは、何とも不思議でなりません。」そこで女王ブツアは彼を別間へ連れて行つて、自分が誰であるかを彼に打ち明けました。彼は、彼女が鳥々や海の

主なるエル・ガーユーア王の娘で、女王ブツア、即ち自分の妻であることを知りました。そこで二人は互に抱擁しながら接吻いたしました。彼女は自分の身に起つたことを始めから終ひまで彼に物語つて聞かせました。又彼も同様に自分の身に起つたことを残らず彼女に語つて聞かせました。自明くる朝になつて、日光が射し出した時、女王ブツアはアルマーヌース王の許へ使を遣つて、自分はカマル・エズ・ゼマーンの妻であるといふ眞實を打ち明けながら、自分達二人が離れぬになつた所因から、その後の物語を知らせました。アルマーヌース王はその話を聞いて、一方ならず驚きました。彼はその物語を金の文字で記録して置くやうに命じました。そして、カマル・エズ・ゼマーンに向つて、「お、國王の子息よ、御身は俺の娘ハヤー・テン・ヌフーズ姫と結婚して、俺と縁者になつてくれる氣はないか。」と言ひました。彼は答へました。「それは女王ブツアに相談して見なければ、何とも御返辭を申し上げられませぬ。と言ふのは、私は數へ盡くされぬ程彼女のお蔭を蒙つてゐる身で御座いますから。」と。が、彼が彼女に相談しました時、彼女は答へました。「それは結構なお話で御座いますよ。是非あの方と結婚なさいませ。さうすれば、私はあの方の侍女になりますよ。何故と申せば、あの方にはいろく親切にして頂いて、大變御恩になつて居りますもの。殊に私達二人はあの方のお住居に御厄介になつてゐる身で御座いますもの、又二人はあの方の阿父様にも御恩を受けて居りますものね。」——そこでカマル・エズ・ゼマーンは、女王ブツアがこの話に乗り氣で、ハヤ

ー・テン・ヌフーズ姫に對しても、聊かも嫉妬がましい心を抱いてゐないのを見て、こゝに二人の相談を纏めました。そして、アルマーヌース王に、女王ブツアがこの結婚に賛成で、自分はハヤー・テン・ヌフーズ姫の侍女になると言つて居る旨を報告しました。カマル・エズ・ゼマーンからかう言ふ言葉を聞いた時、アルマーヌース王は非常に喜びました。で、彼はすぐに出懸けて行つて、自ら玉座に即きながら、貴族や、大臣や、侍従や、その他國內の諸侯を召し寄せて、カマル・エズ・ゼマーンとその妻なる女王ブツアとの物語を初めから終ひまで物語つて聞かせました。そして、自分は娘ハヤー・テン・ヌフーズ姫をカマル・エズ・ゼマーンに配合はせて、彼をその妻なる女王ブツアの代りに、一同の上立つ帝王に任命する心組だと告げました。それを聞いて、並み居る一同は申しました。「カマル・エズ・ゼマーンは、私どもが一たび君主と仰いで、國王アルマーヌースの婚君とばかり思つてゐた女王ブツアの良人であつて見れば、私どもの帝王として彼を戴くことに少しも不満は御座りませぬ。私どもはみんな彼に仕へて、斷じて忠節をおこたるやうなことは致しますまい。」

これを聞いて、アルマーヌース王は並々ならず満足に思ひました。そして、司法官や證人や、國內の重立つた役人どもを喚び寄せて、カマル・エズ・ゼマーンと自分の娘なる女后ハヤー・テン・ヌフーズ姫との婚約を執り行はせました。彼は又祝典を擧げて、盛大な饗宴を開きました。そして、貴族

や、長官や、軍人どもに、悉く高價な榮譽の衣裳を下賜すると共に、貧困の者には施物を與へ、囚人全部を釋放してやりました。人民はカマル・エズ・ゼマーンの即位を祝ぎながら、彼の御代の彌増しに榮え永しへに續かむことを祈りました。カマル・エズ・ゼマーンは帝王の位に登るや否や、先づ關税を免除しました。彼は賞讃に値ひする態度を以て人民の上に臨みました、そして、その二人の妻に對しては、どちらへも依估最厚なく同じやうに振舞ひながら、愉快に、幸福に、互に眞實を盡くし合つて元氣よく暮らしました。かうして彼は長の月日を過しました。彼の心勞も悲嘆も消えてしまひました。そして、父なるシャー・ゼマーン王のことも、亦、彼の側で享樂して居た榮譽も權勢も忘れ果て、しまひました。

### ネアメーとノアムの物語

昔エル・クーフエーといふ都に、その町の住民の長の一人で、ハーチムの子息なるエル・ラビアーと稱はれた男が住んでゐました。彼は非常な金持で、家も繁昌して、その上、ネアメー・タラーと稱はれる一人の子息を授かつてゐました。或日彼が奴隸仲買人の市場へ行つてゐた時、一人の女奴隸が賣りに出されたのを目撃しました。その女奴隸は手に何とも言はれぬ程美しく可愛らしい一人の女の兒を抱いてをりました。そこでエル・ラビアーは奴隸仲買人に合圖をして、彼に言ひました。「この

女奴隸とその娘とは幾許で賣らうと言ふんだね？」彼は答へました。「はい、これは黄金の五十片で御座います。」それを聞いて、エル・ラビアーは言ひました。「では、契約書を作つて、金子を受取つて、それをこの女の持主に渡してくれ。」それから彼は女奴隸の身代金を奴隸仲買人に拂つて、手數料をも彼に渡しました。そして、その女奴隸と娘とを受取りながら、二人を連れて自宅へ歸りました。すると、彼の妻になつてゐた叔父の娘がその女奴隸を見た時、彼に向つて言ひました。「お、わが伯父の子よ、この女奴隸は何うしたので御座います？」彼はそれに答へました。「俺はこの女の手に抱かれてゐる女の兒を自分のものにするために、この女を買つて來たのだ。まあ、好く見て御覽、この女の兒が大きくなつた時には、亞刺比亞人はかりでない、外國人の諸國を搜しても、これに匹敵するやうな又これに優るやうな美しい女は一人もあるまいよ。」そこで叔父の娘はその女奴隸に言ひました。「お前の名は何と言ふんだい、お、女奴隸よ。」彼女は答へました。「お、わが奥様よ、わたくしの名はトゥフイークと申します。」——「で、お前の娘の名はえ？」と、彼女は再び訊ねました。「はい、サードと申します。」と、彼女は答へました。すると、彼女は又言ひました。「お前はよく本當のことをお言ひだ。お前も幸福なら、お前を買つて來た自宅の人も幸福だよ。」——彼女はそれから言ひました。「お、わが伯父の子よ、貴方は何といふ名をこの兒に附けようと思つていらつしやいます？」——「お前の好きなやうに附けるがい、さ。」と、彼は答へました。彼女は又言ひました。「で

は、この兒にノアムといふ名を附けませうよ。』すると、エル・ラビーアは言ひました。『うむ、それも悪くないだらうよ。』

小さいノアムはエル・ラビーアの子息なるネアメーと一緒に同じ搖籃の中で育てられました。そして、かう言ふ風にして、二人が十歳の年紀になるまで育て上げられました。二人はいづれも相手よりは一層優れて美しく御座いました。男の兒は女の兒のことを、『お、わが妹よ。』と言ひくししました。又女の兒は男の兒のことを、『お、わが兄上よ。』と言ひくししました。それからエル、ラビーアは、彼等がこの年紀に達した時、子息のネアメーを喚んで言ひ渡しました。『お、わが兒よ、ノアムはお前の妹ではない。お前の奴隷だよ。お前がまだ搖籃に居る時、お前のために買つて来て置いてやつたのだ。だから、今日から妹と喚んでは不可ないよ。』——『さういふ譯なら、』と、ネアメーは彼の父に答へました。『わたしはあの女と結婚させよう。』彼はそこで母親の許へ行つて、この事を彼女に告げました。すると、彼女は言ひました。『お、わが兒よ、あれはお前の奴隷だよ。』かう言ふ譯でエル・ラビーアの子息なるネアメーは彼女を自分の妻にしました。そして、彼女を愛しました。かうして彼等が生活してゐる間に、四年の歳月が経ちました。そして、クーフエーの町中を捜しても、ノアムより美しい女も、可愛らしい女も、優美な女も、一人として御座いませんでした。彼女は大きくなつて、聖典や科學の書物を讀みました。そして、さまざまの樂器を鳴らすいろくいな流儀を習得

しました。彼女は聲樂に於ても、器樂に於ても完全の域に達して、同年配のあらゆる人々に立ち優つてをりました。で、或日エル・ラビーアの子息なる良人のネアメーと一緒に、酒宴の座に坐つてゐた時、彼女は琵琶を取つて、絃を締めながら、次の二行の詩を唄ひました。——

君わが夫にましまして、吾を養ひたまふ時、君わが劔となりて、わが不幸を滅ぼしたまふ時、われは如何なる難に會ふとも、君を措いて、ゼイドにもアムルにも、その外何人にも助けを求むる用あらじ。

で、ネアメーはそれを聞いて非常に喜びました。彼は再び唄ふやうに彼女に頼みました。で、彼女がさうした時、若者は聲を上げて叫びました。『本當にお前は天女のやうに好い聲を有つてるね、お、わがノアムよ。』

が、二人がかうして楽しい月日を送つてゐる間に、副王の館にあつて、エル・ハツジャージはこんなことを言つてをりました。『俺はどうかしてあのノアムと言ふ少女を取り上げて、マルワーンの子息なる教王アブ・デル・メリクの御前へ差上げなければならぬ。教王の宮殿にもあの女と並ぶやうな女は一人も居ないし、あの女のやうな美聲をして唄ふ女も一人も居ないからね。』彼はそこでさう言

ふことに慣れた一人の老婆を喚び出して、彼女に申し附けました。「エル・ラビーアの家へ行つて、ノアムと言ふ女に面會を求めろがい。それから何うかしてその女を連れ出して來い。あの女のやうに美しい女は地球の面に又と一人ないからね。」

老婆はエル・ハツジャージの言葉を承知しました。で、次の朝起き上つた時、彼女は羊毛の衣服を着て、數千の珠を繋いだ珠數を首にかけました。そして、手に杖とエル・イエーメン製の皮の水囊とを持ちながら、その家の方へ進んで行きました。そして、歩きながらも、「神の完全性は賞められてあれ、神は讚へられてあれ、神の外にこの世に神性はない、神は偉大である、高く偉大なる神の外に、この世に力も権力もない！」と叫びつづけました。彼女は口に神を讚へる絶叫を、彼女の哀願を断ちませんでした。が、心の中は詭計と詐欺とに充ちておりました。たうとう正午の祈禱の頃に、エル・ラビーアの子息なるネアメーの家に到着しました。彼女はその戸を敲きました。それを聞いて、門番が彼女のために戸を開けながら、「何の用で來たのか。」と訊ねました。彼女は答へました。「わたしは一生を神の奉仕に捧げた、憐れな女で御座います。所で、午の祈禱の時間が參りました。だから、この祝福された場所で祈禱を上げさせて頂かうと存じます。」門番は答へました。「お、婆さんよ、これはエル・ラビーアの子息なるネアメーの家で、教會堂でもなければ禮拜所でもないよ。」——「それは知つてゐます。」と、老婆は即座に答へました。「けれども、エル・ラビーアの子息なるネア

メーの家のやうに崇嚴な教會堂もなければ禮拜所もない。わたしは教王の宮殿から來た老女で、巡禮をして歩くのだから何卒通して下さい。」が、門番は更に彼女に向つて、「いや、何んなことがあつてもお前さんを通すことは出来ない。」と言ひ張りました。多くの言葉が二人の間に交はされました。たうとう老婆は門番に縋り着いて、「わたしのやうな女がエル・ラビーアの子息なるネアメーの家に這入ることを留められるんですか、わたしは何んな貴族、公族の家でもずん／＼這入つて行かれる身だのに！」すると、ネアメーが出來て、この言葉を聞いて笑ひ出しました。そして、自分の後に隨つて這入つて來るやうに命じました。

そこでネアメーは家に這入りました。老婆もその後から隨つて行きました。たうとう彼は老婆と一緒にノアムの許へ行きました。そこで、老婆は丁寧に彼女に挨拶しました。で、彼女はノアムを見た時、彼女の並優れた美しさに眼を睜りました。そして、彼女に言ひました。「お、わが奥様よ、わたしは貴方と貴方の御良人と二人ともいづれ劣らぬ美しさに造り上げた神様が、この後とも貴方方を保護して下さるやうに願ひいたしますよ。」それから老婆は壁龕の前に座を占めて、頭を下げたり、俯伏したり、哀願したりしながら、その日も漸く暮れて、夜の暗闇が四邊を籠める頃まで、ずつと祈禱を捧げてゐました。その時ノアムは老婆に言ひました。「お、わが母よ、しばらく足を投げ出して休息なさいませんか。」が、老婆はそれに答へました。「お、わが奥様よ、來世を願ふ者で現

世の勞を厭ひませぬ、それを厭ふやうな者は迎も來世で善き人の住家へ這入ることは出來ませぬ。」それからノアムは老婆に食物を持つて來てやりました。そして、彼女に言ひました。「この食物を召上つて、わたしのために幸福と恩恵とを祈つて下さいませ。」が老婆はそれに答へました。「いや、わたくしは斷食をしてゐるので御座います。しかし貴方は若いから、飲んだり食つたりして、たんとお娛しみなさい。神様は貴方に幸ひして下さいませよ。神様のお言葉にも——あ、神の御名は讃へられてあれ！——懺悔をして、神を信仰して、正しい道を働くものでなければ云々と御座いますよ。」ノアムは暫くの間老婆と話しをして、一緒に坐つてをりました。その後で彼女は主人に言ひました。「お、わが君よ、お婆さんに頼んで、しばらくこの家に逗留して貰つて下さいませ。あのお婆さんの顔には信心深い様子がありくと出てゐますものね。」そこで彼は答へました。「では、お婆さんに神様に仕へる部屋を一つ當てがつてやるが可い。そして、その部屋へは誰も這入つて行かないが可いよ。恐らく神様は——あ、神の完全性は賞められてあれ、神の御名は讃へられてあれよ——あのお婆さんに添うてゐる祝福から私どもにも恩恵を下して、二人が別れくにならないやうに護つて下さるだらうからね。」で、老婆は一晚中聖典を誦しながら、その夜を明かしました。そして、朝になつた時、彼女はネアメーとノアムの傍へやつて來て、「お早う御座います。」と二人に言ひながら、「わたしは貴方がたお二人を神の保護に托して、もうお暇いたします。」と言ひ出しました。が、ノアムは彼女

に向つて言ひました。「お、わが母よ、貴方は何處へいらつしやるんです？ 主人は、貴方がお一人で心置きなく神様にお仕へすることが出来るやうに、別の部屋を當てがつて差上げよと、わたしに申し附けましたよ。」——老婆は答へました。「神様は御主人を保護して、何時までもお二人に恩寵を つけて下さいませう。が、わたしはたゞこの次に貴方がたのお側へ這入つて來る時、門番が餘計な留め立てをしないやうに、それだけを吩咐けて置いて頂きたう御座います。で、若しそれが神の御心に依つて適ひましたら——あ、神の御名は讃へられてあれよ——わたしはこれから神聖な場所々々を廻つて、晝も夜もわたしの祈禱や勤行のお終ひには、屹度貴方がたお二人の幸福を祈りますよ。」かう言つて老婆はその家を出て行きました。ノアムは、何を目的にこの老婆が訪ねて來たかを知らないの で、老婆と別れるのを悲しがつて泣きました。

老婆はそれからエル・ハツジャーシの許へ行きました。すると、彼は彼女に言ひました。「何うして來たえ？」彼女は彼に答へました。「わたしは例の女を見て參りました。成程、あの年頃の女であれに優る女は嘗て女の腹から生まれたことがないかと思はれる程美しい女で御座いました。」するとエル・ハツジャーシは彼女に言ひました。「お前が俺の吩咐けたことを首尾よく仕遂げたら、俺からして有餘る財寶をお前に下してやるよ。」彼女は「どうか一箇月の御猶豫を願ひます。」と答へました。すると彼は彼女に向つて、「成程一箇月の猶豫を與へてやらう。」と言ひました。——老婆はそれから



ネアメーとノアムの家を折々訪れました。二人はいよく彼女を尊敬して取扱ひました。彼女は朝も晩も二人と一緒に時を過しました。家中の者もみんな彼女を歓迎しました。或日老婆はノアム一人と相對してゐた時、たうとう彼女に向つて切り出しました。「お、奥様よ、大神にかけて、わたしは神聖な場所々々を遍巡つて歩く間に、いつも貴方のために祈つてゐますがね、一度貴方もわたしと一緒に被入して、聖者どもの様子を御覽になつてはどうかと思ひますよ。彼等は何でも貴方がお望みになる祝福を貴方のために祈つてくれますからね。」すると、ノアムはそれに答へました。「大神にかけて、お、わが母よ、どうかわたしを連れて行つて下さいませ。」そこで老婆は彼女に言ひました。「貴方のお養母様のお許しをお願ひなさい。さうすれば、わたしが一緒に連れて行つて上げますよ。」それを聞いてノアムはネアメーの母なる自分の姑に言ひました。「お、わが奥様よ、貴方もわたくしも一日お暇を頂いて、あのお婆さんと一緒に神聖な場所々々へお詣りして、憐れな信心者と一緒に祈禱したり哀願したりすることの出来るやうに、自宅の人に頼んで下さいませ。」で、ネアメーが這入つて来て、下に坐つた時、老婆は彼の側へ行つて、その手に接吻しました。が、彼はさうして自分の妻を連出すことを彼女に禁じました。すると、彼女は彼のために祈つて、その家から出て行きました。で、明るる日彼女は又やつて來ました。その時ネアメーは家に居りませんでした。で、彼女はノアムに言葉を懸けながら、彼女に言ひました。「わたたくしどもは昨日貴方がたのために祈禱しました。が、

これから立ち上つて、私と一緒にいらつしやい。そして、御主人のお歸りになる前に戻つていらつしやい。」そこで、ノアムは養母に向つて言ひました。「大神にかけてお願ひしますから、何卒この正直なお婆さんと一緒に神聖な場所々々へ行つて、神の聖者どもを見る許可を與へて下さいませ。わたしは直き御主人のお歸りになる前に戻つて参りますよ。」ネアメーの母は答へました。「だが、お前さんの主人に知れたら大變ではないかえ。わたしはそれが心配だよ。」しかし、老婆が傍から言ひました。「わたしがこの方に悠々と地面の上に坐らせてなぞ置きませんよ。立つたま、其邊を見物して、決して愚圖々々暇取つてなぞ居ないやうにしますよ。」

彼女はそれからこの計略に依つてノアムを連れ出しました。そして、彼女と一緒にエル・ハツジャ一ジの宮殿に行きました。そして、彼女を私室に入れて置いて後で、その趣きを彼に知らせました。そこでエル・ハツジャ一ジはやつて来て、彼女を眺めました。そして、彼女の年頃の女の中でも一際優れて、生れてから未だそれに匹敵するものを見たことのないやうな美しい女だと言ふことを知りました。が、ノアムは彼を見た時、両手で顔を隠しました。彼はそこを去る前に一人の侍従を喚びました。そして、その侍従と一緒に五十人の騎者を馬に乗せました。そして、この女を優れて足の速い一峰駱駝に乗せて、ダマスクスの都へ連れて行つて、自分の書いた手紙と一緒に、彼女をマルワーンの子息なる教王アブ・デル・メリクの手へ渡すやうに、彼に命じました。そして、彼はその侍従に言

ひました。『この手紙を教王に差上げて、その返事を頂いたら、大急ぎで此處へ歸つて来い。』侍従はそこで出て行つて、その女を一峰駱駝に乗せました。そして、彼女を連れて旅行しました。その間彼女は、主人と別れくになつたのを悲しんで、一行がダマスクスへ着くまで、始終泣き通しに泣いておりました。そこで彼は教王の御前に出る許しを願ひました。教王はそれをお許しになりました。で、彼は教王のお目に懸つて、その女の一件を彼に告げました。そこで教王は特に彼女のために一室を當てがひました。

教王はそれから後宮に這入つて行きました。そして、彼の妻に會つて、彼女に言ひました。『エル・ハツジャージが俺のために、エル・クーフエーの町の王どもの娘の中から一人の女奴隷を黄金の數千片で買つて、この手紙を添へて、俺に贈つてくれたよ。』彼の妻は答へました。『神様は貴方に對していよく賜物を増して下さいませう！』で、その後教王の妹は彼女の部屋へ這入つて行きました。そして、一目彼女を見た時、『大神にかけて、お前の買はれて来たこの家の主人は、たとひお前の値が黄金の十萬片であつても、決して失望せられることはあるまいよ。』と叫びました。すると、ノアムは彼女に向つて訊ねました。『この宮殿は何といふ王様のお住家で、これは何といふ都で御座いますか？』彼女は彼女に答へました。『これはダマスクスの都で、この宮殿は私の兄で、マルワーンの子息なる教王アブ・デル・メリクのお住居だよ。』それから彼女は彼女の女に言ひました。『どうもお前はそれを

知らずに来たやうだね。』『大神にかけて、お、わが姫君よ。』と、ノアムは答へました。『わたしはそんなこと一切知らないので御座います。』すると、教王の妹は言ひました。『では、お前を買つて、お前の代價を受取つた主人は、教王がお前を買つたんだと言ふことをお前に話さなかつたと見えるね。』で、ノアムはそれ等の言葉を聞いた時、涙を流して、嘆き悲しみました。そして、心中に言ひました。『たとひ眞實のことを言つた所で、誰もわたしの言ふことを信じてはくれまい。それよりも、わたしは黙つて辛抱してませう。神様の救ひの手は、屹度間近まで来てゐるに違ひないから。』で、彼女は羞かしさうに頭を垂れました。そして、彼女の頬は長途の旅行と日光とのために根くなつておりました。教王の妹は、その日は、その儘歸りました。明る日は反物や珠玉の頸飾を持つて、彼女の許へやつて来ました。そして、彼女にそれを着せました。

その後で教王は彼女の部屋へ這入つて来て、彼女の側に座を占めました。すると、彼の妹は彼に言ひました。『この娘を御覽なさい。神様は美しさと愛らしさとのあらゆる魅力をこの女一人にお萃めになつたやうで御座いますよ。』そこで教王はノアムに言はれました。『顔から面紗を取つて御覽よ。』が、彼女はそれを取りませんでした。従つて彼は彼女の顔を見ることが出来ませんでした。けれども、彼は彼女の可愛らしい肘の邊りを見ました。そして、彼女に對する愛が彼の胸に沁み渡りました。で、彼は妹に向つて言ひました。『俺は三日の間もうこの女の側へは来ないつもりだよ。その

間にお前からよく話して、この女の氣が引き立つやうにして置いておくれな。」彼はそれから立ち上つて、彼女の側を出て行きました。そして、ノアムは後に残つて、自分の身の上を思ひ廻らしながら、主人のネアメーと別れくになつたことを嘆いて居りました。その夜が来た時、彼女は病氣になりました。そして、飲みも食ひもしませんでしたので、彼女の顔も愛嬌も變り果て、しまひました。そこで一同はこのことを教王に知らせました。彼はそれを聞いて煩悶しました。そして、彼女を醫者だの天眼通の學者だのに代るく見せました。が、誰も彼女の療法を發見することが出来ませんでした。

一方彼女の主人のネアメーが家に歸つて來ました。そして、寢床の上に坐りながら、「お、ノアムよ。」と喚はりました。が、彼女は返辭をしませんでした。そこで彼はすぐに立ち上つて、再び聲を擧げて喚はりました。が、誰もその居間へ這入つて來ませんでした。と言ふのは、家中の女奴隸が彼の怒りを怖れて身を隠してゐたからで御座います。彼はそこで母親の許へ行きました。そして、彼女が兩手に頬を抑へながら坐つてゐるのを見ました。で、彼は彼女に言ひました。「お、わが母上よ、ノアムは何處へ行きましたか?」——「お、わが兒よ。」と、彼女は答へました。「あれは、あれの身に關しては、わたしよりも信用することの出来るもの、即ちあの正直なお婆さんと一緒に出て行きましたよ。憐れな信心者の群を見たいと言ふのでね。そして、直きに歸つて來る約束してゐました。」

よ。」——「で、何時頃からあれはこんなことをするやうになつたのです?」そして、何時頃出て行つたのです?」と、彼は訊ねました。彼女は答へました。「あれは朝早く出て行きました。」——「で、貴方がさうしても可いと言ふ許可をお與へになつたのですか?」と、彼は訊ねました。「お、わが兒よ。」と彼女は答へました。「何うしても私が許さなければならぬやうに、あれの方で頻りに言ふもんだからね。」それを聞いて、ネアメーは聲を擧げて叫びました。「あ、高く偉大なる神の外に、この世に力も権力もない!」彼はそれから狂氣のやうになつて自分の家を出て行きました。そして、警察の長の家を訪れながら、彼に言ひました。「貴方は計略を使つて、わたしの家から私の女奴隸を誘き出したんですね? 私はこれから旅に出て、貴方のことを教王に訴へずには置けませんよ。」——それを聞いて、警察の長は言ひました。「一體誰がその女を連れ出したんです?」彼は答へました。「かう言ふ顔立をして、羊毛の衣服を着て、珠の數千個も繋がつてゐるやうな珠數を手を持つてゐる、一人の老婆ですよ。」すると、警察の長はそれに答へました。「そのお婆さんを此處へ連れていらつしやい。私とその女奴隸を貴方に取返して上げますよ。」——「誰があのお婆の居所を知つてゐるものですか?」と、ネアメーは言ひました。すると、警察の長は又言ひました。「神様の外には、誰だつて五官から隠されてゐるものは分りませんよ。あ、神の完全性は褒められてあれ、神の御名は稱へられてあれよ。」が、彼はその老婆がエル・ハツジャージの手に使はれた、機略に富んだ女であるといふこ

とを知つて居りました。その時ネアメーは彼に向つて言ひました。「私はどうしても貴方から私の女奴隷を取り返さずには置きませんよ。エル・ハツジャージが私と貴方との争論を裁決して下さるでせうからね。」すると彼は答へました。「では、貴方のお好きな處へ参りませうよ。」

そこでネアメーはエル・ハツジャージの宮殿に行きました。彼の父はエル・クーフエーの都の主なる住民の一人で御座いました。だから、彼がエル・ハツジャージの住家に到着した時、侍従は這入つて行つて、そのことを彼に告げました。すると、エル・ハツジャージは言ひました。「その男を俺の前へ連れて来い。」で、彼の前に立つた時、エル・ハツジャージは彼に言ひました。「お前さんの用事は何だね？」ネアメーは彼に答へました。「かうく言ふことが私の身に起りました。」すると、エル・ハツジャージは言ひました。「警察の長を俺の前へ連れていらつしやい。俺は彼奴に命じてその老婆を捜索させて上げますよ。」そこで、警察の長が這入つて来た時、彼は彼に言ひました。「俺が頼むから、一つエル・ラビアーの子息なるネアメーの女奴隷の捜索をして呉れ。」警察の長は答へました。「神様の外には誰にも五官から隠されたものは分りませんよ。あゝ、神の御名は稱らへれてあれ！」が、エル・ハツジャージは彼に言ひました。「いや、お前は何うしても騎兵を引率して、途上でその女を捜したり、方々の町々を探索して見なければ不可ないよ。」それからネアメーの方へ向き直つて、彼に言ひました。「もしお前の女奴隷が戻らなかつたら、俺は俺自身の住家から十人と、又その警察の長

の住家から十人と、合せて二十人の女奴隷をお前に上げるよ。」で、彼は警察の長に向つて、「早くその女を探索に行け。」と命じました。そこで彼は出て行きました。

ネアメーは悲痛のあまり人生に失望してしまひました。彼は十四歳になつてゐました。彼の横顔には毛が御座いませんでした。彼は泣いたり嘆いたりしました。そして、自分一人家の者とも離れながら朝まで泣き續けに泣いてゐました。すると、彼の父親がやつて来て、彼に言ひました。「おゝ、わが兒よ、これは何うしてもエラ・ハツジャージが計略を使つて、あの女を取り上げたものに違ひない。が、神様は二六時中何時でもわれくを救つて下さるよ。」さう言はれても、ネアメーの心痛は増すばかりで御座いました。彼は何と言つても可い知りませんでした。又誰が自分を慰めに這入つて来てそれを耳に入れませんでした。三箇月間と言ふもの、彼は病氣の状態で臥せてゐました。それがために、彼の様子は、すっかり變つてしまひました。父親ももう彼の命は無いものと思ひました。多くの醫者が彼を見舞ひました。そして、「あの女より外に彼を癒すものはありませんよ。」と、言ひました。

が、ある日彼の父が坐つてゐた時、波斯から来た醫者の名人があると言ふことを聞き込みました。人々の噂では、彼は醫藥や、占星や、地下などの正確な知識を持つてゐると言ふことで御座いました。そこでエル・ラビアーは彼を喚びに遣りました。で、彼が這入つて来た時、彼は自分の傍に相手を坐

らせて、鄭重に取扱ひました。そして、『何卒子息の容態を診て下さい。』と言ひました。で、彼はネアミーに向つて、『手をお見せなさい。』と言ひました。彼はそこで手を出して見せました。すると、醫者は彼の關節に觸つて見ました。それからちつと顔を見ました。そして、笑ひ出しました。それから眼を父親の方へ轉じながら、彼は言ひました。『貴方の御子息は心より外に何處にも病氣を持つておいでぢやありませんよ。』すると、エル・ラビーンは答へました。『貴方の仰有ることはよく中つて居ります。お、賢者よ。で、一つ貴方の學問でもつて私の子息の場合を考へて見て下さいませんか。そして、彼のあらゆる状態を私に知らせて下さい。何んなことでも私に秘して下さらない方が好いんですよ。』そこでその波斯人は言ひました。『貴方の御子息は一人の女の愛に囚はれておいでです。その女は今エル・パラの都か、でなければダマスクスの都に居ります。その女と會はせる外に、貴方の子息を治療する途はありませんよ。』すると、エル・ラビーンは言ひました。『貴方がもしこの二人を會はせて下さいますなら、私は貴方を幸福にして、一生を富と愉快の間に送ることの出来るやうなものを差上げますよ。』『實際この事件は、』と波斯人は答へました。『直に譯なく處理することが出来ますよ。』それからネアミーの方へ向いて、彼は言ひました。『貴方には決して悪いことは起らない。だから安心して愉快にしてらつしやいよ。』そして彼はエル・ラビーンに言ひました。『貴方の財産から黄金の四千片を取り出して下さい。』そこで彼はそれを取り出して、その波斯人に渡しました。

波斯人はそれを受け取つてから彼に言ひました。『貴方の御子息に、一つ私と一緒にダマスクスへ旅行して貰ひたいのですがね。で、もしそれが神様の思召であるならば、——あ、神の御名は稱へられてあれよ——私は屹度あの少女を連れて歸つて來ますよ。』それから彼は若者の方へ振り向いて、彼に言ひました。『貴方の名は何と言ひますか。』『ネアミーと申します。』と、彼は答へました。で、彼は言ひました。『お、ネアミーよ、坐れ。そして、萬事を神様の御心に任せよ。——あ、神の御名は稱へられてあれよ。——神様は貴方とその女とを再び廻り合はせて下さいますよ。』それを聞いて、彼は起き上りました。すると、その波斯人は彼に言ひました。『心をしつかりお持ちなさい。二人は今日から長途の旅行に上るんですからね。まづ食つたり、飲んだりして、十分にお楽しみなさい。さうすれば、自然と旅行に出られるだけの力が湧いて來ますよ。』

波斯人はそれから自分の必要なものを調べにかゝりました。そして、ネアミーの父から合せて黄金の一萬片に上る金額と共に、馬だの、駱駝だの、その外途中荷物を運んで行くに必要な畜類を幾疋も受け取りました。その後で、ネアミーは父母に別れを告げて、その賢者と共にアレツボに向つて出發しました。が、少女の消息は少しも分りませんでした。それから二人はダマスクスに到着しました。彼等はそこに三日間休息した後で、波斯人は一軒の店を借り受けて、高價な陶器や、蓋物でその棚を填めました。又金や、その外の高價な材料でその棚を飾りました。そして、あらゆる種類の膏藥や、

あらゆる種類の飲料を詰めた硝子の壺を自分の前に並べて、その壺の周りにはガラスの洋盃を置きま  
した。又、觀象儀を自分の前に備へ付けました。彼は自分でも學者や醫者の着る服装をして、ネアメー  
には襯衣と絹のメルワターを着せて、黄金で縫ひ取りをした絹の布帛を纏はせながら、自分の前に坐  
らせました。彼はそれから彼に言ひました。「お、ネアメーよ、お前さんは今日から私の息子になる  
んだ。だから、私のことを阿父さんと呼ばなくちや不可ないよ。私も又お前さんを息子とより外には  
呼ばないからね。」そこでネアメーは答へました。「はい、畏承りました。」今やダマスキスの住民は  
この波斯人の店の前に集まつて、ネアメーの美しさに見惚れたり、その店や、店の中にある品物の美  
しさに見惚れたりしてゐました。波斯人はネアメーと波斯語で話しをしました。ネアメーも又同じく  
波斯語で彼に返辭をしました。と言ふのは、その頃大家の息子に普通であつたやうに、彼はその言葉  
を知つてゐたからで御座います。で、この波斯人はダマスキスの住民の中でも有名になりました。彼  
等は彼の許へその病を訴へに來ました。そして、彼は彼等にその療法を授けてやりました。かうして  
彼は人々の必要に應じてゐる間に、ダマスキスの住民は彼の家に詰めかけて來ました。そして、彼の  
名聲は町の中にも、又大家の奥にも轟き渡りました。  
で、或る日彼が坐つてゐた時、一人の老婆が珠玉で飾つた金欄の鞍を置いた驢馬に跨がりながら、  
彼に近づいてまゐりました。彼女は波斯人の店前に駐まりました。そして、驢馬の手綱を引き締めな

がら、波斯人に合圖をして、「私の手を支へて下さい。」と言ひました。そこで彼は彼女の手を取つて  
やると、彼女は驢馬から降りました。そして、「エル・エラークから來たお醫者さんと言ふのはお前  
さんかい。」と言ひました。「はい、左様で御座います。」と、彼は答へました。そこで彼女は言ひま  
した。「わたしは一人の娘を持つてゐるんですがね、その兒が今病氣になつてゐるんですよ。」かう言  
つて彼女はその症候を彼に語りました。すると、彼は彼女に言ひました。「お、わが奥様よ、その方  
の名は何と申します？ それを承はれば、私はその方の星を計算して、何時に薬を飲むのが一番好  
いかと言ふことを教へて進めますよ。」「お、波斯人の兄弟よ。」と、彼女は答へました。——  
「その娘の名はノアムと言ひますよ。」で、波斯人はノアムの名を聞いた時、掌に數字を書きながら  
計算を始めました。そして、彼女に言ひました。「お、わが奥様よ、どうも氣候が違つてゐますの  
で、その方のお故郷を知らなければ、療法を書いて差上げる譯には參りませんよ。ですから、その方  
は何處の國に育つた方で、お年齢は幾歳だと言ふことを教へて下さいませ。」そこで老婆は答へまし  
た。「その娘は十四歳で、育てられた處はエル・エラークの國のエル・クーフエーと言ふ州で御座いま  
す。」「何箇月ばかりその方はこの國に被坐やいますか。」と波斯人は再び訊ねました。老婆は彼に  
答へました。「この國へ來てからまだ數箇月にしかありません。」で、ネアメーはこの老婆の言葉と奴  
隸の娘の名を聞いた時、胸が波打つやうに思ひました。そこで老婆は彼に言ひました。「何うか處方

を書いて下さい。そして、神様の御恵みはその處方に伴ふやうに——あゝ、神の御名は褒められてあれよ。』彼女はそれから黄金の十片を取り出して、店の腰掛の上に置きました。そこで例の賢者はネアメーの方へ振り向きながら、彼女のために處方通りの藥劑を調合するやうに命じました。すると、老婆は初めてネアメーの顔を眺めながら、彼に言ひました。「おゝ、わが兒よ、わたしはお前さんのために神様の保護を願つて上げますよ。實際あの娘の姿はお前さんにそっくりですからね。——それから彼女は波斯人に向つて言ひました。「おゝ、波斯人の兄弟よ、これは貴方の従者ですか、それとも子息さんですか。』彼は彼女に答へました。「それは私の子息で御座います。』ネアメーはそれから彼女ののために、小さな壺の中へいろ／＼の藥劑を詰めました。そして、紙片を取り上げながら、その上に次ぎの二行を認めました。——

ノアムにしてわれに一瞥を與へなばわれはソアダーの愛もジユムルの恵みも欲しからじ。  
人は言ふ、彼女を棄てよ、彼女に似たるもの二十人を與へむと、されど彼女に似たるものは世になし、われは彼女を棄てざるべし。

彼はその紙片を小さな壺の中へ入れました。そして、それに封をしてその上包みの上にクーフエー

の文字で、「われはエル・クーフエーのエル・ラビーアの子息ネアメーなり。」と書きました。それから彼はその壺を老婆の前に置きました。

彼女はそこでそれを取つて、二人に別れを告げながら、教王の宮殿に向つて去りました。で、彼女はいろ／＼なものを持つて、その女の枕頭へ来たとき、彼女は彼女の前に小さな藥の壺を据ゑながら、彼女に言ひました。「おゝ、わが奥様よ、この都へ波斯人の上手な醫者がまゐりました。いろ／＼な疾病に就いてその醫者よりも深く研究してゐるものは一人もないと言ふことで御座います。で、私はその醫者に貴方の御病氣の症候を話した後で、貴方のお名前を告げました。すると、その醫者は貴方の御病氣を見抜いて、その療法を處方してくれました。それからその子息に吩咐けて、貴方のためにこの藥を調合させてくれましたよ。ダマスクス中を探しても、あの醫者の子息よりも美しく可愛らしい若者は一人もなければ、あの子息ほど着物の着工合のよく似合ふ若者もありませんよ。又あの醫者の店ほど綺麗な店も外に御座いませんよ。』そこで彼女は小さな壺を取り上げて、その七包みの上に書かれた自分の主人の名前と彼の父親の名前とを見附けました。で、彼女はそれを見附けた時、さつと顔色が變りました。そして、心の中に言ひました。「その店の主人は何うしても私のために来てくれたものに相違ない。』それから彼女はその老婆に言ひました。「何うかその若者の話をして下さいませ。』すると、老婆は答へました。「その若者の名前はネアメーと申します。そして、右の

眉毛の上に小さな疵痕が御座います。それから、高價な衣服を身に纏うてゐましたが、その美しさは何とも言はれない位で御座いますよ。」乙女はそれから言ひました。「その薬を私に下さい。そして、何卒神様の御祝福とお助けとがそれに伴ふやうに——あ、神の御名は褒められてあれよ。」——そして、その薬を取上げて、笑ひながら、それを呑み下しました。そして、老婆に言ひました。「なる程、これは好い薬だよ。」その後で、彼女は小さな箱の中を探して一つの紙片を見付けました。そこで彼女はそれを披いて、それを讀みました。そして、その意味を了解した時、彼女は自分の主人に違ひないと思ひました。そこで彼女の魂は急に引き立ちました。そして彼女は大に喜びました。老婆の方でも彼女が笑ふのを見た時、一人心の中で言ひました。「なる程、これは祝福された日よ。」ノアムはそれから言ひました。「お、老女よ、私は何か食べる物と飲む物が欲しいよ。」すると老婆は女奴隷共に向つて言ひました。「卓子と何か美味しいものを奥様に持つておいでなさい。」そこで彼等は食物を持つて参りました。彼女は坐つてそれを食べました。で、見よ、マルワーンの子息なるアブ・デル・メリクが二人の許へ這入つて來ました。そして、少女が坐つて、物を食べてゐるのを見て非常に喜びました。すると、老女が言ひました。「お、教王よ、貴方の女奴隷の健康を屹度恢復しますからお喜び遊ばせ。」と言ふのは、この人よりも疾病や療法を好く心得てゐる者は又一人ないやうな、一人の醫者がこの都へやつて参りました。で、私はその醫者の許へ行つて、この方

のために薬を買つて参りました。そして、その薬を一回お呑みになつたら、もうこんなに快くなつたので御座います。お、信仰篤きものどもの主よ。」それを聞いて教王は言ひました。「一千片の黄金を持つて行つて、この女がすつかり恢復するやうに計らつてくれよ。」彼はそれから少女がやゝ恢復したのを喜びながら出て行きました。そして、老婆は一千片の黄金を持つて、例の波斯人の店へ行きました。そして、それを彼に與へながら、自分の娘だと言つたのは、實は教王の女奴隷だと言ふことを打ち明けました。それから彼女はノアムの書いた紙を相手に渡しました。そこで波斯人はそれを受け取つて、更にネアメーに渡しました。ネアメーはそれを見るや否や彼女の手續だと言ふことを知つて、氣絶してしまひました。彼が正氣に返つた時、その紙片を擴げて、次のやうに書いてあるのを見ました。——

一生の幸福を奪はれたる女奴隷より、心に想ひ詰めてゐる女より、その想ひ詰めてゐる戀人から引き離されたる女より。——一筆申上げます。貴方のお手紙は私に届きました。そして、私の胸をひろげ、私の心を喜ばせてくれました。眞個、それは詩人の言つた通りで御座いました。——

玉章は届きたり。そを書ける指は、甘き香を吐くまでに懐かしや。

そはモーゼが母の手に歸り、又はヨセフのがヤコブの許に届けられたる時のごとかりき。



ネアメーがこの對句を讀んだ時、彼の眼は涙に溢れました。それを見て、老女は彼に言ひました。「お、わが兒よ、何うしてそんなに泣くのですか？ 神様はお前様の眼から涙なぞの決して出ないやうにして下さいませうよ。」——すると、その波斯人が言ひました。「お、わが奥様よ。何うしてこの兒が泣かずにゐられませう。それはエル・クーフエーの町のエル・ラビーアの子息なるネアメーと云つて、あの女奴隷の主人で御座いますもの。そして、あの少女の健康は一にかゝつてこの兒に會へる何うかにあるので、あの女はこの兒に對する戀愛の外に何一つ病氣などはないのですよ。さう言ふ譯かですから、お、わが奥様よ。」と、彼は言葉を續けました。「この一千片の黄金は貴方が取つてお置きになつて、又私からもそれ以上の黄金を受取つて下さい。そして、何卒私どもを慈悲の眼で見やつて下さい。と言ふのは、私どもは貴方にお願ひするより外に、この事件を元へ還す手段を知らないで御座いますからね。」そこで彼女はネアメーに向つて、「お前様があの少女の御主人ですか。」と訊ねました。「はい、左様で御座います。」と、彼は答へました。すると彼女は言ひました。「お前様の言ふことは眞實に違ひない。あの兒も始終お前様のことを言つてゐましたからね。」ネアメーはそこで自分の身に起つたことを、始めから終ひまで彼女に物語りました。すると、老婆は言ひました。「お、若者よ、さう言ふことなら、私が手引をして、屹度お前様をあの兒に會はせて上げますよ。」彼女は、それから馬に乗つて、直ぐに歸つて行きました。そして、少女の部屋へ這入つて行きなが

ら、彼女の顔を見て笑ひました。そして、彼女に言ひました。「お、わが娘よ、お前様がエル・クーフエーの都のエルラビーアの子息なるネアメーと言ふお前様の主人と別れくになつたのが辛いと言ふので、泣いて病氣になつたのはほんとに女らしい心掛けですよ。」そこでノアムが言ひました。「面纱が貴方の眼から除かれました。で、貴方にも眞實のことがお分りになつたで御座います。」すると、老婆はそれに答へて言ひました。「まあ安心して胸を安らかに持つていらつしやい。大神にかけて、假令そのために私が生命を失ふやうなことがあらうとも、屹度お前さん方二人を會はせて上げまからね。」

それからネアメーの許へ取つて返して、彼女は彼に言ひました。「私はあの娘の部屋へ戻つて、あの娘と會見を遂げました。そして、お前さんがあの娘を慕つてゐるよりも、一層深くあの娘がお前さんを慕つてゐると言ふことを知りました。と言ふのは、教王があの娘を訪れようと望んでゐますけれども、あの娘は何うしてもそれを承知しないのですよ。で、若しお前さんが確りした心と意志の力を持つておいでなら、私がお前さん方二人を屹度會はせて上げますよ。お前さん方のため身を危険に曝しますよ、そして、そこには一つの計略と技巧とを使つて、あの娘と會はせるためにお前さんを教王の宮殿へ連れて行つて上げますよ。あの娘は何うしたつて出て来るわけには行きませんからね。」——そこでネアメーは答へました。「大神が貴方の御親切に酬いて下さいませう！」それから彼女は彼に

別れを告げて、少女の許へ参りました。そして彼女に言ひました。「實際お前さんの御主人は死ぬ程お前さんを戀ひ慕つてゐますよ。そして、一度お前さんに會ひたいと願つてゐますよ。で、お前さんの心持ちは何うですな？」——ノアムは答へました。「私もやつぱり同じやうで御座います。私も死ぬ程あの人のことを想ひ詰めて、一度でも可いから會ひたくてなりませぬ。」それを聞いて、老婆は女の装飾品や、女の着物の一襲を入れた包みを取り上げました。そして、再びネアメーの許へ行きながら、彼に言ひました。「何處か一人で私と一緒にいらつしやい。」そこで彼は彼女と一緒に店の背後の部屋へ這入りました。すると、彼女は麻の實で彼の指先を染めました。腕環で彼の腕を飾りました。絹の飾り紐で彼の髪の毛を飾りました。そして、女奴隷の衣裳を彼に着せて、女奴隷が身を飾る一番好い品々で彼を飾り立てました。さうすると、彼は黒い瞳をした樂園の處女のやうに見えて來ました。で老女はかういふ姿になつた彼を見た時、聲を擧げて叫びました。「大神よ、造物主の最も善きものよ、祝福されてあれ！大神にかけて、お前さんはあの子より美しく見えますよ。」——彼女はそれから彼に言ひました。「左の肩を前へ出して、右の肩を後へ引くやうにして、お臀を横に振りながら歩いて御覽。」そこで彼は吩咐けられた通りに彼女の前を歩いて見せました。そして、彼女は彼女の歩き振りを知つてゐると見た時、彼に向つて言ひました。「若しそれが神様の御心であるなら——ああ、神の御名は褒められてあれよ——今晚私が又こゝへ遣つて來るから、それまで待つていらつしや

い。それから私がお前さんを宮中へ案内して上げますよ。お前さんは侍従や召使どもに會つてもおづおづしないで、頭を下げていらつしやい、誰にもものを言つてはいけませんよ。私が誰にもお前さんにもものを言ひ掛けないやうにして上げますらね。成功するかしないか、その後は神様に任せて置きませうよ。」

で、次の朝になつた時、老女は再び彼の許へ遣つて來ました。そして、彼を連れて一緒に宮殿へ出懸けました。彼女は先に立つて這入つて行きました。すると、彼も彼女の後から續いて這入りました。が、侍従は彼が這入るのを妨げようとしてしました。そこで彼女は彼に言ひました。「お、奴隷の中でも最も險相な男よ。これは教王の側室なるノアム様の女奴隷だよ。何うしてお前はこの女の這入るのを留めるんです？」彼女はそれから又言ひました。「お、奴隷の娘よ、お這入りなさい。」彼はそこで老婆と一緒に這入りました。そして、二人は宮殿の庭に向つて開いてゐる戸口の前まで、すんずん進んで行きました。その時、老婆は彼に向つて言ひました。「お、ネアメーよ、氣を強く持つて、確かりなさい、そして、この御殿の中へお這入りなさい。それから左を向いて、戸を五つ數へたら、六つ目の部屋へお這入りなさい。それがお前さんを待つてゐる部屋の戸ですよ。誰がお前さんに物を言ひ掛けてもおおづししないで、たゞ黙つてゐれば可いんですよ。」彼女はそれから戸口の前まで一緒に進んで行きました。すると、その戸口を守衛する役を命ぜられてゐた侍従が、彼女に言葉を

掛けながら、「その女奴隷は何う言ふ女です？」と訊ねました。老婆はそれに答へました。「私どもの女主人がそれをお買ひにならうと言ふのですよ」宦官は又それに答へて言ひました。「教王のお許可がなければ、ここを通す譯には行きませぬ。だからこの女を連れてお歸りなさい。私は斷じてこの女を這入らせませんよ。私はさうしろと云ふ命令を受けてゐますからね。」「お、偉大なる侍従よ。」と、老女はそれに答へました。「貴方は理性を何處へ遣つたのです？ あれ程教王の想ひ込んでいらつしやる女奴隷のノアム様の御病氣が癒つたので、實際、教王は有頂天になつていらつしやる。そのノアム様がこの女奴隷を買ひたいと仰有るんですよ。だから、この女が這入るのを留め立てするやうな眞似はなさらないが可い。若しも、そんなことがあの方のお耳へ這入らうものなら、あの方は屹度お前さんに對して腹をお立てになるよ。お前さんに對して腹をお立てになつたら、お前さんの首を刎ねるやうに御命令になるのは定つてるぢやありませんか。」——それから彼女は言ひました。「お、娘奴隷よ、この人の言ふことなどは氣に懸けないでお這入りなさい。だが、この侍従がお前さんを這入らせなかつたなどと言ふことは、あの奥様に申上げない方がよう御座んすよ。」

そこで、ネアメーは頭を垂れたまゝ這入つて行きました。そして、左へ曲らうと思ひました。が、彼は間違つて、右へ曲りました。彼は戸を五つ數へて、六つ目の部屋へ這入つたつもりでした。が、彼は六つ數へて、七つ目の部屋へ這入りました。で、彼はその戸の中へ這入つた時、その部屋が金欄

の道具で飾つてあるのを見ました。その壁には黄金で細工をした絹の帷幄が懸かつてありました。そして、その部屋の中には伽羅や龍涎香や麝香を焚いて香爐を据ゑてありました。彼はその部屋の一帯奥に金欄で飾つた寢臺のあるのを見ました。そこでネアメーはその上に座を占めながら、神の隠れたる意志の中では、何んなことが彼に定められてゐるかを知りませんでした。で、彼が自分の身の上を思ひ運らしながら坐つてゐた時、見よ、教王の妹が侍女に伴はれながら、その部屋へ這入つて來ました。若者が其處に坐つてゐるのを見て、彼女はそれを娘奴隷だと思ひました。そこで彼女は彼の側へ近寄つて、彼に言ひました。「お、娘奴隷よ、お前は誰だえ？ お前の身の上は、何う言ふのだえ？」そして、お前は何う言ふ原因で此處へ這入つて來たのだえ？」が、ネアメーは物も言はなければ、彼女に返辭もいたしませんでした。彼女はそれから言ひました。「お、娘奴隷よ、お前が兄上の側室の一人であつて、兄上がお前に對して腹をお立てになりでもしたのなら、私がお前さんのために兄上に取做して上げませうよ。」が、ネアメーは矢つ張り返辭をいたしませんでした。それを見て、彼女は侍女に向つて言ひました。「この部屋の戸口に立つてゐて、誰も這入つて來させないやうになさい。」それから彼女は彼の側へ近づきました。そして、つくづく彼の可愛らしさを見遣りながら言ひました。「お、娘よ、お前は誰だか、何と言ふ名前だか、何のために一人この部屋へ這入つて來たのか、それを私にお言ひなさい。私はまだ此處で一度もお前を見たことがないのだからね。」が、ネア

メーはそれでも返辭をいたしませんでした。こゝに於てか、教王の妹もたうとう腹を立て、ネアメーの胸に手を掛けました。そして、それが女の胸のやうに出来てゐないのを見て、彼女は一體彼が誰であるかを知るために、正に彼の上衣を脱がせようとした。そこでネアメーは、彼女に言ひました。「おゝ、わが奥様よ、私は從者で御座います。何卒私を買つて下さいませ。私は貴方の御保護に續ります。何卒私を助けて下さりませ。」すると彼女は言ひました。「お前の身に危害は加へませんよ。だが、一體お前は誰だえ。誰がお前を私の部屋へ這入らせたのだえ？」——ネアメーは彼女に答へました。「おゝ、王后よ、私はエル・クーフエーの都のエル・ラビーアの子息なるネアメーと稱はれてゐる者で御座います。私は大守エル・ハツジャージが計略を用ひて、私の手から奪つてこゝへ連れて來た、私の娘奴隷のノアムのために、自分の身を危険に曝したので御座います。」すると、彼女は再び彼に向つて言ひました。「お前の身に危害は加へないから安心しておいで。」それから侍女を喚んで、「ノアムの部屋へ行つておいで。」と、命じました。

所で、老女はノアムの部屋へ行つて見ました。そして「お前さんの御主人はいらつしやいましたか。」と、彼女に訊ねました。「大神にかけて、いゝえ。」と、彼女は答へました。そこで老女は言ひました。「屹度あの人は間違へて、お前さんの部屋でない、他の部屋へ這入つたんですよ。そして、此處へ來る道を取違へたんですよ。」すると、ノアムは聲を擧げて叫びました。「あゝ、高く偉大なる

神の外に、この世に力も権力もない！ 私共に與へられた生涯は盡きて、二人とも殺されるので御座いますよ。」——二人はそれから一緒に坐つて思案に暮れました。彼等がかうしてゐる間に、見よ、教王の妹の侍女がその部屋へ這入つて來ました。そして、ノアムに挨拶しながら、彼女に言ひました。「奥様が話をしたいと仰有つて、貴方をお喚びで御座います。」——「はい、畏承まりました。」とノアムは答へました。すると、老女が言ひました。「多分お前さんの御主人は教王の妹君の許に居るんですよ。そして、面紗は除かれました。」そこで、ノアムは直ぐに立ち上つて、進み進んで、教王の妹の部屋へ參りました。それを見ると、後者は彼女に向つて言ひました。「私の側に坐つてゐるのは、お前の御主人だよ。この人は部屋を間違へたらしいのね。だが、それが神様の思召しであるなら、何も心配することはありませんよ。又この人の方でも心配しないが宜しい。あゝ、神の御名は褒められてあれよ。」で、ノアムは教王の妹からこれ等の言葉を聞いた時、やつと心が落着きました。彼女は主人なるネアメーの側へ進みました。彼も彼女を見て立ち上りました。互に胸と胸とを合せて犇と抱き締めながら、二人とも知覺を失つて倒れました。そして、二人が正氣に返つた時、教王の妹は彼等に向つて言ひました。「まあ下に坐るが可い。みんな一緒になつて、この難場を免れる工夫をしませうからね。」それから彼女は侍女に向つて「食物と飲料とを持つておいで。」と吩咐けました。そこで彼女はそれ等の物を持つて參りました。そして、彼等は満足するだけそれを喰べま

した。その後で、酒を飲みました。酒盃が一同の間に廻りました。彼等はその憂ひを忘れてしまひし  
また。が、ネアメーは言ひました。「お、ネアメーよ、お前はこの娘奴隷のノアムを愛してゐますか。」  
彼は彼女に答へました。「お、わが奥様よ、私が今あるやうなこんな危険の状態に身を置いたの  
も、實際此女の愛故で御座います。」それから彼女は又ノアムに向つて言ひました。「お、ノアムよ、  
お前は主人のネアメーを愛してゐますか。」——「お、わが奥様よ。」と、彼女は答へました。「私  
がこんなに見違へる程瘦せてしまひましたのも、眞個この人に對する愛故で御座います。」すると、  
教王の妹は再び言ひました。「大神にかけて、お前方は互に深く愛し合つてゐます。お前方を引き  
分けようなぞとした者は死んでしまふが可い！ だから、そんなによくくしないで心を愉快に持  
つが可いよ。」——それを聞いて二人は大いに喜びました。

それからノアムは琵琶を要求しました。人々はそれを彼女の前に持つて來ました。彼女はそれを取  
り上げて、調子を合はせました。そして、その快い響に聴き手を喜ばせながら、次の數句を唄ひま  
した。——

われ等はわれ等の讒謗者に對して、血の負債とてなけれども、彼等はわれ等を引き離さで  
は満足せず、

陣鼓を鳴らして攻め寄する時、われ等の保護者も、われ等の味方も、共に破れて力なけれ  
ば、われ等は已むなく君の眼もて、わが涙もて、わが息をもて——即ち劍と、瀧津瀬と、  
火を以て彼等と闘ひぬ。

彼女はその琵琶を主人のネアメーに渡しながら、「貴方も何かお唄ひなさい。」と言ひました。そこ  
で彼はその琵琶を取つて、調子を合はせました。そして、聴く人の耳に快い音を出しながら、次の  
句を唄ひました。——

満月の圓かなる時、君の顔ばせに似たり、太陽の蝕せざる時、君の姿にさも似たり。

われは驚く、——心がかりと、灼熱と、悲哀とに伴はれたる戀愛の、いかに奇蹟の富める

ことよ。——

戀人の家に行く時は、道はいかにも近けれど、彼女の家を離れて歸る道すがらは、いかに  
遠きことぞ。

彼がその歌を唄ひ終つた時、ノアムは彼のために洋盃に酒を注いで、それを彼に渡しました。そこ

で彼はそれを取つて飲みました。それから他の盃に酒を注いで、それを教王の妹に渡しました。教王の妹はそれを飲んで、琵琶を手に取りました。そして、絃の調子を合はせながら、次の句を唄ひました。――

悲しみと嘆きはわが心に宿りて、烈しき願ひはしばくわが胸を訪ひ來たる。

わが肉の衰へは人の目を惹きて、わが身は烈しき欲望のために纖弱くもなりけるものかな。

彼女はそれからその琵琶をエル・ラビーアの子息なるネアメーに渡しました。ネアメーはそれを取つて、絃の調子を合はせながら、次の對句を唄ひました。――

われは君にわが魂を捧げ、君はその魂を虐ぐ。われその魂を奪ひ還さんとするも能はず。

戀人に死より免れる術を與へよ、彼の死ぬ前に。あゝ、これぞ彼が最後の吐息なるよ。

一同は尙も詩を歌つたり、絃の快い音に合はせて酒を飲んだりしながら、何時までも面白可笑し

く喜びと幸福に満ちて時を過しました。彼等がかういふ状態にあつた時、見よ、教王がその場へ這入つて來ました。彼を見るや否や、一同は立ち上つて迎へながら、彼の前の地に接吻しました。すると、彼は手に琵琶を持つてゐるノアムを見て、彼女に言ひました。「おゝ、ノアムよ、お前の身から苦惱を取り去つて下さつた神は稱へられてあれよ。」それからまた、前に言つたやうな服装をしてゐたネアメーを見遣りながら、彼は妹に向つて言ひました。「おゝ、わが妹よ、ノアムの側にあるこの女は誰だい？」妹は彼に答へました。「おゝ、信仰篤き者どもの主よ、貴方が多くの側室に附けてお置きになつた女奴隷の中に、一人のお相手の上手な娘があつて、ノアムはその女と一緒になければ飲みも食ひもしないので御座いますよ。」かう言つて、彼女は次の詩人の言葉を唄ひました。――

彼等は二つの對向なり、共に寄れば又別種の魅力を生ず。一つの對向は他との對照によつていよいよその美を増す。

「大神にかけて、」と、教王は言ひました。「實際この女はノアムと同じやうに美しいね。明日になつたら、俺がノアムの部屋と並んで、別の部屋をこの女に宛てがつて遣らうよ。そして、この女のために道具や反物を送つてやらうよ。そして、ノアムの名譽のために、この女に應しいあらゆる品を届

けてやらうよ。』處で、教王の妹は新たに食物を命じて、それを兄の前に据ゑました。教王はそれを食べて、何時までも彼等の仲間になつてゐました。彼はそれから洋盃に酒を注ぎながら、ノアムに向つて、何かもつと唄ふやうに合圖をしました。それを見ると、彼女は二杯の酒を飲んだ後で、琵琶を取つて次の對句を唄ひました。――

わが酒の友、わがために、後よりく酒を注ぎて、三たび泡立つ酒盃を寄する時、  
お、教王よ、われが君が主人となりし心地して、終夜裾を曳きながら舞ひ狂ふよ。

それを聞いて、教王は非常に愉快になりました。それから他の洋盃に酒を注いで、それをノアムに渡しながら、もう一度唄ふやうに命じました。そこで、彼女はその洋盃を飲んだ後で、絃に觸れながら、次の數行の詩を歌ひました。――

お、生きとし生ける者の中の最も尊き君よ、何人も君と同列なることを誇る能はず。  
お、その稜威と寛大とに於て並びなき君よ。お、名の聞えたるもの、長にして王なる君よ。

お、地の上の總ての王者の王よ。惜しみなく與へながら、義務をも苦痛をも他に課せざる君よ。  
神は君を保護して、君の敵を苦しめ、成功と勝利とは君の好運を照らすべし。

で、教王はそれ等の詩を聞いた時、ノアムに向つて言ひました。『お、ノアムよ、實際お前は天から樂才を授かつてゐるね。お前の舌は本當に流暢だよ、お前の言葉は本當に明晰だよ。』

一同はかうして夜中頃まで愉快に、幸福に時を過しました。その時、教王の妹は言ひました。『お、教王よ。お聞きなさい、私は本の中で、或る位階のある人の話を讀みましたよ。』――『で、それは何ういふ話だい？』と、教王は言ひました。妹は彼に答へました。『お、信仰篤き者どもの主よ、昔エル・クーフエーの都に、エル・ラビアーの子息でネアメーと稱ばれる一人の若者が御座いました。彼は一人の娘奴隸を持つてゐましたが、彼はその娘を愛し、その娘は又彼を愛してゐました。彼女は彼と一緒に寢床で育てられました。で、二人が成長して互に相愛するやうになつた時、運命は彼等に災禍を蒙らせ、彼等を不幸に惱まして、二人を引き離してしまひました。讒言者どもは計略を用ひて、彼女を家の外に誘き出しました。そして、彼の住居からこつそり彼女を連れ出してしまひました。それから彼女を盗んだ男は國王の一人に黄金の一萬片で彼女を賣りました。所で、

娘奴隷はその主人に對して、彼が彼女に對して持つてゐると同じやうな愛を持つてゐました。そこで彼は自分の家族と家とを捨て、彼女を探しに出ました。そして、その女に會ふために、さまざまに肝膽を砕きました。彼は長くその家族と家とを離れたまゝ、全心をその女のために打ち込みながら、危険に身を曝しました。そして、たうとうその女奴隷と會見を遂げました。が、彼が彼女の側へ遣つて来て、まだ坐るか坐らない間に、盗んだ男の手から彼女を買つた國王が二人の許へ這入つて來ました。そして、即座に二人を死に處せよと言ふ命令を下しました。國王は正義にも據らなければ、その宣告に少しの猶豫をも與へませんでした。おゝ、信仰篤き者の主よ、この國王の所爲に關して、貴方は何うお考へで御座いますか。——教王はそれに答へました。「成る程それは驚くべき事柄だ。その國王は、自分が處罰の權を持つてゐるのだから、その二人を宥してやるべきであつたんだよ。と言ふのは、國王の彼等に對する行爲に於ては、三つのことを注意するのがその本分だからね。第一はその二人が相互の愛に依つて結び附いてゐると言ふことだ。第二は、彼等が彼の住居に、彼の權力内にあつたと言ふことだ。第三は、他人を裁斷する上には、國王たるものは非常に慎重であらなければならぬと言ふことだ。況んや彼自身が關係して居る事件に於ては、一層左様であるべき筈ではないかね。だから、その國王は、國王としてはあるまじき行爲をしたと言ふものだよ。——その時妹は彼に言ひました。「おゝ、わが兄上よ、天と地の王にかけて、私は貴方にお願ひしますよ。何卒もう一度唄

ふやうにノアムに命じて下さい。そして、あの女の唄ふことをよく聽いてやつて下さいませ。」そこで彼は言ひました。「おゝ、ノアムよ、俺に唄つてお呉れ。」そこで面白い節を附けながら、彼女は次の數章を唄ひました。——

運命は叛逆者なり。人の心を打ち碎き、懇求哀願をも無下に斥けて、戀人を會はせたる後に離しながら、

運命は常に叛逆者なりき。かくてぞ彼等の頬の上に、涙は絶えず瀧津瀬と流る。

われは彼と共にあり、彼はわれと共にありき。わが生活は楽しく、運命はしばしくわれ等を共に合はせたり。

さればわれは君を失ひたる悲しみに、涙に血を絞りて、日も夜も泣きに泣くなり。

で、教王はそれらの詩を聞いた時、一方ならぬ愉快を感じました。

その時妹は彼に向つて言ひました。「おゝ、わが兄上よ、自分に對して宣告を下したものは、それを實行して、自分が言つたやうにしなければなりません。そして、貴方は、この決定に據つて、貴方御自身の上に宣告をお下しになりました。」それから彼女は言ひました。「おゝ、ネアミーよ。そこへお



立ちなさい。お前もそこへ立つが可い、おノアムよ。」そこで彼等は二人とも立ちました。そして、  
教王の妹は言ひました。「お、信仰篤き者どもの主よ、ここに立つてゐるこの女がその盗まれた  
ノアムで御座います。この女はユーズフ・エス・サカファイの息子なるエル・ハツジャージの手で盗  
まれて、あの手紙の中で證言されたやうな嘘を吐きながら、貴方のお手許へ送られたので御座いま  
す。彼は黄金の一萬片でこの女を買つたやうに申して來ましたが、それはみんな眞赤な嘘で御座いま  
すよ。それからここに立つてゐるこの男はエル・ラビアーの息子のネアメーと言つて、この女の主人  
で御座います。で、私は貴方の純潔な御先祖の名譽にかけて、貴方にお願ひしますから、何卒この二  
人を赦してやつて下さい。そして、女を男の手に戻してやつて下さい。さうすれば、貴方は屹度二人  
のために好い報酬を得られますよ。何故と申すに、二人は貴方の権力内にあるもので、貴方の食物を  
食ひ、貴方の飲料を飲んだので御座いますからね。私は二人のために執成人として、貴方に二人の命  
乞ひをいたしますよ。」

で、それを聞いて教王は言ひました。「お前の言ふことは、眞實だよ。俺はその宣告を下した。そ  
して一度下した宣告は、二度とそれを取消さうとはしない。」彼はそれから言ひました。「おノアム  
よ。これはお前の主人かい。」彼女は答へました。「はい、左様で御座います。お、信仰篤き者共の  
主よ。」すると、彼は言ひました。「お前方のどちらにも危害は加へられないよ。俺はお前方を各自に

返して上げるからね。」それから又彼は言ひました。「おノアメーよ、お前は何うしてこの女の居所  
を知つたのだい、誰がこゝをお前に教へてくれたのだい？」——「お、信仰篤き者どもの主よ。」と、  
彼は答へました。「どうぞ私の身の上を一通りお聞き下さいませ。貴方の純潔な御先祖にかけて、私  
は何事も包み隠しはいたしませんから。」かう言つて、彼は波斯人が自分のために何うしてくれたと言  
ふことから、老女がかうくして自分を宮殿の中へ連れて來てくれたが、自分が戸口を間違へたと言  
ふことまで、残らず自分の身に起つた事柄を教王に物語りました。すると、教王はそれを聞いて非  
常に奇異の感に打たれました。彼はそれから、「その波斯人をこゝへ連れて來い。」と言ひました。  
そこで人々は彼を教王の前へ連れて來ました。すると、教王は彼を主なる役人の一人に任命して、  
名譽の衣裳を彼に與へました。そして、「斯様に處置した者を主なる役人の一人に取立てるのは、俺  
の本分だよ。」と言ひながら、立派な贈物を彼に賜はるやうに命令を下しました。教王は又ネアメー  
とノアムの二人を手厚く待遇して、彼等や例の老女に様々な恩寵を加へました。そして、ネアメーと  
ノアムとは、極めて愉快な日を送りながら、數ヶ月間幸福に宮殿の中に逗留しました。それからネア  
メーはその娘奴隷を連れて出發する許可を教王に願ひました。そして、教王は彼等にエル・クーフ  
エーに向つて出立する許可を與へました。そこで二人は打連れて旅行に上りました。そして、ネアメ  
ーは再び父や母と面會しました。それからこの二人は、人の世の快樂を打ち切り、仲間を別れさせる

無情の手が彼等の上に加はるまで、極めて幸福な一生を送りました。

アリー・シエーアとヅムルツドの話

第三百八夜の半ばは始まつて第三百二十七夜の半ばは終る

昔クラークの國に、その名をメジデッド・デーレンと呼ばれた一人の商賈が御座いました。彼は非常な財産と、黒奴と、侍者を持つておりました。が、彼は六十の年齢に達するまで、子供と言ふものを恵まれませんでしたが、その後、神様は——あ、神の御名は讃へられてあれよ——一人の子息を彼に與へられました。彼はその子をアリー・シエーアと名づけました。

この兒は成長するに伴つて満月のやうになりました。そして、彼が成年に達して、あらゆる愛嬌を身に具へるやうになつた時、彼は死病に取り憑かれて、病の床に臥しました。そこで、彼は息子を喚んで彼に言ひました。「お、わが兒よ、だん／＼死の時期が廻つて來た。そこで私はお前に遺言をして置きたいのだがね。」——「それは何う言ふことで御座いますか。お、わが父上よ。」と、青年は言ひました。彼は答へました。「私はお前が人類の中の誰とも懇意にならないやうにして、危害や不幸を招くことを避けて貰ひたいのだよ。よく注意して悪い友達を拵へないやうにするが可い。悪い友達には黒い鍛冶屋のやうなものだからね。縦やその火がお前に火傷をさせないにしても、その煙りはお前

を苦しめずには置かないよ。次のやうに言つた詩人の言葉は、いかにも優れたものではないか。——

汝の一生に、飽くまでその人の友情を離さじとする程の友はあらじ。運命一たび離反する時、なほ汝に忠實なる友はあらじ。  
さらば汝は一人生きよ、何人をも手頼とせず。われはこゝに好き言葉を教へたり、わが言ふことはこれにて足る。

他の詩人は又かう言つてゐるよ。——

人は隠れたる疾病の如し、必ず彼等を當てにするな。  
よく見れば、人には必ず偽りと詐略の伴なふものぞかし。

他の詩人は又かう言つてゐるよ。——

人と交はるは、用なき會話に時を過す外に、何の利益もなきものぞ。

されば彼等と語るには、知識を獲るか、然らば用務を果たすためならで、成るべく言葉を費やすなよ。

他の詩人は又かう言つてゐるよ。――

聰慧の人ありて人類を試みたりとするも、彼はたゞそれを味はへるばかりなるに、われはそれを食ひたりき。

われは彼等の愛情に詐欺の外何物をも見ず、彼等の宗教に偽善の外何物をも見ざりき。』

青年はそれに答へました。『お、わが父上よ、よく分りました、必ずお言葉に背きませぬ。でも、もうこの外に私に氣を附けて下さるやうなことはありませんまいか。』――彼の父は答へました。『お前が出来るときには、善いことをなさい。人に對しては、成るだけ鄭重にして、機會のある毎に親切を施すやうになさいよ。と言ふのは、親切を盡くす心はあつても、それを仕遂げる機會は滅多にないものだからね。次のやうに詩人が言つてゐるのは、何と好い言葉ではあるまいか。――

何時いかなる場合にも、慈善は必ずしも容すくなし遂げ得べきものならず。

されば汝のなし得る時、急いでそれを行へや。それが實行の時ありて困難となる恐れあれば。』

子息はそれに答へました。『よく分りました。お言葉通りに致しませう。で、それから何で御座いますか。』――『お、わが兒よ。』と、父親は再び言ひました。『神様を忘れないやうにするが可いよ。さうすれば、神様もお前を忘れては下さらないからね。それからお前の財産を大切にすることが可い、決してそれを浪費しては不可ないよ。それを浪費してしまつたら、お前は人類の中の最弱者の幫助をも乞はなければならぬやうになるからね。元來人間が他人から受ける尊敬は、右の手に持つてゐる物次第だと言ふことを忘れないやうにするが可い。次のやうに言つてゐる詩人の言葉は、いかにも立派なものではあるまいか。――

わが富やうやく減する時、われと交はる友はなし。されどそが殖え行く時、すべての人はわが友なり。

いかに多くの敵人が金子ゆゑわれの味方となりしぞ！  
いかに多くの友だちが金子ゆゑわれの敵となりしぞ！

「で、その外には？」と、青年は又訊ねました。彼の父はそれに答へました。「お、わが兒よ何事もお前より年上の方に相談するが可いよ。決して自分がしたいと思ふ事を急いでやつてしまはうとせぬが可い。自分より目下の者に同情を掛けてやるが可いぞ。さうすれば、自分より目上の方も前に同情して下さるからね。誰をも壓制しないが可い、神様がお前を壓制しようとする者にお前以上の力をお藉しになると恐しいからね。かう言つた詩人の言葉はいかにも優れてゐるではないか。――

己の判断に他人の判断を加へよ。二人の心の前には、眞理も決して隠されざれば。  
人の心は己の顔を見る鏡なり。されど二つの鏡を併はせて見る時は、その背後をも見得べきぞ。

他の詩人は又かう言つてゐるよ。――

慎重にして、あまり功を急ぐな。慈悲深かれ、おん身も又慈悲深き人に會ふべければ。  
世に神の御手の其上に加はらぬ手もなければ、壓制者に出會はで濟む壓制者もなきものぞ。

氣を附けて酒を飲むな。それはあらゆる悪の原因だからね。酒は理性を追ひ拂つて、飲む當人の上に他人の侮辱を齎すものだよ。詩人がかう言つてゐるのは、いかにも善い言葉ではないか。――

大神にかけて、酒のわが心を亂す時、わが魂はわが體と離れ、わが言葉はわが思想を表はさず。

さればぞわれは小兒のやうにそれに憧れ、さればぞ我は醒めたる人の外友とせざるなれ。

これが私の遺言だよ。どうかこの言葉を始終眼の前に持つてゐるやうにしてくれ。さうすれば、神様は私に代つてお前を保護して下さるからね。――かう言ひながら、彼は氣を失つて、少時黙つてゐました。その後彼は又息を吹き返して、神の御宥恕を願ひ、新に信仰の告白をいたしました。そして、神の御慈悲の下に引き取られました。あゝ、神の御名は讃へられてあれよ。

彼の子息は彼のために泣いて哀悼しました。彼は父の亡骸を葬るために身分相應の用意をいたしました。大人も子供も葬列に加はつて歩きました。聖典の誦讀者は柩を周つて高らかに誦誦しました。彼の子息は死者に對して盡くすべき名譽の儀式を一つとして省略しませんでした。彼等はそれから故人の冥福を祈つて、亡骸を葬りました。そして、その墓石の上に次のやうな二行の詩句を彫りつ

けました。

汝は土より出で、この世の生を享け、流るゝ如き辯舌を驅使するに致れり。  
今や又土に還りて、亡骸となつて此處に横たはる、未だ嘗て土より出しことなきが如くに。

彼の子息のアリー・シエトアは深く父の死を悲しみながら、身分のある人の死んだ場合に相當するやうな方法で、死者に對する追悼の形式を嚴重に守りました。彼は母親がその後間もなく所天の後を追うて死んで行くまで、父親の喪に服してをりました。その時父親の亡骸に對してした通りに、母親のそれに對してもして遣りました。その後で、彼は店に坐つて賣つたり買つたりいたしました。そして、父の遺言を遵奉して、神の手に造られた人間の何人とも親しく交際しませんでした。あゝ、神の御名は讀へられてあれよ。

かうして彼は一年の期間を過ぎました。が、その一年間が過ぎ去つた時、淫蕩な女の腹から生れた子息達が、計略でもつて彼に近づいて、彼の伴侶となりました。その結果彼は彼等と共に惡に傾いてだんく實直な道から遠ざかつて行きました。彼は洋盃に酌いで酒を呷つては、朝も晩も女の許へ入り浸りになつてゐました。そして、彼は心の中に言ひました。「私の親爺は私のためにこの富を蓄積

して置いてくれたのだ。私が若しそれを使はなかつたら、一體誰にその金を遺して置かうと言ふんだい？ 大神にかけて、私は昔の詩人が言つたやうにはしない積りだよ。——

汝の一生を通じて、かく金子を貯めてばかりあるならば、かくして得たる財寶を、何時の日汝は楽しむべきぞ？」

彼は日も夜もその富を浪費することを罷めませんでした。そして、たうとうその全部を使ひ果たして、赤貧に陥つてしまひました。彼の境遇は悪しく、彼の心は亂れました。で、彼はその店と、住家とその他の所有財産を賣り拂つてしまひました。その後で、彼は自分のために一襲しか残さないで、衣裳まで賣り拂つてしまひました。

處で、酔ひが醒めて反省が還つて來た時は、彼も何となく悲哀の念に打たれました。或日彼は夜明けから午後の祈禱の時分まで、朝食も食べないで坐つてゐました。それから彼は心の中に言ひました。「兎も角一緒になつて私の財産を使つてしまつた連中の許へ出掛けて見よう。多分、その中に一人位は、今日私を養つてくれる者があるだらうよ。」彼はそこで順々に仲間の家を廻つて見ました。が、その戸を敲く度毎に、彼等は居留守を使つて、てんから姿を見せませんでした。そして、空腹が

いよいよ彼を苦しめました。で、彼は商賈どもの市場へ行ききました。そして、そこに群集が環を造つて、人々がそれを目覘けて駈けて行くのを見ました。それを見て、彼は心の中に言ひました。「こんな大勢の人が集まつてゐるのは、何うした理由であらう？ 大神にかけて、私もこの環の中を一目見て心を満足させるまでは、何うしてもこの場を動かない積りだよ。」——それから彼はその傍へ近寄りながら、まだ五尺位の脊の、姿形の整つた、薔薇色の頬をして、乳房の高い一人の娘がそこに立たされてゐるのを見ました。彼女はその美しさに於ても、可愛らしさに於ても、その優雅さにかけても、その愛嬌にかけても、同じ年頃の娘どもに一際立ち優つてゐました。この娘の名はツムルツドと言ひました。そして、アリー・シエーアは彼女を見た時、その美しさと愛らしさとに驚きの眼を睜りながら言ひました。「大神にかけて、私はこの娘の値段の何れだけの金額に上つて、何んな奴がそれを手に入れるかを見ないうちは、此處を立ち去らない積りだよ。」そこで彼は商賈どもの中に立つてゐました。商賈どもも、彼が莫大の富を両親から受け嗣いだことを知つてゐましたので、矢張りこの娘を買ふ積りで來てゐるのだらうと想つてゐました。

で、仲買人はその娘の前に突立ちながら、「お、商人どもよ。」と言ひました。「お、富の所有者よ、この娘のために、月のやうな諸々の美の女主人のために、高價な眞珠のために、帷幄つくりのツムルツドのために、求むる人の願ひの的でもあれば、欲求者の喜びでもある女のために、何誰か最初

の價を開ける方は御座いせんか。兎に角最初の口を開けて下さい。最初の口を開けた方といふものは、何んな値段を着けた所で、決して咎め立てされべき筈のものぢやありませんからね！——すると、商賈の一人が言ひました。「では、黄金の五百片でその女を私に賣つてくれ。」他の一人が言ひました。「もう十片。」所で、蒼い眼をして、可厭な顔立ちをした、ラシード・エド・デーインと稱ばれる一人の老爺が言ひました。「もう百片出すよ。」すると他の一人が言ひました。「その上十片。」で、その老爺は言ひました。「ぢや、黄金の一千片出すよ。」それを聞くと、商賈共の舌は縛られて、みんな黙つてしまひました。そこで仲買人はその娘の持主に相談しました。所が、その持主は言ひました。「私はこの女の氣に入つた買手にしかこの女を賣らないといふ誓約を立て、あるんですよ。何うか一つ當人に相談して見て下さい。」仲買人はその言葉に従つて彼女の傍へ行きながら言ひました。「お、月のやうな諸々の美の女主人よ、この商人が貴方を買ひたいと言つてゐますが、如何いたしませう。」すると、彼女はその老爺を見遣りましたが、前にも言つたやうな顔色なので、仲買人に向つて言ひました。「あんな年齢を取つた羨び返つた老人の許へは、わたしは何んなことがあつても賣られて行きませんよ。かう言つた詩人は、眞個才氣のある方ですわね。——

ある日われ、彼女に接吻を求めき。されど彼女はわが白髪を見て（われは富と財寶とを持

てりけれど)  
顔を背向けて、さて言へらく、いなとよ、無より人類を造り出だせし唯一無二の神にかけ  
て、われは白髪に對して何の欲望をも有せず、われなほ生ける間に、綿もて口を填めらる  
べきか。』

で、仲買人は彼女の言葉を聞いた時、彼女に向つて言ひました。「大神にかけて、貴方のさう仰有  
るのは無理もない。本来なら、貴方の値段は黄金の一萬片もするんですからね。」それから彼は彼女  
の持主に、彼女がその老翁を肯じない旨を告げました。すると、彼はそれに答へました。「もつと他  
の者に就いてこの女に相談して下さい。」すると、他の商人が前へ進んで言ひました。「この女の肯じ  
なかつたあの老翁の言ひ出した値段で、この女を私に賣つて下さい。」で、娘はその男を見遣りなが  
ら、彼が鬚を染めてゐるのに眼を着けました。そこで彼女は言ひました。「白髪を染めるなんて、何  
と言ふ見つともない、人の目を眩ますやうな、曖昧な行ひでせう！」かう言つて、非常な驚愕の情を  
表はした後で、彼女は次の章句を高らかに吟誦しました。――

『淺間しき光景を見るものかな　――大神にかけて、頸を靴にて打たるゝにも優れり！』

わが頬とわが姿とに魅せられたる君よ、君はかく己の身を伴りて、敢て意とせざるか。  
心汚くも己れの白髪を染めて、人を欺くために、それを隠して通さんとは！  
君は人形使のそのやうに、行きには黒い鬚で行き、歸りには白い鬚で歸らんとするか。』

で、仲買人は彼女の詩句を聞いた時、彼女に向つて言ひました。「大神にかけ、貴方の仰有ること  
は眞理ですよ。」所で、彼女に値段をつけた商人は、仲買人に向つて訊ねました。「一體、あの女は何  
と言つてるんです？」そこで仲買人は彼女の詩句をその儘繰り返して相手に聞かせました。すると、  
その商人は自分が悪かつたといふことに氣が附いて、彼女を買はうとする念を捨て、しまひました。  
すると又他の商人が前へ進んで言ひました。「貴方が最後に聞いた値段で、あの女が私の所有になつ  
てくれるかどうか、一度あの女に訊いて見てくれませんか。」仲買人はそこで又その男に就いて彼女  
に相談いたしました。で、彼女はその男を見遣りましたが、彼が隻眼であることを知つて、仲買人に  
答へました。「あの人は隻眼で御座います。かう言ふ人に就いては、詩人も次のやうに言つたことが  
ありますよ。――

一日といへども、片眼の人と交はるな、それよりも、その男の惡意と虚偽とに警戒せよ。

若しその人に少しでも善き所ありとせば、神はいかでその眼をつぶすやうにしたまはむ。」

仲買人はそれから他の者を指差しながら言ひました。「何うです、あの商賈に賣られては行きませんか。」で、彼女はその男を見遣りました。そして、彼が脊の低い男で、帯まで達くやうな長い鬚を持つてゐるのを見て、彼女は答へました。「かう言ふ人に就いては、詩人は次のやうに言つてゐます。――

われに一人の友あり、神はその男に用もなき長き鬚をば與へたまひぬ。

まことにその鬚は、長く、暗く、寒くして、冬の一夜にも似たりけるよ。」

仲買人はそこで彼女に向つて言ひました。「お、わが奥様よ、こゝに立つてゐる男の中で、どれが貴方のお氣に入るかよく見定めた上、その人を私に言つて下さい。私はその男に貴方を賣つて上げますからね。」そこで彼女は、輪になつた商賈どもの顔を見廻しながら、一人づつ順々にその人相を檢べて行きました。そして、最後にその眼をアリー・シエーアの 上に落としました。一目彼の姿を見ると、彼女は無数の溜息を吐きました。そして、彼女の心は彼に捕はれてしまひました。と言ふのは、彼は眼を驚るかすやうな可愛らしい男で、北方の微風よりも優しい姿をしてゐたからで御座います。

で、彼女は言ひました。「お、仲買人よ、わたしはもうこの旦那様の許でなければ、何處へも賣られては参りませんよ。眞個美しい顔と優しい姿をしていらつしやるわね。その竝優れた美しさに就いては、詩人もかう言つたことがありますよ。――

世の人は君の姿を見せて置いて、わたしがそれに誘惑されたと言つて叱る。

まことわたしを保護する氣なら、君の姿を隠して置いて、人に見せぬが可いわいな。

ですから、わたしはもうあの人の外には誰の所有物にもなりませんよ。眞個あの人の頬は滑らかなで、あの人の唇の露汗は病人が癒るといふセルセビールのそれにも似て、あの人の愛嬌は詩人や散文家をも困惑させてしまふ位ですものね。本當にあの方は、昔の詩人が言つた通りで御座いますわ。

彼の唇の露は酒の如く、彼の吐く息は麝香の如く、彼の前齒は樟腦にも似たるかな。

リドワーンがフリーエエどもの誘惑さるゝを恐れて、天國の住ひより彼をこの世に逐ひしものか。

人々は彼の傲れるを咎む。されど満月は傲れるが故に咎められべきものならじ。



捲髪と、薔薇のやうな頬と、人を魅する流眇とを持つた男ですわ。それに就いては、詩人はかう言つてゐますよ。――

屢々仔鹿の如き人われに逢瀬を約しぬ。わが心は現なく、わが眼は唯彼の來るを待てり。  
彼の眼瞼は彼の約束の眞なるをわれに語れり。されど、あのやうに倦げなる眼瞼のいかでその約束を守り得べき？」

――で、仲買人はこの女がアリー・シエーアの容色を讚美したそれ等の詩句を聞いた時、彼女の辯舌と彼女の美の輝かしさとに驚愕の眼を睜りました。が、彼女の持主は彼に言ひました。「日中の太陽をも恥ぢらばせるやうなこの女の美しさにも驚かぬが可い、又詩人達の美しい章句を蓄めてゐるこの女の記憶にも惘れぬが可い。この女はまだ光榮ある聖典を七種の讀み方で讀誦して、正確に傳へられた高尚な傳説を物語つて、七種の手蹟で字を書いて、非常な學者でも知らないやうな學問の話でも知つてゐるんですよ。又この女の手は黄金や白銀にも優つてゐます。と言ふのは、この女は絹の帷幄を襲へて、一つ毎に黄金の五十片を儲けて賣りますからね。その帷幄をこの女は八日の間に造り上げてしまふんですよ。――そこで仲買人は言ひました。「お、この女を自家に置いて、自分の選ばれたる

財寶の中にこの女を數へることの出来る人は幸ひなるかな！」それから彼女の持主は彼に言ひました。「誰でも可いから、この女の好いた人に賣つて下さい。」

そこで仲買人はアリー・シエーアの傍へ来て、彼の手に接吻しながら言ひました。「お、わが君よ、この娘をお買ひなさい。この女は貴方を選ばれましたよ。」かう言つて、彼はこの女の知つてゐるものを數へながら、彼に向つてこの女の長所を語つて聞かせました。そして、彼に言ひました。「この娘をお買ひになつたら、貴方は眞個御運が宜しいのですよ。人に向つて賜物を吝しまぬ神様が、この女を貴方に興へて下さつたのですからね。」そこで、アリー・シエーアは自分の境遇を自分で笑ひながら、しばらくの間頭を地面に垂れて考へてゐました。そして、心の中に言ひました。「私は今現に朝食さへ食はずにある。だが、この娘を買ふだけの金子さへないと云ふことを商人どもの前で言ふのは、どうも羞かしくて口へ出ないよ。」すると、その女は彼の頭を垂れてゐるのを見て、仲買人に向つて言ひました。「私の手を取つて、あの人の傍へ連れて行つて下さい。私は自分が何んな女だと言ふことをあの人に見せて、私を所有しようとするあの人の欲望を唆つてやりたく御座いますからね。私は何んなことがあつても、あの人の外には誰にも賣られて行きませんよ。」仲買人はそこで彼女の手を取つて、アリー・シエーアの前に立たせながら言ひました。そして、「何うです、これでもお氣に入りますんか、お、わが君よ？」と言ひ添へました。が、彼は返辭をいたしませんでした。そこでその娘

は言ひました。「お、わが君よ、わが心の愛者よ、何故貴方は私を買つて下さらないのです？ 幾許でも可いから私を買つて下さい。わたしは屹度貴方に幸運の向いて来るやうにして上げますよ。」——すると、彼は頭を擡げて彼女の方を見遣りながら言ひました。「人間と言ふものは、さう無理強に買はせられるものかね。お前の値段は黄金の一千片では高過ぎるよ。」——彼女はそれに答へました。「お、わが君よ、何卒九百片で私を買つて下さい。」——「いや、買はないよ。」と、彼は言ひました。「ぢや、八百片で如何です？」と、彼女は再び言ひました。「いや、買はないよ。」と、彼は言ひました。彼女は段々値を下げて行つて、たうとう、「黄金の一百片では何うです？」と彼に訊ねました。が、彼は言ひました。「そんなこと言つても、私は黄金の一百片だけの持ち合せもないのだよ。」すると、彼女は笑ひながら彼に言ひました。「では、何れだけ一百片に足りないの御座います？」彼はそれに答へました。「私は黄金の一百片も持つてゐなければ、一百片より少くも持つてゐないのだよ。大神にかけて私は白いのも、赤いのも持つてゐない、白銀の一片も持つてゐなければ、黄金の一片も持つてゐないのだよ。だから、お前も他にもつとお客様を捜した方が可いよ。」——で、彼女は彼が無一物であると知つた時、彼に向つて言ひました。「私の手を取つて、私を檢べるやうな振をして物蔭へ連れて行つて下さい。」彼はそこでその通りにしました。すると、彼女は衣囊から一千片の黄金の入つてゐる財布を取出して、彼に言ひました。「その中から私の値段として九百片だけ勘定して出して、自餘の

百片は貴方の手許に取つて置いて下さい。又いつか二人の役に立つこともあるでせうからね。」そこで彼は彼女の頼んだ通りにして、黄金の九百片で彼女を買ひ入れました。そして、その財布からそれだけの額を取り出して拂つてから、彼女と一緒に家に歸りました。で、そこへ着いた時、彼女は家の中に何にもない、木地のまゝの床が見えてゐるのを見ました。家具もなければ、道具一つ其邊にありませんでした。そこで彼女は黄金の一千片を男に渡しながら、かう言ひました。「市場へ行つて、二人のために、黄金の二百片で家具や器具を買つていらつしやい。」で、彼はその通りにいたしました。それから彼女は彼に言ひました。「この三片の黄金で、二人のために食物と飲料とを買つていらつしやい。」で、彼はその通りにいたしました。次に彼女は彼に言ひました。「二人のために、帷幄になるだけの絹の布片と、金糸銀糸と、七色の絹糸とを買つて来て下さい。」で、彼は又その通りにいたしました。彼女はそれから家の中に家具を擴げて、蠟燭を點火しました。そして、一緒に坐りながら食つたり飲んだりいたしました。その後で、二人は互に抱擁しながら、嘗て詩人が次のやうに言つたやうな光景を現出しました。——

人の眼は嘗て二人の愛人の並びある光景よりも、更に美しきものを見しことあらじ。  
かたみに抱擁しつゝ、満足の衣を纏ひては、腕と手首とを枕に當てつ。

心と心との共に結び着ける時、難ずる者は冷たき鐵の上を打つごとし。  
彼等の情熱のために戀人達を罵る者よ、お、汝は奪ひ去られし心を取戻すことを得るや。  
汝の生涯に、汝を喜ばす者あらば、汝は欲望を持てるなり。さらばその者ととも生きよ  
かし。

かうして相互の愛が相互の胸に植ゑ附けられました。で、次の朝その女は幄帷を取り上げて、七色の絹糸でそれを縫箔した上、金糸や銀糸でそれを飾りました。彼女はさまざまの鳥の姿で、それに縁を附けました。そして、その周圍にさまざまの野獸の姿を現はしました。ありとある野獸の一として、その上に描かれてゐないものはありませんでした。彼女は八日の間その仕事を續けました。そして、それが出来上つた時、彼女はそれを裁つて、それに光澤づけをしました。それから、それを夫に渡しながら、かう言ひました。「これを持つて市場へ行つて、黄金の五十片で商人の手へ賣つていらつしやい。くれぐれも街で通りがりの人などに賣つては不可せんよ。それが二人の別れる原因になるかも知れませんか。私共はまだ二人を覗つてゐる敵が澤山あると思つてゐなければ不可せんよ。」で、彼はそれに答へました。「委細承知したよ。」彼はそれを持つて市場へ行きました。そして、彼女が頼んだ通りに、それを商人の手へ賣りました。その後で、彼は前のやうに七色の絹糸や、

金糸銀糸と共に、他の絹の布片を買ひました。又必要な食料もその中に入れました。そして、それ等の物を彼女の許へ持つて来た上、殘餘の金子を彼女に渡しました。かうして、八日目毎に彼女は一つの幄帷を彼に渡して、黄金の五十片で賣りにやりました。

かうして彼女は全一年の間續けました。その一年が経つてしまつた後で、彼は平常のやうに帷帷を持つて市場へ行きました。そして、それを仲買人に渡しました。所で、一人の基督教徒が彼に會ひに来て、黄金の六十片でそれを買はうと言ひ出しました。彼はそれを賣るのを拒絶しました。が、基督教徒はだん／＼額を増して行つて、たうとう黄金の一百片でそれを買はうと言ひ出しました。その上黄金の十片を賄賂として仲買人に贈りました。そこで仲買人はアリー・シエアの許へ戻つて来て、相手から申出された値段を彼に告げました。そして、一種の計略を用ひて、その額で基督教徒にその帷帷を賣るやうに勧めながら、彼に言ひました。「お、わが君よ、この基督教徒はそんなに心配なさらなくも宜しいよ。決して氣遣ひのある人物ではありませんからね。」他の商賈どもも立ち上つて、同じやうに彼に勧めました。そこで彼は内心びく／＼しながら、それをその基督教徒に賣りました。そして、その値段を受取つてから、家に歸つて来ました。が、彼は例の基督教徒が自分の背後から蹤いて來るのを見ました。で、彼は言ひました。「お、基督教徒よ、何うしてお前さんは私の背後から蹤いて來るんです？」「お、わが君よ。」と彼は答へました。「私はたゞこの街の突き當りま

で行つて見ようと思つてゐるんです。神様は決して貴方を困らせるやうなことはなさいませんよ。」  
所で、アリー・シエーアが自分の住家へ着いた時、基督教徒はやはり彼に隨つて来てゐました。そこで彼は彼に言ひました。「お、呪はれたる者よ。何うしてお前さんは私の行く處へ何處へでも蹤いて来るんです？」基督教徒はそれに答へました。「お、わが君よ、何うか私に水を一杯やつて下さい。何うも咽喉が渴いて堪りませんからね。この報酬は神様が貴方に與へて下さいますよ。あ、神の御名は讃へられてあれや。」アリー・シエーアはそこで心の中に言ひました。「これは納貢者に違ひない。そして、この男は私に一杯の水を要求した。大神にかけて、私もこの男を失望させては置かないよ。」

それから彼は家の中へ這入つて、一杯の水を持つて出ようと思つて、彼の娘奴隷なるツムルトドは、彼の姿を見て言ひました。「お、わが愛人よ、貴方はあの帷幄を賣つていらつしやいましたか。」彼はそれに答へました。「あ、賣つて来たよ。」すると彼女は言ひました。「商賈の手へですか。それとも通り掛りの人へですか。私は何うも氣が塞いで、貴方と別れなければならぬやうな氣がして仕方がないのですよ。」——彼はそれに答へました。「私は商賈のほか誰にも賣つて來はしないよ。」が、彼女は言ひました。「何うぞ眞實のことを言つて下さい。わたしもそれだけの覺悟をしなければなりませんからね。貴方は又何うして、と、彼女は附け加へて訊ねました。「その水を持つてい

らつしやるんです？」——「仲買人に飲ませてやるためだよ。」と、彼は答へました。すると、彼女は聲を擧げて叫びました。「あ、高く偉大なる神の外に力も權力もない！」かう言つて、次の二句を誦しました。——

「お、別離を求むる君よ。さは急ぐことなかれ、愛者の抱擁に心を奪はれて、大事を忘れたまふなよ。

さは急ぐことなかれ、固より運命は反逆者にて、會者定離のためしに漏れぬものなれば。」

——彼はそれから一杯の水を持つて出て行きました。そして、基督教徒が家の中の廊下に這入つてゐるのを見ました。そこで彼は言ひました。「何うしてお前さんは此處へ這入つて來たのです？ お、この犬よ。私の許可も待たないで、家の中へ這入つて來たのは、何うしたと言ふのです？」——「お、わが君よ。」と、彼は答へました。「戸口も廊下も別に變りはありませんよ。私は中へ這入つて行かうとも、決して戶外へ出ようとは思はない。ですが、貴方の仁恵と、親切と、寛大と、行き届いた行ひに對しては、私も深く感謝しますよ。」それから彼はその水を手を取つて、一息に飲み干しました。その後で、彼はそれをアリー・シエーアに渡しました。アリー・シエーアはそれを受取りなが

ら、相手が立ち上るだらうと思つて待つてゐました。が、彼は何時までも立ち上らうとはしませんでした。そこでアリー・シエーアは彼に言ひました。「何うして貴方は立ち上つて、自分の勝手な處へ出て行かないのです？」基督教徒はそれに答へました。「お、わが君よ、恩恵を興へて置いて後からそれを非難の種にするやうな人にはなつて下さるな。又は詩人がかう言つたやうな人にもなつて下さるな。――

戸口に立ちて求むる時、乞ひに任せて恵み深き助けを興へるやうな人々は、今はた逝いてあらず。

彼等一たび逝いて後、人の門に立ちて乞うて見よ、興へられたる一杯の水のために、彼等は汝を非難すべし。

お、わが君よ、と、彼は附け加へて言ひました。「成るほど私は飲みました。ですが、お願ひだから、何か喰べる物を頂きたいものですね。何でも家の中にあるもので宜しう御座いますよ。麵麩の一片であらうが、ビスケツトであらうが、葱であらうが、私には何でも同じことですよ。――アリー・シエーアはそれに答へました。「贅澤を言つてゐないで、さつさと出て行つて下さい。家の中には何も

ありませんよ。――が、基督教徒は直にそれに答へました。「お、わが君よ、お家に何もなかつたら、この黄金の百片を取つて、二人のために何か市場から買つて来て下さい。たゞ貴方と私との間に一緒に麵麩と鹽とを食べたと言ふ繋がりが出來さへすれば、麵麩菓子の一片塊でも可いんですよ。」そこでアリー・シエーアは心の中に考へました。「實際この基督教徒は狂人に相違ない。だから、この男の手から黄金の百片を受取つて、何か白銀の二片位な値打のものを買つて来てやつて、後でこの男を笑つてやらうよ。」すると、基督教徒は彼に言ひました。「お、わが君よ、私はたゞ空腹を癒やすだけのものが欲しいのです。それが酸つぽくなつた麵麩菓子であらうと、葱の珠であらうと、そんなことは構ひませんよ。最上の食糧は、空腹を癒やしてくれるもので、華やかな御馳走ではないと言ひますからね。かう言つた詩人の言葉は、いかにも立派なものでは御座いませんか。――

酸ばみたる麵麩菓子にても、空腹は癒ゆるものぞ。さらば、わが悲しみと煩ひとは、何故にかく大なるや。

死は最も正しき義者ぞ。教王にも、又憐れなる貧民にも、均しく偏頗なく來るを見れば。」

アリー・シエーアはそこで彼に言ひました。「私が居間に錠を掛けて、市場から何か買つて來るま

で、此處に待つていらつしやい。』すると基督教徒は答へました。「はい、畏承りました。」それからアリー・シエーアは彼の傍を離れて、居間の扉に海老錠を叩きました。そして、その錠は手に持ったまゝ、市場へ行つて、揚げた牛酪だの、蜜だの、バナナだの、麵麩だのを買ひ求めた上、それを持つて歸りました。で、基督教徒はそれを見た時、聲を擧げて言ひました。「おゝ、わが君よ、これは又どつさりありませんね。十人で食べても剩る位ですよ。それなのに食べる者は私一人だ。で、恐らく貴方も私と一緒に食べて下さいませうね。」アリー・シエーアはそれに答へました。「一人でお食へない、私は満腹してゐますよ。」が、基督教徒は直様それに答へました。「おゝ、わが君よ、賢者達も客と一緒に食べない者は卑陋な人々だと仰有つてゐるではありませんか。」そこでアリー・シエーアはそれ等の言葉を聞いた時、下に坐つて相手と一緒に少しばかり食べました。そして將にその手を引つ込めようとしてゐた時、基督教徒はバナナを取り上げて、その皮を剥いて、二つに折つて、その半分は鴉片を交ぜた、精選した麻の實を塗り附けました。その一粒でも大きな象を倒すに足る位の麻酔劑で御座います。それから彼はそのバナナの半分を蜜の中へ突き込みながら、アリー・シエーアに向つて言ひました。「おゝ、わが君よ、貴方の宗教にかけて、これを食へて下さいな。」所が、アリー・シエーアは相手の誓ひを無駄にするのが羞かしかつたので、相手の手からそれを受取つて、それを呑み込んでしまひました。すると、それが胃の腑に落ち着くか着かないうちに、彼の頭は足の方に垂れ下

りました。そして、一年間も、睡りつゞけに睡つて来た人間のやうに、正體もなく、倒れてしまひました。

で、基督教徒はそれを見た時、年経た狼か、運命の魔手でもあるかのやうに、すつくと立ち上りました。彼は、居間の錠を相手から奪ひ取りました。そして、アリー・シエーアを倒れたまゝに捨て置いて、一散に兄の許へ駈けつけながら、自分のして来たことを彼に知らせました。で、彼がこんな振舞ひをしたのは、かう言ふ理由で御座います。——この基督教徒の兄は黄金の一千片でツムルツドを買はうとした、例の老いさらばへた老翁で御座いました。彼女は彼に買はれることを肯じなかつたばかりでなく、詩句でもつて彼を冷嘲したので御座います。彼は心は異教徒でしたけれども、表面は回教徒で御座いました。そして、ラシード・エド・デイーンと稱はれてゐました。で、ツムルツドが彼を冷嘲して、主人として彼を容れなかつた時、彼はそれを弟に訴へました。弟と言ふのは、彼女の主人のアリー・シエーアから奪ひ取るために、この計略を使つた基督教徒のことで、その名をバルスームと稱はれてゐました。で、彼はそれに答へて言ひました。「この事件のために餘り心を苦しめなさらぬが可い。私は白銀の一片も、黄金の一片も使はないで、計略でもつてその女を奪ひ取つて来て見せませうからね。」——かう言つたのは、彼が老練で、狡猾で、邪惡な魔法使ひであつたからで御座います。それから彼はさまざまの陰謀や計略を廻らして、たうとう前に擧げたやうな詐略を實行

したので御座います。で、その鍵を奪ひ取りながら、彼は兄の許へやつて来て、事の次第を彼に報告しました。

そこで、ラシード・エド・デインは驛馬に乗つて、従者どもを引き連れて、一千片の黄金を入れた財囊を携へながら、弟と一緒にアリー・シエーアの家に出懸けました。その金子は、若し警察官に出遇つたら、早速それを賄賂として差し出すため御座いました。彼は居間の扉を開けました。すると、彼と一緒に来た従者どもはヅムルツドの上に飛びかゝつて、物を言ふなら殺してしまふぞと脅しつけながら、無理矢理に彼女を引つ立てました。が、その家からは何一つ取らないで、そつくりその儘元あつた通りにして置きました。彼等は又アリー・シエーアをも廊下に倒れたまゝ、打捨つて置きました。それから彼の側に居間の鍵を置いて、そつと戸外から戸を閉めてしまひました。で、基督教徒のラシード・エド・デインはその娘を自分の假屋へ連れて来て、他の女奴隷だの、妾だの、中に入れました。そして、彼女に言ひました。「おゝ、この失禮な賣女よ、俺は主人としてお前に容れられなかつた。又、お前に嘲弄された老翁だよ。だが、今度こそ俺は黄金の一片も、白銀片の一片も使はないで、お前を此處へ連れて来た。」彼女は眼に涙を湛へながら、それに答へました。「貴方が私を主人から引離したに就いては、おゝ、このいけすかない老爺よ、神様が十分貴方に返報をして下さいませう。」——「おゝ、この無禮な賣女よ。」と、彼はそれに答へました。「おゝ、この戀に燃え上つた女

よ、俺がどんなにお前を苦しめてやるか、今に思ひ知るが可い。わが信仰にかけて、お前が俺の命令に従つて、俺の宗教に改宗しなかつたら、今に見よ、さまざまの拷問に掛けて苦しめてやるからね。」——が、彼女は言ひました。「たとひ貴方が私の肉を寸断々々に引き裂いても、私は決して回教の信仰を捨てませんよ。恐らく神様は——あゝ、神の御名は讃へられてあれよ——間もなく私を救ひ出して下さいませう。神様には何んなことでも出来ないと云ふことはありませんからね。それに賢者も宗教に於ける悪を忍ぶよりは、肉體の悪を忍べと仰有つて御座いますよ。」それを聞いて、例の老翁は宦官や女奴隷どもを喚び出しながら、彼等に命じました。「この女を引き倒せ！」そこで、彼等は彼女を引き倒しました。そして、彼は何時までも彼女の上に残酷な鞭打を加へました。その間彼女はひい泣きながら助けを呼びました。が、誰も助けに来てくれる者はありませんでした。それから彼女は助けを求めることを思ひ留まりました。そして、「神は私の十全であります、又實際十全のお方で御座います！」と言ひ始めました。——だん／＼彼女の聲は弱つて、その呻き聲も聞えなくなりまして。で、彼女の刑罰に満足した時、老翁は宦官どもに向つて言ひました。「足を持つてこの女を引き摺つて行つて、臺所に抛り出して置け、何にも食べる物を遣つてはならんぞ。」——それからこの呪はれた悪漢はその夜を明かしました。明くる朝になつて彼は又彼女を自分の前に引き出させながら、再び鞭打を繰り返しました。その後で、彼は宦官どもに命じて、元の所へ彼女を抛り込ませました。そし

で、彼等はその通りにいたしました。で、鞭打の痛みが少し和いで来た時、彼女は言ひました。「神の外に神性はない、モハマッドは神の使徒で御座います！ 神は私の十全であります。あゝ、わが保護者は優れてましますかな。」——それから彼女はわれ等の主モハマッドの助けを懇願しました。神よ彼を祝福し、且助けたまへ！——彼女の事情はこんな風で御座いました。

所で、アリー・シエーアはどうかと言ふと、彼は次の日までそこに打倒れたまゝ、眠り續けておりました。そして、麻の實のために引き起された酔ひがやう／＼頭から去つた時、彼は眼を見開いて、大きな聲を擧げながら、「おゝ、ツムルツドよ。」と喚ばはりました。が、誰も返辭をしませんでした。彼はそこで居間へ這入つて見ましたが、内部は空洞として、人の氣配もありませんでした。そこで彼は、あの基督教徒さへ連れて來なければ、こんなことにはならなかつたのだと言ふことを悟りました。で、彼はわが妻戀しさに泣きました。溜息を吐いて訴へました。それから多くの詩を誦しました。彼は後悔しても何の役にも立たない時に、後悔しました。泣いたり、着物を引つ裂いたりしました。彼は二つの石を持つて、それで自分の胸を打ちながら、「おゝ、ツムルツドよ、ツムルツドよ。」と叫びながら、街の中をぐる／＼廻つて歩きました。で、子供達が後から躓いて來て、「狂人よ、狂人よ。」と囁きました。——そして、彼を知つてゐる人々は、みんな彼のために泣きながら言ひました。「これはかゝう言ふ人ですがね。何うしてこんなことになつたんでせう？」——かうして彼は日の暮れるまで

歩き廻つてゐました。夜の暗闇が彼に追ひ着いた時、彼は朝まで路地の中で眠りました。それから再び石を持つて、夕方まで街の中を廻つて歩きました。日が暮れた時、彼はその夜を過すために自分の居間へ歸つて來ました。

その時、彼の隣人で、非常に信心深い一人のお婆さんが彼の許へ遣つて來て言ひました。「おゝ、わが兒よ、神は御身を保護したまはむ！ 何時からお前さんはそんな狂人になつたのですか。」——すると、彼は次の二行の詩で彼女に答へました。——

「人は言ふ、おん身は戀しき女故に狂へりと。われは答ふ、人生の眞の甘さはたゞ狂人のみ知ると。

われ狂へりや否やは暫く措け、それよりも狂ふ程われの慕へる女を出だせ。その女のため  
にわが病癒ゆるとも、われを咎めずして可なり。」

そこで彼の隣人なるお婆さんは彼が戀しい女と別れた戀人であることを知りました。そして、彼女は言ひました。「高く偉大なる神の外に、この世に力も権力もない！ おゝ、わが兒よ、お願ひだから、貴方の不幸の一伍一什を私に語つてお聞かせなさい。恐らく神様は、それが神様の思召しでした



ら、貴方を助けてその不幸に打ち勝つことの出来るやうに、私を力づけて下さいませうよ。——彼はそこで、ラシード・エド・デインと稱する魔法使ひの弟で、バルスームと言ふ基督教徒と自分との間に起つた事柄を悉く彼女に話して聞かせました。彼女はそれを聞いた時、彼に向つて言ひました。「お、わが兒よ、成る程貴方のお嘆きなさるのには道理だよ。」かう言つて彼女は涙を流しながら次の二行の詩を誦しました。——

『戀するものの苦しきは、この世にて足れり。大神にかけて地獄では彼等は、苦艱を免れむ。

いかにとなれば、彼等情熱のために命を果たして、慎ましやかにそれを隠せり。この事の眞理は傳説にも明記されたり。』

で、彼女はそれ等の詩を誦し終つた後で、彼に向つて言ひました。「お、わが兒よ、直に立ち上つて、金の細工人が使ふやうな編籠を一つ買つていらつしやい。それからまた腕環だの、刻印つきの指環だの、耳環だの、その外女の欲しがるやうな裝飾品を買ひ入れていらつしやい。この際金を惜しんでゐては不可ませんよ。そして、それ等の物をみんな編籠の中へ入れて、それからその編籠を持つ

ていらつしやい。私はそれを女仲買人のやうに頭の上に載せて、家々を廻つて歩きながら、あの方を捜して來ますよ。それが、神様の思召しであるなら、何日かはあの方の消息が知れませうからね。ああ、神の御名は讚へられてあれよ。』

アリー・シエーアは、彼女の言葉を聞いて非常に喜びました。そして、彼女の手に接吻しました。彼は、それから直ぐに出懸けて行つて、彼女のつくつた品々を調べて參りました。で、それ等の品物が用意された時、彼女は立ち上つて、繼ぎはぎの上衣を身に纏ひながら、蜜のやうな色をした被衣を頭から被りました。そして、手に杖を握りながら、編籠を持つて、路地の中の家々を廻つて行きました。かうして場所から場所へ、區域から區域へ、横町から横町へ歩き廻つてゐる間に、たうとう神様は——あ、神の御名は讚へられてあれよ——あの呪れたる基督教徒ラシード・エド・デインの假屋へ彼女を連れて來ました。彼女はその中に女の呻き聲を聞いたやうな氣がしました。そこで彼女はその戸を敲きました。すると、一人の女奴隷が降りて來て、彼女に戸を開けてくれました。そして彼女に挨拶をしました。老婆はその女に言ひました。「私はこんな下らないものを賣りに參つたのですかね、何誰か貴方がたの中にそれを買つて下さる方はないでせうか。——その娘は彼女に答へました。「さう、あるかも知れませんが。——彼女は老婆を家の中に連れ込んで、そこに坐らせました。それから女奴隷どもが老婆の周圍に坐つて、めい／＼彼女から何かしら買はうとしました。お婆さんは

丁寧に彼等に物を言つて、品物の値段を成るだけ買ひ易くしてやりました。その結果彼等はみんな彼女の親切と、言葉の優しさのために、このお婆さんが好きになりました。その間、お婆さんは前に聞いた呻き聲の女を發見しようとして、遠くの隅々までじろくくと見廻しました。彼女の眼はその女に落ちました。そこで彼女は一層親切にその女奴隷どもを待遇しました。そしてその呻き聲を立ててゐる女を見遣りながら、それがヅムルツドの平這つてゐるのだといふことを知りました。お婆さんは彼女の誰であるかをはつきりと認めました。そして泣きながら、女奴隷どもに言ひました。「お、わが子供達よ、何うしてこの娘さんはこんな目に遭はされてゐるのですか？」すると、彼等は事の次第を彼女に語つて聞かせながら、かう附け加へて申しました。「わたし達が好きでこんな目に遭はせてゐるのではありませんがね、さうしろと言ふ御主人様の仰有り附けだから仕方がありませんよ。尤も主人は今御旅行中で御座いますがね。」すると、彼女は言ひました。「お、わが子供達よ、わたしから貴方がたにお願ひいたしますがね、何うか貴方がたの手でこの娘の縄目を解いてやつて、御主人のお歸りと知れるまで自由に置いてやつて下さいませんか。お歸りと分つた時、又、元の通りに縛れば何でもありませんよ。さうすれば、貴方がたはあらゆる生類の主から好い報酬が得られますよ。」彼等はそれに答へました。「よく分りました。さういたしませうよ。」そこで彼等はその女の縄目を解いて食物を與へたり、水を飲ませたりいたしました。老婆はそれから言ひました。「わたしの足が折

れでもして、こんな家へ這入つて來なければよう御座んしたね。」かう言ひながら、彼女はヅムルツドの傍に行つて、彼女に言ひました。「お、わが娘よ、神様がお前を保護して下さいよ。神様は直きにお前の苦しみを拂ひ退けて下さいませう。」そして、彼女は自分が彼女の主人なるアリー・シエーアから來たのだと言ふことを告げて、彼女即ちヅムルツドは今夜よく物音に氣を付けてゐなければ不可ないと言ふ約束を取り交はせました。そして、かう言ひました。「お前さんの主人は此處へ遣つて來て、假屋の前の床几の傍に立つて、お前さんに向つて口笛を吹くからね。お前さんの方でもそれを聞いたら、あの人に對して吹き返すんですよ。そして、繩を傳つて、あの人の許へ降りて行くんですよ。それから後は、あの人が好きな處へお前さんを連れて行くつてくれるでせうからね。」そこで、その娘は深く彼女にお禮を述べました。

老婆はそれから出て行きました。そして、アリー・シエーアの許へ歸つて、自分のして來たことを相手に告げました。そして彼に言ひました。「今夜、夜半にかうく言ふ處へいらつしやい。あの呪はれたる悪漢の家はそこにありますからね。その外見はかうく言ふやうなものですよ。それから假屋の下に立つて、口笛をお吹きなさい。すると、あの方が貴方の許へ出て來ますからね。さうしたら、貴方はあの方を連れて、何處へでも好きな處へいらつしやるが可いよ。」彼はそこで彼女に對して深くそれを謝しました。そして、日が暮れて約束の時間が來てから、彼はお婆さんの教へてくれた

場所へ行つて見ました。彼はそこに假屋が立つてゐるのを見て、成る程これだと思ひました。で、彼はその下の床几の上に坐りました。が、睡氣が襲つて来たので、その儘眠つてしまひました。——永久に睡りまさぬ神に光榮あれよ。——これまで長い間、彼は情熱の興奮から一睡も眠らなかつたので御座います。そこで、彼は醉漢のやうに眠つてしまひました。

で、彼がかうして眠つてゐる間に、見よ、一人の泥坊がその夜出て来ました。そして、何かを盗まうとして、町の裾をぐる／＼廻つて歩きました。それから運命に導かれて、その基督教徒の假屋の下へやつて来ました。そこで彼はそれを一周して見ました。が、何處にも這入れさうな口がなかつたので、なほその家を廻つて歩きながら、たうとう床几の傍へ遣つて来ました。そして、アリー・シエーアが眠つてゐるのに目を着けました。で、彼は相手の頭巾を奪ひました。恰度彼がさうした時、ツムルツドは戶外を覗いて見ました。そして、彼が暗闇の中に立つてゐるのを見て、それを自分の主人だと想ひました。彼女はそこで彼に向つて口笛を吹きました。すると、泥坊も口笛を吹いて返しました。そこで、彼女は黄金の一杯這入つた一對の鞍囊を手にながら、繩傳ひに彼の許へ降りて来ました。その時彼はその鞍囊を取り上げて、ツムルツドを背中に背負ひながら、電光のやうに駆け出して行きました。すると、その女は彼に言ひました。「あのお婆さんは、私のために貴方が病氣になつたと致へてくれましたがね。これは又何うしたと言ふのです、貴方は馬よりも丈夫ぢやありません

か。』泥棒は少しも返辭をしませんでした。そこで彼女は彼の顔に觸つて見ました。そして、彼の鬚が湯屋の箒のやうに生えてゐるのを發見しました。恰度豚が鳥を丸ごと呑み込んで、その羽毛が咽喉から突き出したやうに思はれたので御座います。で、彼女はすつかり慄毛を振つてしまひました。そして、「一體お前さんは何です？」と、彼に訊ねました。彼は彼女に答へました。「お、賣女よ、俺はアーマッド・エド・デネフの黨類で、クルド人のジャワーンと言ふ詐欺師だよ。俺達の仲間が四十人もあつて、それが皆今夜からお前の旦那様になつて下さるよ。」で、それ等の言葉を聞いた時、彼女は泣きました。そして、再びかう運命に追ひ着かれては、神の意志に身を委ねる外何うすることも出来な

いと知つて、——神の御名は讃へられてあれよ——泣きながら、びしや／＼顔を打ちました。彼女はそこで何事もちつと堪へ忍んで、一身を神の御手に委ねました——あ、神の御名は讃へられてあれよ。そして、心の中に言ひました。「あ、神の外に神性はない！ わたし達は一つ心配から遁れたと思ふと、もう一層大きな心配の中に落ち込んでゐるんですよ。」

所で、ジャワーンが前に擧げたやうにあの場へやつて来たのは、かう言ふ譯で御座います。——彼はアーマッド・エド・デネフに言ひました。「お、詐欺師よ、私はこの前にも此處へ来たことが御座います。そして、この町の外廓に、悠に四十人を容れるに足るやうな一つの洞穴を知つてゐます。私は貴方のいらつしやる前にそこへ行つて、その洞穴の中に私の母を入れて置きたいと思ふのです。それ

から私はこの都へ歸つて来て、貴方の幸運をためすために、何かしら其處から盗んで行つて、貴方がたのいらつしやるまで、その洞穴の中に貯へて置かうと思ふのです。で、その日の貴方の饗宴は何も彼も私が供給しますよ。』すると、アーマッド・エド・デネフはそれに答へました。『お前の思ふ通りにするが可い。』そこで彼は他の者が行く前にそこへ行つて、その洞穴の中に母親を入れて置きました。そして、それから出て来た時、彼は一人の騎兵が馬の手綱を取つたまゝ、そこに眠つてゐるのを發見しました。そこで彼はその騎兵を斬り殺して、その被服と、馬と、武器とを奪ひ取りました。そして、馬をそこへ繋いで置いたまゝ、それ等のものを母親と一緒に洞穴の中へ秘して置きました。彼はそれから町の中へ歸つて、だんく歩いて行くうちに基督教徒の假屋の下まで來ました。そして前に話したやうなことをしたので御座います。

彼はその娘を背負つて駈けつゞけに駈けて來ました。そして、彼女を母親に預けながら、かう言ひました。『朝になつて私が歸つて來るまで、この女の番をしてゐて下さい。』かう言つて置いて、彼は又出て行つてしまひました。そこで、ツムルツドは一人心中に言ひました。『何か計略を廻らして、此處から遁れようもしないで、かうしてぢつとしてゐるのは、自分ながら、餘り腑甲斐ないではないか。あの四十人の男が遣つて來るまで、ぢつと待つてゐる法が何處にありませう?』それから彼女はクルド人ジャワーンの母親なる老婆の方を見遣りました。そして、彼女に言ひました。『お、

わが伯母上よ、貴方は立ち上つて、私と一緒に洞穴の外へお出になりませんか。さうすれば、私は日光の中で貴方の髪を梳いて上げますよ。』『さうね、大神にかけて、お、わが娘よ。』と、老婆は答へました。『長い間私も湯へ入つたことがないんだよ。あの豚どもが始終私を彼方此方と引張り廻してばかりゐるものだからね。』そこで、ツムルツドは彼女と一緒に出て行つて、何時までもその髪を梳いてゐました。その間にお婆さんはうとくと眠つてしまひました。それを見てツムルツドは立ち上りながら、クルド人のジャワーンに殺されたと言ふ騎兵の被服を身に纏ひました。そして、腰に劍を下げながら、頭巾を被りました。その結果、彼女は宛然男のやうに見えました。それから黄金を一杯詰めた鞍囊を手持つて、『お、慈悲深い保護者よ、妾を保護したまへ、妾はモハマッドの御名によりて君に祈る。神よ、彼を祝福し目助へたまへ!』と言ひながらその馬に跨がりました。それから彼女は心の中に言ひました。『私がこの儘都へ行つたら、恐らくこの騎兵の家族の何者かに出會ふかも知れない。さうしたら、好い事は私の身に起らないだらう。』そこで、彼女は都へ這入ることを思ひ止まつて、その馬と二つの鞍囊とを當てに、地上の野菜を喰ひ、馬にもそれを喰はせ、河の水を飲み、馬にもそれを飲ませながら、十日の間荒れ果てた沙漠の中を進んで行きました。すると、十日目に、いかにも繁昌してゐるらしい、見るも快い、平和な都が彼女の前に現はれました。冬はその寒さと共にその町から立ち去つて、春が花や薔薇と一緒にやつて來ました。その花は